DMC5のクリフォトの樹の実をｵｲﾁｲｵｲﾁｲしまくってたら人魔問わず全方位から警戒されまくってて草

美味しいパンをクレメンス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリフォトの樹が生えてきた！（自分で種蒔いた）

なら、これはもう実った果実を食うしかねぇよなぁ!!

オイチイ！　オイチイ！　クリフォトの樹の実オイチイよぉぉぉぉ!!!

よし！

何年経っても同族同士で戦争ばっかしてる愚かな人類共よ！

勢力拡大に日夜励み弱肉強食を貫く魔物達よ！

俺がもっともっとオイチイオイチイする為に、もっともっと争うのだ!!

目次

血染めの種蒔き ―― 1
座ってるだけでいいとかマジ楽 ―― 9
初めての収穫、そして初めての―― ―― 19
恒例行事にして通過儀礼 ―― 29
人間の敵が人間社会で暮らすって皮肉よね ―― 37
戦争ほど命の価値が軽いものはない ―― 47
犯人の事件簿 ―― 57
お前も魔王にならないか？ ―― 65
神……　とついでに勇者 ―― 81
勇者に因縁つけられた ―― 91
勇者よ光あれ（物理） ―― 107
ずっと、楽しい日々が続くと思っていた ―― 123
地獄之王（ザキングオブヘル） ―― 135
引きこもりのニートをしていたら大変な事態になってた件 ―― 144
事件の結末とその後 ―― 165
原初の悪魔達　前編 ―― 189

血染めの種蒔き

気がついてまず目についたのは血の海。鼻腔をくすぐるのはむせ返るほどの血の匂い。太陽が真上から眩しい光を降り注ぎ、足の踏み場がないほどに埋め尽くされた死体達を照らす。

何がなんだか分からず呆然として、暫くの間立ち尽くしていた。

何故こんな場所にいるのか、ついさっきまで自分が何をしていたのか、そもそも自分が何者なのかすら分からない。

突然のことで頭の中は混乱していたが、心の何処かで冷静に状況を把握しようとしている自分に気づく。

やがて、俺は眼前に広がる血の海とその中に浮かぶ大量の死体の様子から、ここが戦場の跡なのだということを理解する。

視界いっぱいには死屍累々。鎧を身に付けた人間の死体の山。扱う者を失い血の海に沈む剣や槍、斧や棘の付いた鉄球といった武器の数々。死体や地面に刺さりまくっている多量の矢。そして死体や武器と比べて数は多くないが二種類の国旗があちこちに打ち捨てられたように点在していた。

戦争、なのだろう。鎧や武器を見る限りでは中世かそれ以前の。旗が二種類ということは二つの国による戦争だと思われる。地平線の彼方まで死体で覆われていることから、戦争していた国は二つでも規模は大きかったというのは簡単に想像できるが。

何千人、いや、何万人か、もしくはそれより遥かに多いのか。この戦場で失われた命を数えることはできはしない。

それにしても――

「結構冷静だな、俺」

ん？　なんか凄くイケメンボイスなんですけど？

しかもいきなり死体なんて目の前にしたらガクブルジョワー確実のはずなのに。股間の息子ソードがその存在を極端に縮ませてもおかしくないのにそこまで動揺していない。

あれ？　股間の息子ソードよ、いつの間に貴様銀髪になってるの!?

あんなに黒々としてたジャングルが、綺麗に染めたみたいに銀色よ

！

っていうか全裸!?　あれ俺なんで全裸!?　身に纏うもんがないから丸出しで丸見えなんだけど！

どういうことなん!?　なんで全裸でその上黒いはずのモジャンボが特殊個体銀モジャンボみたいなメガ進化してんだよふざけんな！

更に言えば俺の首から下は『ウホッ、いい男！』と思わず唸ってトイレに連行したくなるくらいに無駄なく鍛え上げられていた。健康的でマッシブで、それでいて無駄がない、しなやかな体躯を誇る肉食獣のようだ。

一体何処のどなたのもの？　絶対に間違いなく『本来の俺』の体じゃないのは確か。

股間のソードもよく観察すれば慣れ親しんだ気がしない。以前の俺のがフォースエッジだとしたら今のこいつは魔剣スパーダみたいだよ。スティンガーすると伸びそうだし、赤黒いオーラを幻視しそう。

他にも変化がないかその場で可能な限り確認してみることにする。

次はとにかく鏡みたいなのが欲しい。この際贅沢言わん。死体の鎧とか兜とかの板金？　みたいなので顔見たい。

魔剣スパーダ（意味深）を納刀しないままそこら辺に転がる死体を何度か引っ繰り返すが良いのが見つからず。結局は死体に突き刺さってる剣（本物）を引っこ抜いてべったり付着した血を振り払いその刀身を鏡代わりにした。

そして驚愕する。目がこれでもかと見開く。

何なら『気づいたら死体だらけの場所で記憶喪失』よりも衝撃だ。

「……　顔は、声もか、デビルメイクライ５のネロで、髪型は３のダンテね。首から下は誰のか知らんけど……」

つまりはそういうことである。若々しいしイケメンだしで非の打ち所がないとはこのことだ。

「……」

いや、どういうこと!?

訳が分からんし、俺がスパーダの血族（？）みたいになってること

にも意味分からんし、何がどういう経緯で結果的にこうなったの!?
剣を放り捨てて一頻り頭を抱えてたらなんか段々思い出してきた。思い出したっつっても『本来の俺』の名前、俺がどんな奴だったのか、どんな生活をしていたかは思い出せないまま。
思い出せるのは、趣味に関する知識だ。それはつまりゲームやマンガ、アニメやラノベなどのオタク趣味。あとはついでのような感じの現代知識。
一番重要な本人のパーソナルデータないんですけど！　オタク趣味な知識が一番重要だから、とか言われたグーの音も出ないけどさ!!
「畜生！　これが夢でも幻覚でもなく現実で、俺が異世界転生したとかいうならなんか特典とか出ろファックユー!!!」
もうなんだかヤケクソになった。ヤケクソになったから右手の中指を立てて腕を高く掲げた。デビルメイクライ５――ＤＭＣ５でネロがデビルトリガーを発動させる時の動作をまんましてやった。ついでに言えば最後のＦ言葉も本家の通りである。
今更冷静に考えると、変身ヒーローの主人公がファック言いながら中指おっ立てて変身するってどうなの？　しかもラスボスと戦ってる時のセリフだからなこれ。カプコンさん気合い入り過ぎだよ。
「……　何も起きな、うっ、ぐ！」
と思ってたら全身を襲う虚脱感。まるで体に力が入らない、むしろどんどん力が抜けていく。立っていることすらできず膝を突く。
「な、何が……」
起きたのか分からない。だが俺の動作に連動してこれは起きた。だとしたら何か意味があるはず、と思いたい。
虚脱感がなくなるまで蹲っていたら、とあることに気づく。中指を立てていた右手の中に、何かある。
恐る恐る手を開けば――
「豆？　いや、なんかの種か？」
としか思えない奇妙なものが一粒あった。大きさは大豆より大きく空豆よりも小さい。見た目はリンゴの種のまんま。
いつの間に？　こんなものを握っていたはずはない。

訝しんで掌の上のものを左手の人差し指と親指で優しく摘まむ。
と、

《クリフォトの種》

脳内に情報が流れてきた。声が聞こえてきた訳でもなければ説明文的なものが表示された訳でもない。すっ、と頭の中に入ってきてまるで既知の出来事を振り返るかのような、不思議な感覚。
何だこれは？
……　ま、それは一旦置いておくとして。
情報が流れてきてこれが何なのか分かったのはいいけど、クリフォトの種ってあれだろ？　人間の血を吸って成長する魔界の樹、その種ってこと？　最終的には禁断の果実をつけて、それを食ったものは絶大な力を得る……　ＤＭＣ５におけるキーアイテム的な存在。
ゲームにおけるクリフォトの樹は、人間を何万人も犠牲にした。もし本当にこれがクリフォトの樹の種ならば、どう考えても文字通りの意味で災害の種でしかない。
こんな厄ネタは捨てるの一択でいいはずなのだが。
「捨てるって、何処に？」
辺り一面血だらけの死体だらけ。こんな場所に捨てたら即発芽してトトロの森なんて比較にならんほど巨大な樹が生えまくってナウシカの腐海すら霞むくらいヤバイ環境が誕生する気がする。
しかもこれ、なんでか知らんけど俺の手の中から出てきたんだよな？　ってことは俺が生み出した俺の種……　いや、下ネタ的な意味ではなくて。
「うーん」
摘まんだ種をしげしげ眺めつつ、もう片方の手を顎に当てて考える。
捨てるのがいいと分かっているが、どうしても捨てるという選択肢を選べない。
いや、正直に白状するなら捨てるなんてとんでもない、使ってみた

いというのが本音だ。
まるで種が声なき声を囁いているかのようだ。
種を蒔いて発芽させろ、樹を育てて果実を食らえ、そして絶大な力を手に入れろ、と。
まさにそれは悪魔の囁きだった。
少しずつだが確実に《魔》というものに、絶大な力が手に入るということに魅入られていくのを自覚する。
この世は弱肉強食。弱い者は強い者に食われて死に、強い者は弱い者を食って生きる。その摂理にはたとえ神でも抗えない。
弱いままで生き続けることは愚かなことだ。弱いままでは何も守れない。自分の命さえも！
だから言え、あの言葉を口にしろ。魂の奥底から願え!!
誘惑に抗えない。
頭に、心に響いてくる悪魔の声に応じるようにして、否、むしろそうするのが自然だと、謎の声に従うことが当たり前だと感じながら俺は言葉を紡ぐ。

「Ｉ　ｎｅｅｄ　ｍｏｒｅ　ｐｏｗｅｒ」

それはまさに引き金となる言葉。
次の瞬間、掌の上にあったクリフォトの種がひとりでに動く。手から勝手に弾かれたように飛び出し、足下の死体にくっ付く。
種が割れて発芽。先端が針のように鋭い触手（恐らく根や蔓）が死体に絡み付いて突き刺さり、その血を吸い始めた。
吸血を開始して間もなく、死体が乾いていきミイラみたいになると同時に触手は肥大化し、瞬く間にアナコンダのような太さと長さになる。
それからは爆発的だった。最初の死体――既に元が何なのか分からないほどにボロカス状態――に絡み付いていたクリフォトの触手は、新たな触手を十数本を発生させ放射線状に広がり周囲の死体を食い荒らす。そしてまたその身を増殖させて広がり続けていく。

悍ましい光景に目を離せないまま呆けていたら、すっかり周囲はクリフォトの触手だらけになっており逃げ場を失っていた。
「あー、俺、触手プレイ的なのはあんま好きじゃ――」
ない、と言い切る前に触手の群れが襲いかかってくる。ろくに抵抗も許されず全身に触手が巻き付き体を拘束され、腕や足、腹、胸、背中に鋭い先端が突き刺さり、激痛に悶えつつ早まったと後悔し始めたところでもう遅い。
これは死ぬ。体内の血液どころか何もかもを吸い尽くされて干からびて朽ちる。惨めで無様で哀れな末路を迎えるのか。
だが、待っていたのは全く逆のことだった。
「は？　痛みが……」
痛みが消えている。体中を穴だらけにされたのに、今はもう痛くも痒くもない。
それどころか力が溢れてくる。活力が漲ってくる。体内の奥に、魂の底に大量の何かが外部から流し込まれるのを感じた。
体と魂が別の何かへと変質し、作り変えられていく。
クリフォトの触手は人間の死体から血を吸うのに対し、俺には何かを注いでいるんだ。
脳裏に過るのはＤＭＣ５におけるクリフォトの樹の設定。人間の血を養分に成長するクリフォトは、最終段階にまで育ち切るとこれまで得た養分を凝縮させた果実をつける。
その果実を食らうことで絶大な力を得ることになるのだが、種が発芽して果実が実るまでの約１ヶ月強、その他の方法でも力を得ることが可能だ。当然、力を得られる量は果実を食らうよりも劣るのだが。
それは、クリフォトから養分を注がれること。
バージルがそうだった。クリフォトが発芽してそれほど時間が経ってない段階で、当時既に敵無しの強さを誇るダンテを一蹴するほどの強さを見せた。ＤＭＣ１のラスボスである魔帝ムンドゥス、それと同格とされるアニメ版のラスボスのアビゲイルとＤＭＣ２のラスボスの覇王アルゴサクスを打ち倒したダンテを相手に、である。
最強の悪魔狩人（デビルハンター）であるダンテが一方的に負ける、という物語の序盤

は衝撃だったし、その後の強さのインフレ具合にはドラゴンボールみたいだと笑ったのは良い思い出だ。
つまり、今俺の身に起きていることこそが、バージルに起きたことと同じということ。

「つまり！　理由はよく分からんが俺にバージルムーブをしろという神のお告――」

《レッドオーブを入手。これにより『時空神像』の利用が解放。レッドオーブを時空神像に捧げることで武器やアイテム、スキルの入手、入手した武器やスキルの強化が可能》
「――げぇ？」
突如脳内に流れ込んでくる情報。先ほどクリフォトの種を見て理解した時のように、不思議な感覚が訪れる。

『古の戦いの技を欲す者。我に血を捧げよ』

頭の中に浮かぶのは、大きな砂時計を掲げている獅子の頭部を持つ人を象った黄金像の姿。ＤＭＣシリーズでお馴染みの時空神像だ。悪魔の血が結晶化したレッドオーブを捧げると主人公達を強化してくれるサポート的な存在。
……　あのさ、悪魔の血なんて何処にもないからレッドオーブなんて入手できないはずなんですけど。

『我に血を捧げよ』

血ならなんでもいいんかい。じゃあやっぱりさっき入手したレッドオーブって悪魔の血じゃなくて人間の血なのね。
うーん。血を捧げると力をくれるとか、完全に邪神の類いだよね。時空神像って外見は凄く神々しいというか神聖な感じの黄金像なんだけど、それでいいのか。しかも人間の血で代用が利くとなると、ま

るで俺がカルト宗教の信者みたいでなんかヤダな。
ま、ＤＭＣ４には悪魔である魔剣士スパーダを神と崇める宗教が登場するし、別にいいのか。
それに、上半身は人間の美少女で下半身は蛇の邪神も言ってたっけ。『命は粗末にしていいが食べ物は粗末にするな』的なことを。
この場合、時空神像にとって食べ物は血で、それを得る為の命は粗末にしていいことになる。
なら、問題ないか。
……　なんだか倫理観が普通の人間から逸脱してきてるな俺。
まだ某ゲームのように人間性を捧げてはいないはずなのだが、クリフォトの種を手にしていた時に聞こえた悪魔の囁きに耳を傾けた時点で知らない内に捧げていたのかもしれない。
今はただ、クリフォトの実を食らうその瞬間が楽しみで仕方ない。
クリフォトの触手でぐるぐる巻きにされてて視界も塞がり身動きも取れない状態で、自身の肉体が異形へ変じていくことに心地良さを覚えながら俺はほくそ笑んだ。

座ってるだけでいいとかマジ楽

クリフォトから養分を供給されるようになってから数日が経過したが、調子はすこぶる良かった。

まあ、肉体は人間の姿から蒼い人型の悪魔――ユリゼンと同じになってるんだけどね。

そんな俺はユリゼンの姿で全身をクリフォトの触手に巻き付かれながら、超巨大化したクリフォトの樹の内部――ゲーム通りの玉座の間みたいな空間で――でのんびり座ってるだけっていう。

いや～、それにしても良いわこれ。超良いわ。

融合したクリフォトから絶えず養分が供給されてるんだけど、それだけで腹減らないし喉も乾かない。

何より時間が経てば経つだけ自分が強くなっていくのを実感できる。力がどんどん溢れてくる。

たとえるなら、ガソリンスタンドで燃料を給油する時のメーター表示みたいな？　給油し続けると給油量がどんどん増えてって、それに比例して支払い料金のメーター表示も増えるでしょ。あれを俺に置き換えると、クリフォトの養分が給油されるガソリン、支払い料金が俺が得た力そのもの。座ってるだけで確実に強くなるとか……　ニヤニヤが止まらんな。

おまけにレッドオーブもどんどん貯まってくので、使わないと勿体無いからバンバン使いまくることに。

とりあえずユリゼンと言えば闇魔刀バリアーなので、レッドオーブを脳内の時空神像に捧げて闇魔刀をゲット。闇魔刀を入手したことで闇魔刀そのものの強化や技の取得ができるようになったので、闇魔刀を水晶体へ変化させてバリアーにする技を使えるようにした。

せっかく闇魔刀を手にしたんだから本当は次元斬とか疾走居合とか使えるようにしたいけど、ユリゼンの姿じゃそれらは使えないのでまたの機会に回す。

で、一応は座ったままでも戦えるようにユリゼンの攻撃方法（火炎弾とか魔力の矢の雨とかビームとか）をゲット。

二つの国が戦争してたみたいだから、それぞれの国の兵士達が戦場跡に聳えるクリフォトの樹を見て乗り込んでこないとは限らないからね。念の為の自衛手段を用意したかった訳だ。

あとは、体力の上限を増やすブルーオーブと魔力の上限を増やすパープルオーブを現段階のレッドオーブ量で買えるだけ買って、一旦時空神像でのお買い物は終了。またある程度貯まったら買い物をするつもりだ。

今の俺がどのくらい強いのかはまだ不明だが、ちょっとやそっとのことなら問題ないかと思う。何度か手にした攻撃を試してみたけど、掌を前に向けて念じるたけで火炎弾とか発射できるし。ちょっと楽観的か？

「……なんとかなるはずだし、なんとかしよう。頑張れ俺」

ユリゼンの姿なので喋るとまさに悪魔の王のような低く威厳のある音声が口から出るのだが、内容そのものはいささか情けない人間臭さに我ながら苦笑してしまう。

次はどんなものを時空神像から購入するか考えながら、上機嫌にＤＭＣ５のネロのテーマ曲『Ｄｅｖｉｌ　Ｔｒｉｇｇｅｒ』を鼻歌で唄う俺であった。

その樹は、樹と呼ぶにはあまりにも巨大であり、他の植物と比べてとてつもなく醜悪であり、信じられないほど邪悪な気配を放つ悪夢のような存在だった。

しかもその樹はたった一晩で忽然と現れたのだ。

合わせて十万以上の兵士達がぶつかり合い、そのほとんどが命を散らした戦場の跡に、たった一晩で。

その知らせを聞いて誰もが最初は冗談だと笑い、次に嘘だと疑い、続いて本当かと問い返し、最後には実際に目にして戦慄する。

天を貫き頂上が見えないほど高く、山に匹敵するほど太く、見る者の正気を抉るほどの禍々しさ。

数キロメートル離れた場所から見ているにも関わらず視界の中で

異様な存在感がある。端的に言ってそれだけ巨大なのだが、そんな物体が平野だった場所にいきなり現れれば、信じられない、信じたくないという気持ちになるのも無理はない。人智を超えた災厄がいつか自分達に降りかかるのではないかと人々は恐怖する。

その樹は、人々にとっては見ているだけで根源的な恐怖を引き摺り出す何かがあった。

故に人々はこの樹の排除を願い、動き出す。人間同士で戦争をしている場合ではない。何としても、敵国と協力してでも即刻あの樹を切り倒し、根こそぎ焼き払うべきだと。

しかし、それが人々の手によって達成されることはなかった。

樹を滅する為に向かった者達は、ほとんどが帰らぬ人となったのだから。

国の軍隊、凶悪な魔物を屠った英雄達、それらが悉く。

それでも僅かに生き残った者達がいて、彼らから得た貴重な情報によりいくつかのことが判明する。

樹の名前はクリフォト。

人の血を啜る悪魔の樹。

樹には悪魔の主が存在し、その主が満足するまで――周囲の命を吸い尽くすまで樹が枯れることはないという絶望。

逆に言えば、吸われる命が無くなってしまえば樹は枯れるという唯一の救い。

やがて人々から畏怖と嫌悪を込めてこう語り継がれる。

邪悪な樹クリフォト、それは悪魔の城。

吸血樹クリフォト、それは生きとし生けるものを吸い尽くす。

災禍の魔樹クリフォト、それはこの世にあってはならない破滅の象徴。

なんかいっぱい攻め込んできたんですけど!?

暫くの間気分良く鼻歌唄ってたら、クリフォトの樹の内部にたくさんの兵士の方々が雄叫びを上げながら突撃してきた。

樹の内部に侵入しようとする前、外から燃やそうとしたり破壊しようとしたり、それこそ色々な魔法を駆使して頑張ってたみたいだけど、いくら頑張っても焼け石に水で魔法使える人達が疲れちゃったらしい。

クリフォトって燃えにくい植物のようで火はなかなか点かないし点いてもすぐ自然に鎮火する上、樹がデカ過ぎて他の魔法による攻撃も全く有効ではない。手榴弾で山を破壊する感じだから本気で実行すると気が遠くなりそう（他人事）。

んで、これ見よがしに内部へ侵入する為の穴（樹洞）みたいなのあったら、そりゃ突撃かますか。

内部はクリフォトが作り出した異空間というか、外の空間とは隔たりがあるんだけど、罠もなければ進路を邪魔する者もいないので、侵入してから一時間くらい経過したら開始したばかりのコミケかと思うくらいの勢いで兵士の方々（オタク）が武器を手に俺（人気サークル）が座ってる広間にご来場。

「何だ貴様は!!」

「この樹の主か!?」

「まさか悪魔の仕業だったとは!!」

「成敗してくれる!!」

「地獄に帰れ!!」

「怯むな皆の者、悪魔といえどたったの一匹！　皆でかかれば倒せようぞ!!」

口々に好き勝手言うと突っ込んできた。

が、俺はそれを許さない。樹に命じて、兵士達の足下から触手を伸ばし串刺しにさせる。

「ぐわ！」

「ぎゃあっ!?」

「ごばっ」

一斉に足下から槍のように突き出た触手が期待通りに働いてくれた。腹や胸、背中、首や顔、酷い者は股間を貫かれ、断末魔の叫びと血飛沫を上げ絶命し、さっきまで騒がしかったのが嘘みたいに一瞬で

静かになる。
血が地面を赤黒く染めるが、地面もまたクリフォトの樹の一部である為、血の汚れも吸われて消えていく。
「ひぃ……!!」
「お、お、お助け……」
どうやら運良く生き残った人が二人いた。
恥も外聞もなく泣きじゃくり、鼻水を垂らし、尻餅を着いてお漏ししながら恐怖に震えている。
そんな二人の目の前で、触手に串刺しにされた他の兵士達がそのまま血を吸われてあっという間に干からびてボロボロと崩れ落ちた。
いくつもの武器や兜、鎧が転がって乾いた音が立つ。
「「ひぃいいやぁぁぁぁぁ!!!」」
二人は揃って泣き喚く。自分達の待ち受ける残酷な運命に絶望しているのだろう。
ここで俺が悪役ムーブで話しかける。
「愚かな人間共」
「「っ!?」」
固まったように動かなくなる二人に俺は威厳たっぷりの口調で告げた。
「俺はこの樹、クリフォトの主」
即興でセリフを考えながら、一つ一つ丁寧に言う。
「貴様ら人間を贄とする者だ」
人が死ぬのを目の当たりにして、自らの手で殺したのに何の感情も浮かばない。
人間の兵士達が攻めてきた時、養分が自分からやって来たかと思ったくらいだ。
まるで心も体も悪魔になったかのようで、実に楽しい。
「さあ、貴様らも贄になれ」
言い終わりニヤリと笑ってやった。今の姿はユリゼンなので、さぞ凶悪な笑顔になったであろう。
案の定、二人は悲鳴を上げることすらせず我先にと脱兎の如く逃げ

ていく。
それを見送ると、ふーっと溜め息を吐いた。
「悪役ロールプレイって、楽しいけど疲れるな」
敵の迎撃に成功、ということで何故か報酬として入手したレッドオーブをどう使おうか思案する。
さて、これで外の人間達はどのような手段を取るだろうか。
三十人以上いた兵士がたった二人になって帰ってきた。
中には樹の主を名乗る一匹の悪魔が鎮座しており、人間を贄にすると宣言。
人間側の最適解としてはとっととクリフォトから離れて金輪際関わらないこと一択だが。
「きっと来るだろうな」
半ば確信した俺は、レッドオーブと養分に臨時収入キタコレ！　程度にしか思わない。

で、やっぱりたくさんやって来ました人間の兵士さん達。
ここであることに気づく。
クリフォトの種を蒔く前の戦場跡って二つの国が争ってたぽいって思ってて、その予想は間違いなかったんだけど、なんでキミ達は仲良く一緒になって突撃してくるのかな？
少し前まで戦争してたんじゃないの？　もう停戦なり休戦なりしたの？
俺という敵を前に人間同士で争っている場合ではないと漸く理解したの？
ま、なんでもいいよ。皆殺しにして養分とレッドオーブになってもらうから。
ということで！
「虫けらが」
火炎弾を群がる兵士達のど真ん中にシュー！　超！　エキサイ

ティング!!
着弾したそれが爆発して範囲内の人間を粉微塵にぶっ飛ばす。
「雑魚がいくら数を揃えようと」
魔力の矢を彼らの頭上から雨のように降らし、それだけでバタバタと倒れていく。
「無駄だと知れ」
最後に薙ぎ払いビーム。白い破壊の光が俺の正面の魔法陣から放たれ、それを左右に振ることで立っている者がいなくなった。
さっきまで命だったのが辺りに散らばっている。
迎撃成功！　何故かゲームのミッションとかの任務達成扱いで成功報酬でもらえるレッドオーブにウッハウハ!!
いいよいいよ！　こういうのもっとちょうだい!!

それから数日間はフィーバータイムだった。果敢かつ無謀にも攻め込んでくる人間共を血祭りにしていく。
クリフォトにとっては血をチューチューできてオイチイ！
俺は迎撃すればレッドオーブが手に入ってオイチイ！
そして養分をクリフォトから供給され、レッドオーブを時空神像に捧げ、俺はどんどん強くなる。
文字通りの血祭りな日々に俺は歓喜して酔いしれた。
何だこれ血祭り最高かよ。ワッショイワッショイ！　ワッショイワッショイ！
攻めて来る人間共も少しずつ強くなってきたのが面白い。最初の頃はいかにも雑兵、一般兵って感じのがたくさんやって来ていたが、量より質でないとダメと決断した後は少数精鋭で来襲。カッコいい言い方をするなら軍の虎の子部隊とか、〇〇騎士団とかな。それ以前の連中より装備が充実しており連携が取れた動きを見せてくれる。
それでもこっちの遠距離攻撃が強力過ぎて、まともな一太刀を浴びせることもできずに全滅するんですがね。
たまーに、本当にたまーにだけど中にはこっちの遠距離攻撃をなんとか掻い潜って剣を振り下ろす奴もいたが、

「だが残念」
闇魔刀バリアー!!
トゲトゲした水晶体に姿を変えた闇魔刀が難なく敵の剣を防ぐ。
ダンテですら破ることができなかった闇魔刀バリアーを、腕が多少立つとはいえただの人間が破るなど逆立ちしたって無理だ。少なくとも魔界の帝王を余裕綽々でぶっ殺せるくらいの戦闘力になってから出直して来な。
「何っ!?」
渾身の一撃を受け止めた水晶体を見て目を見開き、動きが止まったその足下から蒼い炎の火柱がどーん！
「ぐあああああっ!!」
ウルトラ上手に、焼けました♪
ってダメだよ。コンガリ焼けたら血を吸えないじゃん！　ウエルダンは明らかにやり過ぎだったな。
まあええわ、次からは焼き加減ミディアムレアで。
じゃあはい、次の方どーぞ。
弱っちいのをたくさん倒すことより、少数の強いのを倒した方がレッドオーブ取得量は多いけど、それだとクリフォトの養分である血は多く得られない。個々の人間の強さは、養分に関して因果関係はないようだ。
なので、弱いのたくさん、強いのもたくさん攻めて来て欲しいのだが、そうは問屋が卸さず。
大人数でのご来場はなくなってしまいました。厳密に言えば軍隊とか騎士団みたいな人達、在庫切れなのかもう全然来ない。ぷよぷよみたいに全消しやりまくったせいだろうか？
その代わり、装備や戦い方がそれぞれ異なる数人のチームらしき集団――ＲＰＧゲームでいう剣士、魔法使い、盗賊、僧侶、その他の職業って感じの冒険者？　冒険者だよね？　な人々がエントリー。
うわっ！　マジでゲームみてーだ！　と感動しながらボンボコ遠距離攻撃しまくります。
「「「グワー!!」」」

でも弱いぞ。
粉砕！（急襲幻影剣）
玉砕！（烈風幻影剣）
大喝采！（五月雨幻影剣）
の三連コンボで全滅とかちょっと悲しい。そんなんじゃ魔王どころかフィールドマップでランダムエンカウントする雑魚にすら勝てないぞ。まさかブチスライムを倒すのに数ターンかかるカスじゃあるまいな？
兵士諸君や騎士団様達では全く見なかった女性が冒険者達からはチラホラ見られるようになった。一つのチームに紅一点ってのが多いんだけど。
男を殺すのは屁でもないけど女を殺すのは流石に気が引けた。フェミニストのつもりはないが、女性って出産あるし、こんなヤクザな商売辞めて結婚して子どもでも産んでくれれば人類滅ばないし、ということで基本的に女性は見逃すことに決める。
仲間の男は絶対、必ず抹殺するがな！　もし恋人とか夫が仲間内にいたとしても新しい恋でも見つけろってことで諦めてもらうのは確定事項だ！
そもそも戦場でなぁ、恋人や伴侶の名前を呼ぶ時というのはなぁ！
瀕死の兵隊が甘ったれて言うセリフなんだよ!!
そんなこんなで――

「……　誰も来なくなっちゃった……」
数日前の入れ食い具合が夢か幻だったかのような静けさに、俺の声が虚しく響く。
連日のボーナスタイムに『楽し過ぎて狂っちまいそうだ!!』って笑いながら血に狂ってたら、ある日を境にパッタリ誰も来なくなってしまった。
冒険者達も在庫切れ？　ちょっと追加発注したのにどうなってんの？　物流滞ってんだけど、担当者呼んでくれる？　折角お客様をおもてなしする準備万端なのに誰も来ないとか、クリスマス当日の星飛

雄馬はやめてくれよ。
「あー、マジで誰も来ない」
当然、樹は血を吸えないしレッドオーブも手に入らないので、俺に供給される養分も激減、時空神像に捧げるレッドオーブなんて節約の為に買い控えだ。クリフォトの経済は不況の真っ只中であり景気が良くなる気配は皆無。狂喜の渦へと巻き込んだバブルは弾けてしまったんだぁ（白目）。
「あれ？　そういえば種蒔いてからどんくらい経ったっけ？」
確か一ヶ月は既に経過したような――
「んっ!?」
その時である。クリフォトの樹からとある情報がもたらされた。
実った果実が熟した、という知らせだ。
「待ってたぜェ!!　この瞬間（とき）をよぉ!!」

初めての収穫、そして初めての――

クリフォトの実が完熟した。それに伴い、クリフォトから供給されていた養分が完全に停止する。

全身に巻き付き、点滴のようにあちこちに刺さっていた触手が役目を終えた為に抜け落ち外れていく。

クリフォトは最終段階に入ったのだ。あとは果実が収穫されるのを待つだけという状態に。

ならば俺が行うことは一つのみ。今すぐクリフォトの頂点に実った果実を収穫し、食らうこと。

「閻魔刀」

バリアーとしての役目を果たす為にトゲトゲした水晶体に姿を変えていた閻魔刀が、俺の声に呼応して本来の姿――黒い鞘に納められた刀に戻る。

続けて念じた。クリフォトの頂上、果実が成っている場所まで空間を繋げと。

すると見えない手に操られるように鯉口が切られ、鞘から抜かれた閻魔刀はその美しい刀身を晒しつつ目の前の空間を十字に斬り裂く。

閻魔刀にはいくつかの能力が存在し、空間や次元を裂いて穴を開けたりするのはその内の一つだ。それを応用して空間転移を行える。ＤＭＣ５でもバージルが何度かやってた。

斬り裂かれた空間へと踏み入る。

ＤＭＣ５だとクリフォトの樹の実がある場所というのは、樹の頂上であるのは確かだがそこは魔界の樹だけあって人間の常識が通用しない。クリフォトの樹の頂上は地下。地面の奥底だ。ムービーシーンで、ダンテが『頂上』と聞いて頭上を見上げたらトリッシュから『逆よ』と指摘されてるシーンがあったなぁ。

頂上が地下なら地上から真っ直ぐ上に伸びてる部分は何なのか？

それは俺も知らない。ゲーム本編でも語られてない、気がする。もしかしたらギャラリーとか設定資料か何かで説明があったかもしれんけど、俺は覚えてない。

で、閻魔刀使って進んだ先は広い半球状の大きな部屋みたいな空間。その中心には、肉の塊を材料に使い前衛芸術的な感じの樹を作成してみた、と言われてしまえば納得してしまいそうな気持ち悪い樹が一本生えている。その樹には葉っぱが一枚も生えておらず、唯一あるのは一つの果実が成っていることだけ。

本来ならこの空間は果実が幻覚を見せるらしい。ＤＭＣ５だとバージルの記憶から作られた『家族と幸せに暮らしていた家』の風景が映し出される。

それが奪われたが故に、彼は人として生きるのではなく悪魔として生きることを、力を求めるようになった。なんとも切ない話である。閻魔刀によってバージルから切り離された人間の心と体である『Ｖ』を主人公にしたコミックス『Ｖｉｓｉｏｎｓ　ｏｆ　Ｖ』では、そこら辺のことを事細やかに描写されてて俺は読んでて涙がちょちょ切れたぞ。

俺には過去と言えるそれらしいもんがすっぽり抜け落ちてるんで、何の幻覚も見えないし映らない、薄暗いただのクリフォトの樹の内部が広がってるだけなんですがね。

閑話休題。

クリフォトの樹の実。人間の血を養分とし、たった一つだけ実をつける。口にすれば絶大な力が手に入ると言われる禁断の果実。

「ダンテが言った通り、クソ不味そうだな」

手を伸ばせば届く距離まで近づいてしげしげと観察する。

シルエットはリンゴなんだけど果実の表面から血みたいなの滴ってるし、全体的に赤黒いし、赤黒くない部分は何故か黄色に光ってるし、はっきり言って見た目はマジでクッソ不味そう!!

しかもデカい。どんくらいデカいかっつーと人の頭くらいデカい。バージルは一口で食べてたけど、あれ、ユリゼンの姿の時ってお前悪魔から巨人族になったのかってくらいにバージルがデカかったからなんだよ。具体的にはダンテ達が二段ジャンプしないと近接武器での攻撃が顔に当たらないくらい身長高くなってたし。

そうなると自然とクリフォトの実も相対的にデカくなる訳で。

これ食うのユリゼンの姿じゃないと今後面倒だぞ。
まあ、次以降もクリフォトの種蒔いてから果実が完熟するまではユリゼンの姿でいるつもりだけどな。
「ということで、実際に食べてみよう」
壊れ物を大切に扱うように両手で優しく果実を掴み、収穫する。それほど抵抗なく枝からプツンと外れたそれを今一度眺めてから口の中に放り込み、噛む。
「……噛む度に血の味がするリンゴ」
いや、もうそう表現するしないわこれ。果肉そのものはあんまり美味しくない安物のリンゴの味で、果汁が血の味するんですわ。そういえばバージルが一噛みしたら血が吹き出てたなこの果実。
口に入れた瞬間吐くほど超不味い訳でもなければ、死ぬほど不味いとかじゃない。食えるけど、ただただ普通に不味い、美味しくない、という感想しか浮かばない。薬だと思って食うしかない。
文句を垂れながらモッキュモッキュとよく噛んで、ごっくんと飲み下す。
「げっぷ」
一度に一個食うのが限界だ。二個も三個も同時に収穫できたら日を分けて食うことになるが、幸いクリフォトの樹は一度に一つしか実をつけないので安心だ。
「お？」
食い終わると同時に体に力が溢れていくのを感じる。どんどん自分の魔力が、強さが上昇していくのを実感した。
「おお！」
その早さ、クリフォトと融合し養分を供給されていた時より遥かに早い。まさに段違い、否、桁違いに強くなっていく!!
「おおおおおおおおおおっ!!!!」
歓喜に震えながら天を仰いで咆哮する。しない訳にはいかない。俺の中の力が爆発的に高まっていくことに対して、
「最高にハイッてやつだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
ってな心境だから。

これは訂正しよう！　クリフォトの実オイチイ！　凄く凄くオイチイ！　何個でも、いや、無限に食えるねこいつは!!
腕がドリルになったみたいに掌クルックルしていたら、ゴゴゴゴゴという地響きと共に地面が揺れているのに気づいた。
「じ、地震？」
次第に地響きと揺れは強くなる。
見渡せば実が成っていた樹は白く石灰のようになったかと思えばボロボロと崩れてしまった。
それはＤＭＣ５で見たことがあった。クリフォトの樹がダンテ達の攻撃などで一部破壊されると、その部分が白くなって石灰のように脆く崩れ去る光景を。
「樹が枯れてる!?」
確かに俺個人としては果実を食ったら樹に用はないし、これ以上は周囲の迷惑（今更）だからとっとと斬り倒そうと思ってたけど、果実もいだら一分も経たずに枯れんのやめてくんない!!
部屋全体は既に白く石灰と化して輝が入り崩壊寸前といった様子だ。
くどい話だがクリフォトの樹の頂上とは地下。一番深い場所なので、このままじゃ生き埋めになる。
「や、や、閻魔刀ぉぉぉぉ!!」
俺の慌てた声に応じた閻魔刀が空間を斬り裂く。
あー、ホント最初にレッドオーブを捧げて入手した武器が、空間転移に応用できる閻魔刀で良かった。

閻魔刀のお陰でなんとか無事に脱出した俺は、樹が枯れて崩壊し、それによって山のように積み重なった残骸の前で安堵の溜め息を吐く。
ビビった。果実食ってハイテンションになってたのに一瞬で頭冷えたわ。今後は果実もいだら即離脱することにしよう。
頭が冷えたついでに思考を切り替える。いつまでもユリゼンの姿でいる必要はないので一番最初の人の姿に戻る。

戻ったら戻ったで全裸人間一丁上がりなので、早急に服を用意する必要があった。
ＤＭＣ５のトリッシュみたいに魔力で服を構成できないかな、と思って試しに脳内でイメージしたら簡単にできてしまったのは嬉しい誤算。
今の俺の装いはＤＭＣ３のバージルの服装をしていた。なお、色は青ではなく赤。バージルでプレイしてる時に戦うボス敵バージルの色なのだ。所謂格ゲーの２Ｐカラー、同キャラ対決時の相手の色である。
「さて、とりあえず」
これからどうするのか方針を決める前に、やるべきことがある。
ユリゼンの姿ではできなかった、ずっとお預けを食らっていたあれが、今、人の姿に戻ったことで漸くできる。
それは、
「閻魔刀」
入手した武器をとりあえず振り回す、ＤＭＣシリーズお馴染みのシーンの再現だ。
呼び声に応じて手の中に顕れる日本刀の形をした魔具を握り、俺は笑みを浮かべた。
嗚呼、これ超やりたかった！　でもユリゼンモードで玉座に座ってる間はやりたくてもできなかった。だから今この場でやるんだよ（使命感）!!
ちなみに閻魔刀の技は全て取得済み。強化はしてないので全部レベル１みたいなもんだが、それはこれから上げていけばいいのさ。
居合いの構えから鯉口を切り、抜刀。
目前のクリフォトの樹の残骸が斜めに斬り裂かれる。
うん！　体はイメージ通り動いてくれる。それが更に俺を興奮させた。
一太刀では終わらない。片手で何度かそのまま振り回してから、両手に持ち変えて更に何度も振り回す。その後一度納刀し、再度居合い斬りを放つ。

それから暫くの間、何度も何度も刀を振った。記憶の中にあるゲーム内での動きを自身の肉体で再現できることに涙が出そうなほど感動しながら。レッドオーブを捧げて得た技を、ムービーシーンであった動きを、妄想の中だけだったものも一つ残らず実際に試してみて、それが実現可能であることを確認し狂喜して、飽きることなく時間も忘れて動き続けた。

「あ」

気がつけば、目の前にあったはずの残骸の山が綺麗に消し飛んでいた。どうやらはしゃぎ過ぎたらしい。

まあ仕方ないよね。通過儀礼で様式美だよこんなの。スパーダの血族は新しい武器を手にしたらはしゃいでその場で振り回す、テストにボーナス問題として絶対出るからな。

血振りするように刀を一度振り、刀をくるくる回してから背中に回した鞘――鯉口が上になるよう垂直に持って納刀。チン、と小気味いい音が立つ。ＤＭＣファンからは背面納刀と呼ばれる、やたらカッコいいけどよく考えてみたら『なんで背中で納刀するん？』と首を傾げる納刀方法だ。全く以て実戦的じゃない背面納刀だが、敵を皆殺しにしたらいくらでもカッコつけていいんだよ！　この一連の動きがカッコ良過ぎて脳汁出まくりだからこれでいいんだよ！　ＤＭＣファンはそれがスタイリッシュなら野暮なツッコミはしない、いいね？

よし、ある程度は満足したし、これからどうしようかな？

まずは人里とか、人間が暮らしてる所で情報収集でもするかな。この世界のこと、来てから一ヶ月は経ってんのに何も知らないのヤバいし。

あれだけ人間殺しといて何考えてんだって話しだけど、別に俺は人類滅ぼしたい訳じゃないし、快楽殺人者って訳でもない。確かに戦場の死体を利用させてもらったが、その後に問答無用で襲いかかってきたのはあっち。俺がやったのは殺意に対して殺意で返しただけ、売られた喧嘩を買っただけ。血祭りヒャッホーしてたのは事実だが、あれは殺しを楽しんでいたんじゃなくて強くなることが楽しかったんだ

!!　苦しい言い訳だがつまりは、俺は悪くねぇ！　俺は悪くねぇ!!
あ、そういえばこの台詞が出てくるゲームも何の因果かクリフォトって単語が出てくるっけ。
とにかく動こう、何処に行けばいいのか分からんが。
そう考えて辺りを見渡した瞬間、遠くから何かが近づいてくる気配を感じた。
こちらに近づく速度はとてつもなく速く、その気配から察せられる力量はとてつもなく強大だ。
一瞬、早く逃げなくてはと考えるが、逃げてどうするのか、本当に逃げられるのか、逃げても無駄だと判断し待つことを決める。
数秒後、少し離れた場所にそいつは音もなく優しく降り立った。
鮮血のような美しい赤い長髪と、髪と同じ色の赤い瞳を持つ、整った顔の成人男性の姿をした人物。しかし外見は普通の人間に見えてもその身から放たれる存在感と魔力は凄まじい。
何よりもその気配と匂いが、この男が俺と同族であることを本能的に理解し、確信させる。
悪魔。この世界の、俺が初めて出会う人間以外の存在。
つい閻魔刀の鞘を握る左手の力が強くなり、逆に右手はいつでも抜刀できるように力を抜く。
赤い男が口を開いた。
「よう。俺は『ギィ』。お前は？」
良く言えばとても気さくな感じで、悪く言えば馴れ馴れしい、まるで久しぶりに会った友人に対する口調で名を名乗りこちらの名を聞いてくる。
紳士的なのか、緊張している俺とは対照的に余裕があるのか、それともこれが素なのか、いまいち分からないが俺は彼から底知れぬ力を感じていたので警戒を緩めぬまま答えようとして、固まる。
俺の名前、どうしよう？
前世の……　前世？　ホントに前世か？　とにかくオタク知識＆現代知識の源である過去の俺の名前は思い出せない。まあ、この際それはいい。覚えていたとしても日本人ちっくな名前はこの姿に似合

わないのでどちらにせよ名乗るつもりはない。
　となると自分で考えるべきなのだが、ＤＭＣに関連する名前にはしたいものの、ダンテとか主人公達の名前を頂戴するのは流石に気が引ける。
　どうする？　とりあえず名前はまだないって答えておこう。
「……　俺に名前はない」
「名無し？　本当か？　それだけの力を持っていながら未だに名無しとは信じられねぇな。受肉はしているようだが……　お前はどの系統だ？」
「受肉？　系統？　何の話だ？」
　なんだか理解が追いつかない。思わず聞き返してしまうと、ギィは訝しげに首を傾げてこちらを睨んでくる。
　俺の返答が悪かったらしいが、なんでそんな態度されるのかマジで分からん。まず名前なんてあっても無くてもどうでもよくね？　受肉って悪魔は現世で活動するには肉体が必要っていうあれ？　系統ってそもそも何のこと？　分からんことだらけでこっちも首を傾げてしまう。
「なら質問を変えるぜ、クリフォトの樹はどうした？　さっきまでここにあったはずの、人間の血を吸う樹だ」
「……」
　どう答えようか迷って、あることを悟り答えず黙った。きっと俺が何を言っても無駄だ。こいつの目的は、最初から俺だったのだから。
「配下が集めた情報によると、一ヶ月前に突然ここに巨大な樹が生えてきた。樹の名前はクリフォト。人間の血を吸う悪魔の樹。内部には樹の主たる悪魔がいて、自分を討伐しようとした人間達を一部を除き片っ端から始末していたらしい」
「……」
「それが今じゃ影も形もねぇ。その代わりお前がいた。一ヶ月前から、クリフォトの樹が生えてきてからずっと感じてた妖気（オーラ）と同じものを放つお前が」
「単刀直入に言え。何が言いたい」

遠回しな言い方に少し苛ついてきたので促しながら覚悟を決める。俺が気配と匂いでギィが悪魔だと察したように、ギィも俺の妖気（オーラ）とかいうので個人を特定できている。つまり言い逃れや誤魔化しが意味を成さない。

故にギィが俺に害意を抱いているならば、全力で対処するまで。

「もし仮に俺がクリフォトの樹の関係者だとして、貴様はどうするつもりだ？　配下になれとでも言うつもりか？」

「ハッ、話が早くて助かるが、その前に俺はお前を色々と試したい」

嬉しそうに獰猛な笑みを見せてからギィの気配が膨れ上がり、俺が闇魔刀を召喚するのと同じように一振りの剣を手にし、全身の肌がビリビリするほどの敵意がぶつけられる。

好戦的な奴だなと思いつつ、応じるように腰を落として居合いの構えを取った。

「奇遇だな。実は俺も俺を試したいと思っていた」

緊張はしている。だが恐怖はない。むしろ興奮、高揚していた。

間違いなくギィは強い。人間達を相手にしていた時のような一方的な蹂躙とは異なり、必ず苦戦するだろうし激戦となる。そんな予感がした。

死ぬかもしれない命のやり取りの、真剣勝負。生まれて初めて――そして前世でもあり得なかったはずのシチュエーションに俺は期待せずにはいられない。

今の俺がどれほどのものなのか興味が尽きない。沸き上がる闘争本能が目の前の存在を叩き潰せと叫ぶ。

戦え、闘え、手にした力を思う存分行使しろと、まるで魂が言ってくるかのようだ。

「いくぞ、ギィ」

「来いよ、名無し」

それが開始の合図。

彼が応じた瞬間、俺は全力で踏み込んで刹那に間合いを詰めると居合い斬りを放つ。

その場から動かずギィは俺の斬撃に合わせるように片手で剣を振

るう。
刃と刃が激突し、轟音を伴って衝撃波が発生。
俺の閻魔刀とギィの剣越しに互いの視線が交錯した後、示し合わせたように同じタイミングでバックステップを踏んで間合いを離す。
俺にとって初めての、本当の戦闘が始まった。

恒例行事にして通過儀礼

「ハッ！」
一歩踏み込み斬り上げるような居合い斬りから、
「フンッ！」
真っ二つにするつもりで閻魔刀を振り下ろす。
しかしギィは余裕の表情で二連撃をそれぞれ下がるのみで対処。
俺は更に踏み込んで袈裟斬り、払い斬り、逆袈裟二連続斬と追撃するが全て避けられる。
むきになって閻魔刀を振るうがその後も悉く躱されてしまう。体を反らし、半身になり、下がって距離を取りギリギリ間合いの外に逃げられるのが続く。
当たらない。当たる気がしない。純粋な身体能力がアホみたいに高いぞこいつ!? あからさまに遊んでいるというのが丸分かりだ。その証拠として反撃してこない。
格上、そうは思っていたがこれほど差があるとは予想外。こうなったら一太刀でもいいから叩き込んでやりたいが、そう上手くはいかない。
こうなりゃ意地だ。絶対に一発入れてその余裕かましてる綺麗な顔を吹っ飛ばしてやる!!
「そろそろこっちからいくぜ」
っと思ってたら剣が無造作に上段から振るわれた。
回避は無理！ クッソ速い！ なんとか相手の剣にこっちの刀を合わせて防ぐのが精一杯。
耳を劈く金属音というより最早爆音。
重い！ マジでクソみたいに力強いなこいつ！ 歯を食い縛って耐えるが足下に大きな皹ができて砕けて、足が地面に陥没した。
「お、正面から受けて無事か。スゲーな」
なんか賛辞の言葉が聞こえるが俺にそれを聞いてる余裕がない。このまま押されてるけど耐えられそうにない。

受け切れない、受け流さないとダメだこれ。上手くいなさないとこっちが真っ二つにされる。世紀末病人の『剛の拳よりストロングな柔の拳』ができないと死んじまう。
ぷるぷる震える全身の筋肉を駆使してギィの剣を横に流す。
「あ」
少し驚いたように声を上げつつ体を泳がせるギィ。
彼の剣がそのまま地面にぶつかって、地割れが起きたみたいに大地が真っ二つに裂けた。いや、底が見えない真っ暗闇なんですが威力どんだけ!? お前の通常攻撃は何処ぞの騎士王様の宝具なの!?
慌てて距離を取るがギィが意趣返しするかのように肉薄。そして振り回される剣を刀で受け流していく。
とんでもないパワーとスピードでこっちを粉微塵にしようとしてくる剣撃を閻魔刀で必死に捌く。捌いて、いなして、受け流す。一度でもミスれば死ぬ。全神経を集中して丁寧かつ精密動作を要求される対応をしないと一瞬で八つ裂きどころかネギトロみたいになる未来が待ってる。
「お前、スゲーな。剣の腕だけなら俺より上じゃねーか」
感心してくれてるようだが口では応じることができない。そんな余裕が本当にない。そいつはどうも、アンタもパワーとスピード半端ねぇよ！ 閻魔刀装備して戦ってんのに防戦一方で泣きそうだわ畜生！
っていうか閻魔刀は大丈夫なの？ 折れたりしない？ 日本刀みたいな外見だからちょっと心配なんだよ。
そんな余計なことを考えていたのがいけなかった。
「しまっ――」
下段から掬い上げるように振るわれた一撃を今までのように受け流せず、刀を握ったまま両腕を跳ね上げられてしまう。
「がら空きだぜ？」
その隙をギィは逃さない。鋭い刺突が繰り出され、俺の左胸を――心臓を剣が貫く。
「ぐっ！」

あ、熱い！　痛いというよりは熱い！　のた打ち回るほどに熱くて痛いのに体を貫通している剣に固定されて動けない。
「いいぜ、気に入った。お前を俺の配下にしてやろう」
吐息が届く距離まで顔を近づけたギィが笑みを浮かべて囁く。
「名前もくれてやる。そうすればお前は今よりもっと強くなれるぜ」
名前をくれる？　つまりはギィが俺の名付け親になるってことか？
何故かそれは、無性に嫌だった。
ギィの配下となり名前を与えられれば強くなれる、もしそれが事実であれば少なくともこの場で死ぬことはない。今、俺の生殺与奪を握っているのは目の前のこの悪魔だ。根拠も証拠も何一つないのに、俺が頷けば命の保証はしてもらえるという妙な確信がある。
だが、しかし――
「断る」
はっきりと俺は告げる。
ろくに知りもしない人物に気に入られたという理由だけで名前を付けられるなんて糞食らえだ。
『我に血を捧げよ』
誰かの下に付くのも、命令されるのも真っ平ご免。
俺を動かすことができるのは、俺に命令できるのは、俺に名前を与えられるのは俺だけだ。
『我に血を捧げよ！』
こっちの心臓を貫いてる剣の柄を――ギィの右手ごと左手で握り締める。
驚き目を見開くギィが何かする前に、右手に持った闇魔刀を振り下ろす。
「があっ!!」

ギィの悲鳴なんぞ構わず左肩と首筋の間にめり込んだ闇魔刀を更に押し込む。
残念だったなぁ！　スパーダの血族（この体が本当にそうか不明だが）は心臓を貫いた程度じゃ死なねぇんだよ！　むしろパワーアップイベントとして必須なくらいだアホンダラ！　ＤＭＣシリーズ恒例の貫通式って言われてるのは伊達じゃねぇんだ！　その証拠として今まさに魔人化（デビルトリガー）が使用可能になったからなぁっ!!
そして魔人化（デビルトリガー）が発動可能になったということは、悪魔として本当に覚醒した証。身体能力や魔力が数秒前とは比べ物にならないほどに上昇したのを感じる。
「フンッ!!」
頭を仰け反らせてから勢いよく自分の額をギィの額に叩きつけ、怯んだ瞬間に俺に刺さっている彼の剣を引き抜き奪い取り、
「要るかよ、こんなもん!!」
そのままお返しとばかりに彼の鳩尾に剣をぶっ刺し、刺さった剣の柄尻に喧嘩キックをかます。
吹っ飛んでからもんどり打って倒れるギィ。

『我に血を捧げよ!!!』

さっきから脳内の時空神像がうっさい。レッドオーブを大量消費することで自分自身に『名付け』ができるようだ。
『名付け』をすることによって生命力が上がったり進化したりといったメリットが発生するとかなんとか。デメリットに関してはレッドオーブの消費のみ。なら躊躇う必要があるだろうか。
「……　俺は、クリフォトの主」
クリフォトの樹を今後も使う以上、人類のみならず、全ての生命の敵と言っても過言ではない。
俺は力が欲しい、絶対的な力が。何かを為すのに必要だから力が欲しいんじゃない。ただただ力が欲しい、それだけだ。
力を得る為にクリフォトを用いて犠牲を出し続ける、災厄の悪魔。

だったら、もう既に相応しいのがあるじゃないか。
そもそも一番最初に変身した姿が、何もかも体現していたようなものじゃないか。
「俺はお前達(この世界)の戦うべき敵、戦う理由(your reason)そのもの……　故にユリゼン」
クリフォトの主、ユリゼン。今日からそれが俺の名だ。
するとどうだろう。更に俺の身体能力と魔力が上昇していくのを実感。己の格がまたしても上がったことを事実として知る。
なるほど、だからギィは名前があるかどうかを気にしていたのか。この世界は名前の有無が重要なんだ。ひとまず納得し、こちらを睨みながら自身の腹に刺さった剣を引き抜き立ち上がるギィに対して、半身となり両手で握った闇魔刀の切っ先を向け水平に構えた。
「傷が塞がらねー……　お前のそれ、ただの武器じゃねーだろ」
自分の剣で刺された箇所は既に出血が止まり傷が再生し始めているのに、闇魔刀で斬られた箇所はそうではない。血は止まっているようだが傷は再生する気配がない。
確か闇魔刀って複数ある能力や設定の内に『闇を切り裂き食らい尽くす』とかいうのがあったな。ギィの傷がすぐに治らないのは恐らくそれが関係しているに違いない。『闇』とはつまり広義的な意味で『魔』に属するものを指し、闇魔刀による攻撃は悪魔であるギィに特効となるらしい。
闇魔刀はＤＭＣのシリーズにおいて、悪魔でありながら人間の味方となり、魔界の王を含めた同胞の悪魔達を片っ端からぶった斬っていた『伝説の魔剣士スパーダ』が所持していた一振りだ。魔族や魔物に弱点特効がついていても不思議じゃない。
「俺にもよく分からん。すまんな」
ま、そんなことわざわざ教えてやらんがな。
ちなみに俺の傷――ギィに剣で心臓を貫かれたやつはとっくに完治してる。
魔人化(デビルトリガー)が使えるようになったこと（悪魔としての覚醒）と『名付け』により再生能力も鰻登りだ。

ダンテ達も斬られたり刺されたりしてもすぐにケロッとしてたから、俺の体もそういう風になったんだろうな。
心臓刺しても死なねーヤベー奴ってことで、これ以上俺とは関わらん、ってなってくれたらありがたいのだが彼の表情を見るにそれは望み薄。
「いいぜ、ますます気に入った」
嬉しそうな顔してんじゃねぇよ。新しい玩具を与えられた子どもみたいに目をキラキラさせんなっつの。
「その傷でまだやるつもりか？」
「ああ。是が非でもお前を配下にしたくなった」
厄介な奴に目を付けられちまったもんだな。
こうなりゃ初めての魔人化（デビルトリガー）の実験台になってもらおう。
「ならば第二ラウンドだ」
レッドオーブは『名付け』でさっき大量消費したせいで手持ちに余裕がない。だがまだある程度は残っている。魔人化（デビルトリガー）発動して魔力が尽きたらパープルオーブ買って魔力全回復＆上限アップ、そしたらまた即魔人化（デビルトリガー）発動、魔力が尽きたらパープルオーブ買って、というのを繰り返すごり押し戦法くらいしか思い付かないが、こっちも形振り構ってられないのでね。

ということで、魔人化（デビルトリガー）!!

俺の姿が人間から人型の青い悪魔へと変わる。鏡がないのでしっかり自身の姿を確認できないが、視界に映る範囲を見る限りではたぶん『３』や『４ＳＥ』のバージルが魔人化（デビルトリガー）した時と同じものだ。
つーか、魔人化（デビルトリガー）が使えるようになったことで真・魔人化もいずれは使えるようになることが判明。なお条件はクリフォトの実をあと何個か食った上でレッドオーブを大量に時空神像に捧げろとのこと。うん！　現状は絶対に無理なので頭の片隅に追いやっておく。
「まだそんな力を隠し持っていたのか!?」
俺の変身を見たギィが推しアイドルを前にしたドルオタみたいに

なっとる。
……　なんかどんどん喜ばせるだけになってる気がするけど、今度はマジでぶっ倒すつもりで戦うかんな。純粋な剣術しか使わなかったさっきと違って幻影剣も次元斬も解禁するし、先と同様に攻撃を食らいながら攻撃する、魔人化中のスーパーアーマーを活かした肉を切らせて骨を断つ作戦も使いまくるので悪しからず。
　では改めて――
「俺はクリフォトの主、『ユリゼン』」
「俺は原初の赤（ルージュ）、『ギィ』」
　互いに相手を見据えて名乗り合い、同時に踏み込み斬りかかる。
「勝負だギィ!!」
「かかって来やがれユリゼン!!」
　ヒャッハー第二ラウンドだぁっ!!!

　数時間後。
　互いにボコボコの血塗れの青息吐息の状態で俺から切り出した。
「……　すまん。ウンコしたいからそろそろやめにしないか」
「お前悪魔なのに排泄あんのかよ!?」
「え？」
「え？」
　忘れてたけどスパーダの血族ってスパーダ以外は人間とのハーフやクォーターだから普通の人間と同じ生理現象があって、当然のように俺にもありましたよ。便意と尿意が。
　クリフォトの樹と融合してる間は空腹感も睡眠欲も便意も尿意もなかったのに、だ。
　で、ギィ曰く悪魔は精神生命体だから人間を含めた物質生命体の生理現象はないんだと。

「ウンコしないのか、普通の悪魔は」
「ウンコしねーな、普通の悪魔は」
「だが俺はしたいんだ、ウンコ」
「……お、おう」
結局勝負は流れた。ウンコだけに。
一応、再戦の約束はしたけど、別れが気まずかったから次会う時また気まずくなりそう。だから当分会いたくないなと思った。

人間の敵が人間社会で暮らすって皮肉よね

ギィとの初邂逅と初戦闘と気まずい別れを経てから、約半年程度経過した。

今俺は、この世界に降り立って初めてやって来た人間の国にいる。それなりの規模の国にあるそれなりの街の中でそれなりに大きい冒険者ギルドみたいな場所で、いくつもの依頼書が貼られた掲示板の前に立っている。

冒険者ギルドみたい、というのは厳密には冒険者ギルドではないからだ。基本的には魔物の退治を専門とする、荒くれ者共に仕事を斡旋する場所――ハンターズギルドだそうだ。そもそも『冒険者』という単語や言葉、意味そのものがまだ世間に出回っていないというか確立していないらしく、やがて冒険者ギルドの前身となる組織、が正解に近いかもしれない（つまりクリフォトの樹と融合していた俺を討伐しに来た人達は冒険者じゃなくて魔物の退治屋）。

一般的にこの生業を魔物の退治屋、もしくはハンターと呼んでいて、確かにやってることは冒険者ギルドというよりはまるでモンハンのハンターズギルドである。

約半年前にギィと出会ってから、その後は支障なく人間社会に紛れ込み悪魔狩人（デビルハンター）ならぬ魔物狩人（モンスターハンター）として生計を立てている。カプコン信者である俺としてはどっちでもいいんだけどね。

ちなみに妖気（オーラ）という人外特有の気配に関しては現在拠点にしているこの街に辿り着くまでの数日間でなんとか隠せるようになった（かなり苦労したが）。彼があの時指摘してくれなければ街に入る前から討伐対象だった事実に今更ながら震える……　あっぶねー、今度会ったら礼言っとこう。

この世界、色々と調べてみたがマジで剣と魔法のファンタジーななんちゃって中世みたいな世界で、科学技術が全く発展してない代わりに魔法が当然の如く存在し、魔物などの人外が跳梁跋扈していた。

で、そんな世界で人類はどんな感じなのかというと、ぶっちゃけカスみたいな存在なんだわ。ゲロ以下の臭いがプンプンする人間辞め

た金髪が言ってたようにマジで『貧弱！　貧弱ゥ!!』なの。けど頑張って集まって知恵を搾って国家を作ってそれなりに繁栄してたりする。一匹いたら街とか小さな国家とかが壊滅してもおかしくない化け物が、たまーにそこら辺を我が物顔で闊歩してたり飛んでたりする世界で、である。そこんところは脱帽もんだし素直に尊敬してもいいと思う。

が、ここで人類同士で戦争するのが人類のダメというか愚かなところ。

いやいや人類にそんな余裕ないだろ、戦争なんかしてないで一緒に魔物討伐でもしてろや、と誰もが思うはずなんだけど、情報収集してると耳に入るんだなこれが。あっちの国とこっちの国が戦争してどーたら、そっち方面から蛮族が攻めてきてなんちゃら、とかなんとか。それらの話にどれほどの信憑性があるか不明だが、聞いててうんざりするのは間違いない。

以前クリフォトの樹が生えたら戦争してた国が手を取り合って仲良く俺を討伐しに来た前列があるから、ここは人類同士の仲を取り持つ為にも俺が一肌脱ぐしかないかな（暗黒微笑）!!

ま、それは追々として。

今は目の前の掲示板の、魔物討伐依頼を吟味することにしよう。なんかこういうの、モンハンのクエスト及び集会所やそれらのムービーシーンを思い出して楽しい。ゲームと違って未挑戦やクリア済み表示とかそんなんある訳ないし、毎回異なる依頼が並び常にやりたい依頼がある訳ではないけど、まさに誰もが熱中したあの世界の一部になっているみたいで感無量。

勿論、何が起こるか分からない命懸けの、常に死と隣り合わせの危険な仕事だから油断は禁物なんだが。

「よし、決めた」

貼られた依頼書の内、報酬がオイチイ！　のを上から順に纏めて五枚剥ぎ取り受付カウンターへと持っていく。

「これを」

「はいギルバさん。少々お待ちを」

受付嬢が営業スマイルで対応してくれる。
ギルバとは俺の偽名だ。ＤＭＣの小説版に登場するあるキャラクターから取った。顔が『５』のネロで髪型が『３』のダンテで服装は『３ＳＥ』のバージル２Ｐカラーというごちゃ混ぜ具合の俺だが、現在のメインウェポンは閻魔刀なので一応はバージルに関連のある名前にした。人間社会に紛れ込む以上、馬鹿正直に『ユリゼン』と名乗るつもりはない。まだギィにしか名乗っていないが、情報というのは何処から漏れるか分からない。魔物退治をしている一介の剣士『ギルバ』はクリフォトの主『ユリゼン』とは何の関係もない、ないったらないのだ。いいね？
「お待たせしました。それでは依頼内容について詳細を――」
その後、手続き済ませると俺はとっととギルドを出て、街を出る。
俺の移動手段は現在四つ。
まず徒歩。時間がかかるので基本的には選ばない。
次、閻魔刀で空間を斬り裂いて転移。便利なんだけど一つ致命的な問題があって、知らない場所や行ったことない場所へは行けないということ。今回は初見の場所を最初に行くつもりなので、帰りやその他に向かう際はお世話になるつもり。
三つ目、幻影剣を飛ばして幻影剣がある位置まで瞬間移動するエアトリック。戦闘にも移動にも使える優れものだし、街の中や外に出る際に歩くの面倒でよく使う（さっきもギルドを出てから街を出るまで使った）けど、あえて今回は選ばない。
四つ目の選択肢、それは――
「キャバリエーレ」
じゃじゃーん！　ＤＭＣ５に登場するダンテ専用の魔具、キャバリエーレでした。
紫電を迸らせつつ俺の右横に顕れるバイクみたいなそれは、見た目の通りバイクとして乗ることもできれば、真っ二つに別れて双剣（というかチェーンソー）として振り回すことができる。
以前ギィと戦った時、彼の撃退に成功ということで任務達成の報酬で入手したレッドオーブを消費して時空神像から購入しておいたの

だ。
バイク型の魔具だからどんな悪路もへっちゃらだ。山だろうが川だろうが荒野だろうが雪原だろうが森の中だろうが問題なしのお構いなし。道なき道も何のその。むしろこれ乗って走った後及び跡が道になる結果に。
乗り物であり武器でもあるから魔物が進行方向を邪魔しても轢き逃げアタックでミンチにするので走行を中断されない。
通った場所が既知の場所となるので、後々闇魔刀での空間転移にも利用可能。
早速キャバリエーレに跨がりサイドスタンドを左足で蹴り上げ、クラッチを握りスロットルを二度三度と捻りエンジン音を確かめてからギアをニュートラルから1に切り替え発進。
「午前中までには二つ三つ終わらせて飯食いたいな」
猛スピードで駆け出しながら一人言を呟き、今日の予定を考えるのであった。

その男はふらりと現れた。
近隣諸国で大きな戦争が勃発し、その最中に『クリフォトの樹』という新たな脅威にして災厄が生まれ、それを討伐に向かった凄腕のハンター達のほとんどが帰らぬ人となり、職員の誰もが暗澹たる思いを抱えて日々を暮らしていた時だ。
「ハンターとして登録がしたい」
銀髪碧眼で整った容姿。貴族が着用するような高級そうな赤いコート。手にしているのは一振りの刀と呼ばれる剣。立ち居振舞いは歴戦の戦士でありながら身に纏う空気は静謐そのもの。
素人目からしても只者ではない彼が醸し出す雰囲気に呑まれて皆が押し黙る中、ベテランの受付嬢が粛々と登録手続きを進めていく。

全ての手続きや説明等がつつがなく終わると、掲示板に貼られていた依頼書の中で最も危険で最も報酬が高いものを一枚剥がし突き出してきた。
登録したばかりの新人がいきなり受注できる依頼ではない、そう説明しようとした受付嬢をギルドマスターが制止。
ギルドマスターはこう感じていた。彼は他の者達とは違う。底知れぬ何かを感じる、と。だから登録したばかりの新人だったが、長年培った勘を信じて彼のやりたいようにやらせてみることに。
これで彼が死んでしまったら自身の人を見る目が曇っていただけ。だがしかし彼は無事に戻るに違いないと確信し期待を込めて送り出す。
そして、ギルドマスターの勘が正しかったことはすぐに証明される。
彼は無事に戻ってきた。しかも、往復するのに馬を使っても数日かかるはずが、出発してからたったの数時間後にだ。
おまけに討伐対象である危険極まりない魔獣の首を片手に。ついさっき斬り落としてきたと言わんばかりに血が切断面からポタポタと零れていた。
なんでこんなに早く戻ってきたのかとか、なんで生首そのまま持ってきたとか、色々と聞きたいことがあったので問い詰めてみれば、彼は淡々と答える。
曰く、移動に便利な魔法のアイテムや能力があるので移動時間はそれほどかからなかった、討伐対象の魔獣は倒すよりも探す方が大変だった、魔獣の素材は不要だから首から下は依頼主に寄贈した、生首は討伐の証兼お土産、とのこと。
彼の返答に呆けることしかできないギルドマスターと職員達をそのままに、彼は手にしていた首をその場に放り捨てると依頼書が貼られた掲示板へと向かう。
「次はこれを頼む」
もう次!?
「ああ、そう言えば先の依頼の完了手続きがまだだったか。では先に

そちらを頼む」
いやそうじゃない!!　この時この場にいた誰もが心の中で叫ぶ。
これが後に『首狩り剣士ギルバ』と呼ばれる英雄の鮮烈なデビュー。

ギルバは一言で言えば凄まじかった。
依頼を受ける、暫くすると魔物の首を持ってくる、また依頼を受ける、少し経つと魔物の首を持ってくる、この繰り返しが一日に四回から五回程度。勿論、どの依頼も凶悪な怪物の討伐依頼であり、危険度など語るべくもない。通常のハンターならばどんなに凄腕であったとしても一つにつき数日から一、二週間は必要とするものを。しかし彼は常に淡々とした態度で受注し、散歩でも行ってきたかのような気軽さで首を持ってきた。
「……あの、ギルバさん。討伐の証は首じゃなくてもいいんですよ」
「これが一番楽だし誰が見ても一目瞭然だ。すまんな」
「でも毎回新鮮取れたてを持って来られますと、血で床が……」
「む」
血生臭くなった受付の前で一度だけ職員が首じゃねーのを持って来いとオブラートに包んで進言したら、
「ではこうしよう。これならギルド内が血で汚れることもない」
今度はギルドの玄関前に首を並べ始めやがったのだ。
だからそうじゃないっつーの!!
多種多様な魔物の首が花壇に咲く花のように綺麗に並べられ道行く人々を虚ろな目で睥睨する光景は、街の住民から何か良からぬ誤解を生みかねないというのにギルバは一人満足気にうんうんと頷くだけ。
「首を剣か槍で貫いたのをギルドの壁面に突き刺せば良い飾りになるはずだ。内壁と外壁にそれぞれ、な。もしくは帽子ハンガーのようなもので首を吊るせば、このギルドは実績があるのだと誰もが思うだろう」
思わねーよ!　断固拒否だ!!

「……そうか」
普段表情の変化に乏しい彼が心の底から残念そうに呟いたが、ダメなものはダメである。ギルドを地獄に変えたいのだろうか。
見ると呪われそうなインテリアやオブジェの設置はギルドマスター含めた職員全員で全力阻止したものの、相変わらず討伐対象の魔物の首をギルドの入り口前に並べるのをやめようとしない。
こいつ頭おかしい。
ギルドを出入りする者達は当然として、街の住民からもヤベー奴認定されるギルバであったが、本人は自身への評価や風評など一切気にした様子がない。
ハンターとしての実力は超一流で依頼を達成する早さは誰よりも早く、容姿も整っておりハンターを生業としているのに常に清潔感があり、粗野で粗暴で荒くれ者が多いハンターの中でも常識的で紳士的で話がし易く、依頼主から苦情もない、しかし首狩りの狂人というのが彼の総評であった。
彼は今日も意気揚々と狩った獲物の首をギルドの前に飾る。

やがて数年後には若手のハンター達の中でも特に有望な者達が超一流の彼に倣って首を飾り始め、ギルド側としては大変不本意なことに『狩った獲物の首を大衆の目につく場に並べること』がギルドに所属するハンター達の間で己の力を示す宣伝を兼ねた伝統になっていく。
更に後年、ハンターズギルドに魔物退治以外の仕事が年々増加していたことや人々から何でも屋として頼られるようになっていたこと、『冒険者』という言葉が新しく生まれたことを鑑みて名称を『冒険者ギルド』に変更。
それから長い年月とイングラシア王国の建国を経て『自由組合』へと再度名を改め、国家事業として多くの冒険者を輩出し各国へと派遣することになる。
上記の経緯から、今もなお続く冒険者間での首狩り文化は伝説の英

雄『首狩り剣士ギルバ』にあやかり、偉業を達成した証として受け継がれるようになったのだ。
なお、ギルド施設内に録音した音楽を流す魔法アイテム『ジュークボックス』と『ビリヤード』の遊戯台を設置するのはギルバが発祥だ。これらは職員や他のハンター及び冒険者、一般人から好評であった為その後ほとんどのギルド支部にて広まり――

――『イングラシア王国建国秘話　第二章　自由組合の成り立ち』より抜粋

ギルドの内装をダンテの事務所みたいにしたい！　今まで狩った悪魔の首を剣で貫いたのを壁に刺して飾るスタイリッシュなインテリアみたいなやつ！
だから生首持って帰るんだけど、職員の皆さんは『絶対にＮＯ！』って感じで取り付く島がない。
おかしいな。普通こういう生業に関わってる人達って何処かのネジ飛んでて割りとクレイジーな発想にもついてきてくれるはずなのに。これがモンハンのハンターズギルドであればギルド側から剥製にしようとか提案されるに違いない……　解せぬ。
贅沢を言えばジュークボックスとかビリヤード台とかも中に置きたいけど、残念ながらこの世界にそれらはそもそも存在してない（はず）。なので諦めるしかない。いや、今はダメだとしてもいつかは……　だからせめて首だけでも飾らせろよ!!
好き勝手したいなら自分で事務所用意してそこでやるべきなのは百も承知だが、如何せんそういう事務所の維持や管理が面倒臭いし、そもそもギルドと競合するようになって仕事の取り合いとか縄張り争いとかで揉めるのもヤダし。

ていうか俺、ここにいつまでいるか分からんのよね。人外だかんね。しかもクリフォトの樹ってギルドじゃ『災禍の魔樹』って呼ばれてて、ここに所属してたベテランハンターが軒並み殺されたから皆トラウマになってるし。その樹の主、とはバレなくても種族が悪魔だって身バレしたら即トンズラこくから身軽にしておきたい。

ただ、この世界の人間って聖人化とか魔人化（ＤＭＣの用語ではなくこの世界特有のもの）っていう方法で不老長寿になれるらしい。色々条件はあるようだけど、両者に共通しているのが人類を逸脱した強者であるということ。という訳で、老いないことについてはあまり言及されないんじゃないかと楽観視してたり。ま、本当に俺が不老長寿なのかは知らん。ダンテ達みたいに普通に人として年齢を重ねるかもしれんけど、そん時はそん時である。

「ん？」

今日も今日とてギルドにやって来ては掲示板とにらめっこ。いつものルーチンワークではあるが今回は少し毛色が異なる。

普段であれば魔物退治の依頼書が犇めく掲示板が、本日に限っては魔物退治の依頼だけではなく、野盗の討伐や荷物の運送、薬の原材料となる植物の採取、護衛といったものが散見していた。

「ギルバさん、実はですね」

話しかけてきたのはいつも対応してくれる顔馴染みの受付嬢。彼女の話によると、俺が危険度の高い魔物やら魔獣やらを片っ端から殺しまくったことで自然環境及び生態系に著しく変化が起き、退治の依頼そのものが減少傾向にあったらしい。それに反比例するかのように人々から「魔物退治以外もやってくれ」という意見が増えてきて、本日から試験的に導入し暫くは様子を見て、今後も上手くいきそうであれば本格的に魔物退治以外の仕事も斡旋していくとのこと。

「なるほど、そういうことか」

つまり需要と供給の変化、ニーズの変化か。

魔物退治以外も請け負うというのなら、いずれはハンターが冒険者と呼ばれるようになるのだろう。

ギルドの歴史の転換期、か。

「では俺が魔物退治以外の仕事を初めて受注する、ギルド初の男ということになるな」
「はい。ギルバさんはいつも開所と同時に、朝一番に顔を出しますのでそうなりますね」
「よし。ならこれを」
一枚剥がし渡したその依頼書の内容を見て、受付嬢は営業スマイルを全力で投げ捨て顔を盛大に顰める。
「……野盗の討伐依頼……流石に人の生首は持って来ないですよね？　持って来ないですよね？　持って来ないでください」
「無論だ」
俺は自信満々に返答し、ギルド職員全員からの疑いの眼差しを振り切り出発した。

「あの野郎!!　首持って来るなって言ったじゃねぇか!!!」
ギルバ担当の受付嬢はプッツンした。というか彼女だけではなく職員全員プッツンだ。
無論のこと、野盗は一人残らず斬首してギルド前で晒し首にしてやったから。
それなりに人数が多く、首一つひとつを地面に転がしておくのは流石に通行の邪魔なので、野盗の連中が所持していた剣や槍を用いて団子三兄弟や四兄弟を作り、地面に突き立てておく。『野盗の末路』と書かれた看板をそばに立てておくのも忘れない。

そんなこんなな生活をギィと出会ってから丁度一年くらい経過するまで送っていたら、近隣でまた戦争が勃発するかもしれないという噂を聞き、これ幸いとギルドに「暫く旅に出る」と言い残し足を噂の発生源に向ける。
さあ、一介の剣士『ギルバ』の時間は一旦終わりだ。クリフォトの主『ユリゼン』としての活動を再開しようじゃないか!!

戦争ほど命の価値が軽いものはない

某ロボットアニメにある「戦いは数だよ兄貴」というセリフのように、古今東西人類史における戦争は兵の数を揃えることがまず重要視されていた。

この世界においてもそれは同じで、遠くで二つの軍が睨み合いをしている様子を観察する限り、両軍共にかなりの兵を集めているように見える。

細かい数は分からんし数える気も起きないが、両軍合わせて十万いくかいかないかくらいかな？

たくさん集めたなぁ、と純粋に感心してしまうが、この世界には魔法っていう反則技があるせいで折角集めた兵も一発の魔法で一瞬で消し飛ばされたりする場合があるから、数が多い＝有利には直結しない。開戦前の兵数が敵国を上回っていることは重要なのにだ。

そんなことを言えば地球の戦争もミサイルやら爆弾、核兵器みたいな大量破壊及び大量殺戮を目的とする兵器が多々存在するので、そういう風に見ればあまり変わらないのかもしれない。

ただこの世界って剣と魔法のファンタジーだから、『量より質』がとにかくものを言う。一万の雑兵よりも超強い一人の方が勝つ、っていう理不尽が当たり前のように横行するからね。しかも地球じゃ軍と兵器ってのはとにかく金食い虫で、維持や管理が大変だし気軽に運用しないしできないし実際に命令してから結果が出るまで時間が必要だけど、この世界じゃ戦略級の実力者っつってもあくまで一個人でしかないからコストがかからないし即応し易い。地球とこの世界とではたとえ『戦略級の戦力』が同じ意味を持ち同じ結果を出せるのだとしても、内情は全く別物なのだ。

なので、どっちがこの戦争に勝つかなんて一目見ただけじゃ分かりっこない。実際に始まってみないと何とも言えない、それがこの世界の戦争だ。

「まあ、どちらも敗北してもらうがな」

俺は邪悪な笑みを浮かべながら両軍がぶつかり合うのを待つ。

それにしてもこの世界って戦争が多いなー。俺がこの世界にやって来てクリフォトの樹を生やしてからまだ一年しか経ってないのにまた戦争だ。群雄割拠の戦国時代か？

人間の血を養分とするクリフォトを使う以上、その方が都合がいいけど。

現在俺は両軍を見下ろせる高さを持つ木の上――戦場となるであろう場所から少し離れた所に丁度良く生えていた林の中にいる。

とりあえず開戦まで暇なので、木を飛び降りモンハンの肉焼きセットを真似て自作した肉焼きセットをセッティングし、あの曲を唄いながら肉を焼くことにした。

唄いながら取手をくるくる、ウルトラ上手に焼けましたー♪　バクバクバクバク、ガッツポーズ！　を三回ほど繰り返すと鬨の声が聞こえてきたので慌てて肉焼きセットを片付ける。

やっべ、出遅れるところだった。

内心で反省しながら木の幹を壁走りするように急いで登るというより駆け上がり、木の頂上に辿り着くや否や更に足に力を込めて跳躍、空高く舞い上がり引力に引かれる前に視線の先で大勢の兵士達が激突しているのを捉え、魔力で構成された剣――幻影剣を戦場に向けて飛ばし、幻影剣が刺さった地面に瞬間移動――エアトリックを発動。

戦場まで一気に距離を詰めたら魔人化（デビルトリガー）発動。抑えていた妖気（オーラ）が全身から溢れ出し青い魔力が閃光となって迸る。青い人型の悪魔の姿となった俺は、事前に用意していたクリフォトの種――当然、前回のように「ファックユー!!」と叫びながら中指を立てた右手を高く掲げたポーズで生み出した――を野球のピッチャーのように大きく振りかぶって、投擲。

イチロービームのようにすっ飛んでくクリフォトの種は軌道上の兵士達の肉体に握り拳大の風穴を開けていく。

クリフォトの種を戦場にシューー！　超エキサイティング!!　何かを飛ばす度にこれ絶対やりたくなるのはなんでだろう？　ツクタオ

リジナルのバトルドームのＣＭ凄過ぎる。
「あ、やべ」
強く投げ過ぎた。何十人の体を貫いたら止まるんだろう？
とにかく種を追おう。魔人化（デビルトリガー）した時点で左手首と一体化していた鞘を左手で握り直し、居合いの構えを取り、鋭く踏み込み鯉口を切り抜刀。
音を置き去りにする速度で移動しながら刀を振るう居合い斬り――疾走居合。初撃のそれで一番近くにいた兵士を五人ほど通り過ぎ様に上半身と下半身を斬り離す。切断面から血が吹き出す前に再度疾走居合、別の兵士達に襲いかかり一撃で真っ二つにしてやる。
疾走居合、ひたすらこれを繰り返す。
俺は戦場を高速で走り抜ける青い影となり兵士達を斬殺していく。
種が発芽し触手が爆発的に増殖しうねうねしている場所をうっかり通り過ぎてしまったので、くるりと華麗に反転しつつ足を止め残心、鞘に刀を納めると、血飛沫を上げながらゆっくりと倒れる兵士達の姿が映る……　あ、疾走居合で斬った時に刺さった幻影剣が納刀と同時に爆発し兵士達の体が消し飛ぶ。自分でやっといてなんだけど酷い死体蹴りを見たぞ。
だいたい今の一連の動きで、何人殺せたんだろう？　と疑問に思うがこの戦場にいる兵士を皆殺しにすればいいと考え直し、再度闇魔刀を抜刀。横薙ぎに払うように振るうことで飛ぶ斬撃――ドライブが発生し、多くの兵士達が巻き込まれて横に真っ二つとなり、上半身がズレ落ち残った下半身から噴水のように血が吹き出す。
「疾走居合の連発よりこっちの方が楽だし範囲も広いな」
そうと分かれば疾走居合からドライブに切り替え、飛ぶ斬撃を飛ばしまくる。広範囲に飛んでって欲しいのでさっきよりも魔力を込める。すると面白いくらいに兵士達が吹き飛び死んでいくので、俺は内心で「見ろ、人がゴミのようだ！」とラピュタ王になった気分で悦に浸りながらその場を動かず３６０度回りながら何度も何度も刀を

振った。
　ついでにクリフォトには触手を土中に潜行させ、この戦場から誰一人逃がさない為に、戦場全域を覆うように取り囲むようにと命令を送る。俺の攻撃から逃げられたとしてもクリフォトの触手が地面から貫いてくる、そういう寸法だ。
　クリフォトの樹にパイルダーオン!!（融合）するのは殲滅が完了してからで構わない。
「あ、そうだ。魔法で逃げられないようにしておかないと」
魔法不能領域（アンチマジックエリア）を発動。これで魔法による逃走は許されない。一人残らず養分にしてやんよ。
　ちなみに魔法そのものはこの一年間で同じギルドに所属する魔法使いのハンター達から教わった。教わったといっても基礎のみで、後は自分でなんとかしたけど。
　余談だが俺が一番最初に覚えた魔法は水を生み出す属性魔法。何故なら飲み水に使えるのは勿論のこと、トイレ――ウォシュレットにも使えるからだ（重要）!!
　魔力が尽きて魔人化（デビルトリガー）が解除される前に終わるといいんだけど、その為にも皆さんにはなるべく一纏めに固まってて欲しいんだけどな、と自分勝手なことを思いながら虐殺を続けた。

「一体何がどうなっている!?」
「分かりません！　開戦と同時に何かが現れ、前線の兵共が瞬く間に蹂躙されました！　前線は崩壊し混乱の極みにあります!!」
「敵の魔法か？　新兵器か？」
「それも分かりません！　放たれる攻撃が激し過ぎて近づけません！　触れたものを切り裂く衝撃波のようなものとしか……」
「ええいこちらも魔法を撃て！　魔法使い共は何をしている!!」
「それが、魔法不能領域（アンチマジックエリア）が展開しているようで、魔法が発動しません！」
「何!?　では転移魔法も使えぬということか!!」

「転移で逃げられない、だと……」
「報告、報告ぅぅ!!」
「今度は何だ!?」
「あ、新たに血を吸う植物のような、触手のような物体が現れました！
　地面から無数に生えてきて敵味方問わず串刺しにしています！
生えてくる範囲も凄まじい早さで広がっています！」
「血を吸う、植物だと!!」
「はっ、串刺しにされた者は数秒で干からびてミイラのようになるのを確認しており、前線にはつい先程突然巨大な樹が出現しました！
その樹は今もなお異常な速度で成長しています！　あの植物は化け物です！」
「……　血を吸う、化け物の樹……　まさか、一年前に確認されたクリフォトとかいう悪魔の樹か!?」
「く、く、く、くくく、クリフォトだと!!!」
「災禍の、魔樹……　!!」
「……　では、戦場に突如現れ暴れている何かとは、クリフォトの主!?」
「噂では討伐に向かった英雄級のハンター達が全て返り討ちにされたと聞くぞ」
「……　もうダメだ、おしまいだぁ……」
「撤退、撤退だ!!　あんな神話やお伽噺に出てくるような化け物がいたら命がいくつあっても足り――」

「兵士諸君、任務ご苦労、さようなら」

　指揮官っぽい人達を真っ先に抹殺したら兵士の皆さん混乱しまくって処理し易くなるんじゃね？　と安易な考えを思い付いたので即実行。エアトリックで瞬間移動を繰り返しそれっぽい人達や天幕

みたいなものを見つけたらとりあえず突撃して「こんにちわ、死ね!!」な感じで閻魔刀の錆びになってもらう。
斬撃によって発生した衝撃波で天幕を内側からぶっ飛ばし周囲一帯も纏めて斬り刻む。
辺りが屍山血河になるもののすぐにクリフォトの触手がやって来て血を死体ごとチューチュー、血に濡れた地面もチューチューするので問題なし。
よし次！
俺はまたエアトリックで移動を開始する。やっぱ瞬間移動って楽&便利だわ。
兵士の皆さんを取り零しのないように殺すのは人数が人数なので大変だし面倒だが、決して苦ではない。殺した数に応じてレッドオーブも手に入るので、むしろ必要な作業だと認識しているくらいだ。それにクリフォトも頑張ってくれている、というか樹の成長速度がアホみたいに早いのでむしろ俺よりも樹の方がキル数多いまである。
気持ち的にはドカンと一発効果範囲クソ広い魔法でとっとと殲滅したいところだが、クリフォトの樹が成長するには血が必要なのでそういう類いは全部ＮＧだ。
資源に乏しい日本は戦時中に『油（石油やガソリン）の一滴は血の一滴』とか言われてたらしいけど、今の俺がまさにそうなのだ……『血の一滴は血の一滴』で何一つ変わらず『？』となりそうだが、つまりは人間の血は一滴たりとも無駄にはできない貴重なものということである。
稀に、地面から貫こうとするクリフォトの触手に難なく対処する方々がいらっしゃる。そこらの有象無象とは異なる強者の気配を漂わせる歴戦の兵士が。
相手がそんなんだとクリフォトじゃいくら頑張っても触手を斬られたりするだけで倒せっこない。なので、そういう時はクリフォトからヘルプで呼ばれる為俺が直接出向いて直ぐ様処理――速やかにこの世からお別れしていただく。
お客さん困りますねぇ、ウチの緑化計画の業務妨害しないでもらえ

ます？　と相手からしてみれば意味不明な文句を言いながら斬りかかって肉体的にも上半身と下半身のお別れを済ませてもらうのだ。

しかし流石に数が多いので魔力が残り少なくなってきた。一度クリフォトと融合して魔力を回復してから作業に戻ろう。魔人化（デビルトリガー）が解除されても作業そのものは問題ないが、ギルバの姿を見られるのはいただけない。たとえこの場の人間を皆殺しにしたとしても、千里眼みたいなスキルで覗き見してる奴が遠くにいるかもしれない。だとしたらギルバの姿は可能な限り晒さない方がいい。

そんなことを考えクリフォトに俺との融合を命令しようとしたら

――

《告。進化条件、種の発芽に必要な養分、人間の魂を確認します》

突然頭に響いてくる無感情な女の声に動きが固まってしまう。

これが『世界の言葉』と呼ばれるこの世界特有の、スキルを獲得したり進化したりする時に聞こえる言葉だと認識する。初体験ではあるが。同じギルドのハンター達が話題にしているのを耳にして半信半疑だったし、俺には『時空神像』があったのであまり気にしたことがなかったが、自分が実際に経験すると信じざるを得ない。

《認識しました。規定条件が満たされました》

勝手に話が進んでるけど進化とか条件とか突然何!?　完全に置いてけぼり食らってんだけど誰か説明プリーズ!!

《これより魔王（ハーヴェストフェスティバル）への進化が開始されます》

あ？　え？　何だって!?　いやいや、何勝手に始めてんだ！　まずどういうことなのか説明しろバカ野郎!!

「っ!?　何だ？　眠気が……」

抗い難い強烈な睡魔が突如襲いかかってきて立っていられず膝を

着く。
ヤバい。眠くて眠くて気を抜いたら即寝ちまいそうだ。魔人化（デビルトリガー）もまだ多少魔力が残っているのに維持しているだけでも辛い。
なんだかよく分からんがとにかく一時停止しろ！　やめろ、止まれ！　こんなん聞いてないぞ！　キャンセルだキャンセル！　進化キャンセルＢボタン連打ＢＢＢＢＢＢＢＢＢＢＢＢ!!
《告。魔王（ハーヴェストフェスティバル）への進化は、途中で停止不可能です》

クソがぁぁぁぁ!!
「クリフォト……」
蚊の鳴くような小さな声で呼べば、俺の意図を察した樹が触手を伸ばす。地面から無数に現れた触手が俺を包み込み、融合が始まる。
クソ、マズイ。ホントにマズイ。俺の体に何が起きているのか分からないが、このまま眠るのは危険だ。危険過ぎる。無防備になった俺を人間達が放置しておく保証はない。ていうか絶対に殺される。
眠気をどうにかしたいがいい方法が思い付かない。
ならばせめて安眠できる環境を作りたいが、眠気が全て邪魔をする。
どうすればいい？　どうすればいい？
眠気をなんとか堪えながら必死に思考を走らせていると、久しぶりにあの声が聞こえてきた。
『我に血を捧げよ！』

俺にとっての最大の味方『時空神像』の声。
藁に縋る思いで意識をそちらに向ける。
何々？　規定条件が満たされた為、レッドオーブを消費し『地獄之王（ザキングオブヘル）』を取得可能？
えーと、『地獄之王（ザキングオブヘル）』とは、レッドオーブを消費して悪魔を召喚することができる能力。

召喚される悪魔の強さは消費するレッドオーブの量に比例する。
召喚される悪魔は召喚主に絶対服従。
召喚の際に消費したレッドオーブは、送還すればレッドオーブに戻る為全て返却される。しかし、送還前に死亡した場合レッドオーブは返却されない。
……　要するに召喚魔法、じゃなくて召喚のスキルみたいなもの？　一時的に味方を呼べるってことでいいのか？
どんな奴らが召喚できるのか調べてみると、
「『魔帝ムンドゥス』召喚できんのかよ!!」
びっくりして思わず叫ぶ。だが残念なことに眠気は飛ばない。
一番強くて一番コストが高いものに『1』のラスボス、魔帝ムンドゥスがあった。一応、あんなんでも魔界の帝王なんですけど、召喚できちゃうのかよ。時系列が『1』より後の『2』『4』『5』だと強くなり過ぎたダンテからは余裕綽々で倒されるレベルではあるものの、寝ている間の身辺警護程度なら戦力としては十分、どころか過剰戦力だ。
しかしながら、召喚された悪魔は俺に絶対服従らしいけど、なんかいまいち信用できないし魔帝ムンドゥスなんて召喚したら寝首かかれそうで嫌だし、純粋にあんまこいつのこと好きじゃないので却下。
眠気が耐えられなくなってきたので、召喚するなら早く決めなければいけない。
焦りながらレッドオーブを時空神像に捧げて『地獄之王（ザキングオブヘル）』を取得し、再度召喚可能な悪魔のリストを吟味。
なるべくコストがそこそこで、戦場の兵士達を逃がさない為に動きが速くて、倒されにくい。ついでに血を無駄にしてしまう火炎や電撃のような魔法攻撃をしない、純粋物理攻撃持ち。
そんな都合のいい奴がいたっけ？　と半分意識を失いつつ探していたら見つけた。『1』のシャドウと『5』のヒューリーだ。攻略法を知らないと倒すのが難しい上、足が速くて物理攻撃しかしない。
もうこれ以上考えることが難しくなってきたのでレッドオーブを消費しシャドウを三体、ヒューリーを三体を召喚。

クリフォトの触手に全身を覆われて視界が塞がり何も見えないが、悪魔が六体召喚されたのは感覚で理解していたのでそのまま命令する。

この戦場にいる人間を一人残らず殺せ。それが終わったら俺を守れ。

命令を受けた悪魔達が歓喜の咆哮を上げたのを最後に、俺は意識を手放した。

ただ、寝ているはずなのに感情が込められていない女の声――『世界の言葉』だけがずっと聞こえていた。

《告。個体名『ユリゼン』の魔王（ハーヴェストフェスティバル）への進化が開始されます》
《告。魔王（ハーヴェストフェスティバル）への進化が開始されました》
《身体組成が再構成され、新たな種族へ進化します》
《確認しました》
《種族、半人半魔から超人超魔へ超進化》
《成功しました》
《全ての身体能力と魔力が大幅に上昇しました》
《続けて、旧個体にて既得の各種スキル及び耐性を再取得》
《成功しました》
《以上で進化を完了します》

犯人の事件簿

目が覚めると、一年前に一ヶ月間飽きるほど見たクリフォトの樹の内部――玉座の間にいた。

なんとか生き延びたことに安堵の溜め息を吐き、そこで漸く玉座に座る俺の眼前に跪く六体の悪魔に気づく。厳密には跪いているのは三体で、残り三体は犬や猫などの四足獣の『伏せ』なのだが。

跪く三体はヒューリーという悪魔。『5』に登場し、見た目は赤い体表のリザードマン。瞬間移動かと思うほど動きがアホみたいに速く（実際目の前から消える）ゴリ押しでは絶対に攻撃が当たらない、シリーズファンからは蛇蝎の如く嫌われていた敵キャラ。その攻略法はヒューリーが攻撃してきたらそれを近接攻撃で弾いて隙を作り殴ってダウンさせてから高火力を叩き込み一気に体力を削ること。はっきり言って敵に回すとクッソ面倒だが、味方だと頼もしいと思う。有象無象の人間相手なら倒される心配しなくていいしね。

『伏せ』をしている残りの三体がシャドウ。その名の通り肉体が実体のない影の悪魔。初登場は『1』、『5』にてなんとまさかの味方キャラとして再登場。基本的には黒豹の姿をしているが、移動や攻撃の際はその影の体を変幻自在に変形させるバリエーションが多彩な奴である。こいつも戦う時はかなり面倒で、近接攻撃を行うと魔力の槍をカウンターとして飛ばしてくる（ゲーム最高難易度だと近づくだけで飛ばしてくる）。その為弱点の核を露出するまで遠距離から銃器で攻撃し、核が出たら地面からの槍攻撃に注意しつつ殴り、一定のダメージを与えると自爆モードに移行するので勝手に爆発するまでひたすら逃げる、という倒すまでが面倒なので可能なら相手にしたくない敵キャラだった。

そんなシリーズファンからは『クソ敵キャラ認定』された悪魔達に問う。

「俺が寝てからどのくらい経過した？」

すると、三日です、という思念が届けられた。

こいつ、直接脳内に!?　とネタに走りたい衝動に駆られるが話が進

まないので更に問う。
「あの時戦場にいた人間の殲滅は？」
――ご命令通り、完了しております。
「その三日間でクリフォトの樹に侵入者はいたか？」
――いいえ、誰も来ていません。
もたらされた情報にそんなもんかと頷く。大規模な戦場に突然出現したクリフォトの樹。戦場からは誰一人として帰らない。樹が発生してからまだ三日。人間の軍なら斥候を送って遠くから様子を見る、くらいはしているだろうがいきなり内部に侵入させるような無謀なことは流石にしないだろう。
島津なら次の日には来そうだけど、あれは日本の歴史が生み出した戦闘民族だから。人の形をした妖怪首置いてけだから。
――妖怪首置いてけは主様も該当するかと。
「喧しいわ!!」
真面目な口調で届く思念に思わず突っ込みを入れてしまう。
「……とにかく、ご苦労だった。もう帰っていいぞ」
――はっ、またの召喚を心よりお待ちしております。
そう言い残し、六体の悪魔はその肉体を霧散させて消える。
おっ、こいつら召喚した時に使ったレッドオーブがホントに返ってきた。ありがてぇ、ありがてぇ。使い勝手がなかなか良さそうな新スキルで助かるなー。
一人になった玉座の間で溜め息を吐いてから、これからどうしようか考えを巡らせることにした。

その後、散発的に人間の軍が討伐にやって来たので適切な処理の下養分にし、取得したレッドオーブで『時空神像』から何を購入しようか悩む日々。
軍以外にも俺を討伐しに来たハンターと思われる数人のパーティが何組もいたが、幸か不幸か顔見知りは誰一人としていなかった。
で、特に何事もなく一ヶ月が経過し実が成ったのでとっとと収穫してその場で食って樹を枯らすと、とっととトンズラこくことに。

拠点にしている街にはすぐには帰らず、増大した力に体と感覚を慣らしながら諸国を巡る旅行に洒落込む。
いや、だってすぐに帰ったら「あいつクリフォトの樹があった時だけいなくね？」って変な邪推されんのヤじゃん。それに折角の異世界なんだからあっちこっち行ってみたいし。ということであと一ヶ月間は戻らないぞと心に誓い、気が向くままに風が吹くままに旅を楽しむことに。
様々な土地に赴き、色々なものを見て、聞いて、食べて、学んで、たまに行く先々で魔物退治をして人々から感謝されて、充実した旅行の日々を過ごして一ヶ月。
ソロモンよ、私は帰ってきた!!　と心中のテンションとは大きく異なる静かな態度で馴染みのギルドの建物に足を踏み入れる。
と、
「う、そ……　ギルバ、さん？」
「久しいな」
そうだよ、ギルバさんのお帰りだよ！　お土産いっぱいあるから期待してね！　と思って施設内入ったら、なんか受付嬢達の態度がおかしい。まるで信じられないと言わんばかりに目を見開き、それから幽霊を見るような目でこちらを見つめてから、癇癪を起こした子どものように泣きながら口々に叫び出す。
「ギルバさん、ギルバさん、よくご無事で！」
「誰かギルマス呼んできて！　ギルバさん生きてた！　帰ってきたって伝えて！」
「うわあああああん！　ギルバさんのバカぁぁぁぁ！　もうとっくに死んじゃったと思ってたよう!!」
え？　何この反応？　死んだと思われてたの俺？
「ギルバァァお前この野郎！　心配させやがって!!」
「流石のギルバも今回はダメかと思ってたぜ」
「だから言ったろ。こいつなら必ず無事に帰ってくるってな」
「お、俺は全くこれっぽっちも心配してねーからな！」

他のハンター達も一安心したとばかりに言いながら歩み寄ってきた。
「ギルバが帰ってきたのは本当か!?」
血相変えて奥から飛び出してきたのはギルドマスターだ。俺の顔を見た瞬間、ほろりと涙を零しつつ呟く。
「バカ野郎、無事なら無事と連絡の一つでも寄越せ、この問題児め」

詳しい話を聞かせてもらうと。
俺が旅立ってから暫くしてクリフォトの樹が出現したという情報を得たハンターズギルドは、クリフォトの樹の除去と内部に潜む悪魔の主を討伐するという依頼を、全て断るという方針を取っていたんだとか。
前回の出現の際、所属していた凄腕ハンターのほとんどが帰らぬ人となり、僅かに生き残った者（俺があえて逃がした女性ハンター）も引退。ギルドとしては依頼は達成できないし、ベテランは軒並み失うしで良いことが何一つなかった。それ故に今回はクリフォトに挑戦すること自体を厳禁とした。
が、旅に出ると言っていなくなった俺が、クリフォトの樹が枯れて一ヶ月経っても帰ってこない。
まさかギルドを介さない討伐依頼を受けたか、もしくは個人的な理由で一人で討伐に向かい、返り討ちにあったのではないか。
そう思い込んでいたところに俺がひょっこり帰ってきたから、先ほどの大騒ぎになったのだという。
いやー、心配してもらって申し訳ないけど、そのクリフォトの主が俺だから要らぬ心配なんだよねー。こんなマッチポンプ仕込むつもりなかったんだけど。
「で、結局お前さん、クリフォトの樹に挑戦したのか？」
ずっと気になっていたのか質問してきたギルドマスターだけでなく他の皆も一斉に身を乗り出してきたので、一歩引きながら俺は嘘を並び立てることにした。
「挑んではみたが、あれは無理だな。逃げ出すだけで精一杯だ」

「そうか、お前さんでも勝てないか」
「ギルバさんが勝てないなら誰がやっても無理ですね」
「くぅぅ！　『首狩り剣士ギルバ』でも樹の主には勝てねーとか、どんな化け物だよ!!」
　とりあえず俺でも無理だと分かれば、今後またクリフォトの樹が出現してもこの人達は関わろうとしないだろう。それでいい、それでいいのだ。クリフォトの養分にする為に人殺しを嬉々として実行する俺ではあるが、知人を容赦なく殺せるかと問われればやりたくないとしか返答できない。
　勿論、天秤が傾くのはクリフォトの成長だ。それは何よりも優先される。しかし、俺は前回も今回も討伐しに来た連中の一部はわざと見逃していた。前例を作っておけば、もし知人がやって来たとしても追っ払うだけでいい。確かにクリフォトの成長に人間の血は必要だが、必要な量は万人単位。しかもその数は種を撒く時点で既に揃っている。なので後から追加で来た数人分を見逃した程度で支障はない。
「皆、聞いてくれ。ギルバでも討伐に失敗した以上、クリフォトの樹に関わるのは百害あって一利なしだ。どれだけ金を積まれようと、たとえ国王からの正式な依頼や命令だろうと我々は絶対に受けない。命あっての物種だ。このハンターズギルドに所属する者はクリフォトに関わるのを厳禁とする、もし関わろうとした場合は登録を抹消するのでそのつもりでな」
　厳かに告げるギルドマスターの言葉に野次が飛んだ。
「ギルマスに言われるまでもねぇ！」
「誰が行くかよあんな化け物の樹に！」
「軍が数万単位で食われてんだぞ!!」
「名声なんてクソ食らえだ!!」
「あんなの災害と同じだ災害と！　人間の手に負えねぇよ!!」
　ハンター達のごもっともなご意見にギルマスは満足気に頷く。
　ま、放っておいても一ヶ月程度で枯れるしな。関わらないのが一番が正解である。
「一つ、追加で情報がある。奴の名だ」

俺の発言に「……　やはりネームドか」と色めき立つが構わず続けた。
「奴の名は『ユリゼン』。クリフォトの主、『ユリゼン』だ。覚えておけ」
こうしてこの世界の歴史に俺の悪名が刻まれるのであった。
それは、『首狩り剣士ギルバ』の名声なんぞとは比較にならないくらいに誇らしく嬉しい瞬間であった。

うーん、しかし一つ問題が浮上してしまった。
今後クリフォトの樹を使うにあたって、毎回毎回数ヶ月間も『ギルバ』が不在だと、「あいつクリフォトが現れる時期にいつも旅に出るな」とか言われてしまうことが可能性として考えられる。考え過ぎ、自意識過剰、被害妄想乙、と断じられて笑われそうであるが、アリバイを用意できるようになるに越したことはないと思う。
ということで何か良いアリバイ工作及び解決方法がないか模索していて白羽の矢が立ったのは、『ドッペルゲンガー』だ。
簡単に言えば分身の術。自身のコピーを一体だけ作り出す能力で、初登場は『3』。同名の敵悪魔をダンテが倒すことで手に入る能力にして、『5』ではバージルが使用する形で復活。戦闘以外にも普段の日常生活から俺の代わりとして問題なく運用できるようになれば凄く便利なのではないかと。
よし決めた。これから暫くの間はドッペルゲンガーを取得し訓練に励むようにしよう。
何もクリフォトの種を撒いて実がなるまでの一ヶ月間を全てドッペルゲンガーで切り抜ける訳じゃない。それはいくらなんでも難しい、ていうか無理。魔力が持つか怪しいことこの上ない。
俺にはバイクや瞬間移動や空間転移といった移動手段があるのはギルドの誰もが周知の事実として認識している。そこを逆手に取って、人前に出る必要がある時だけドッペルゲンガーを送り込めばいい。ドッペルゲンガーが次の瞬間にはいなくなっていたとしても、「あ、ギルバさん転移したんだな」としか思われないはず。

本体がクリフォトと融合している一ヶ月間、ドッペルゲンガーがちょくちょくギルドに顔を出して仕事をいくつかこなす、それで十分のはずである。
だいたい、俺はソロで魔物や犯罪者の討伐しか受けない。護衛任務などと異なり長時間人前に姿を晒す必要性が皆無。ドッペルゲンガーが人前にいる時間など最低限でいいのだ、最低限で。

バトルオンリーのゲーム内と異なり、日常生活においてドッペルゲンガーは非常に有用だということが早々に分かってしまった。
単純にもう一人自分が増えるのだ。それだけであらゆる面でできることが増えたり、時間短縮に繋がったりするというもの。
何よりも素晴らしいのが、本体である俺とドッペルゲンガーは常にリンクしており、たとえ距離が離れていようとドッペルゲンガーの状況が分かり、見聞きしたものをリアルタイムで把握できること。こちらの指示にも即時対応してくれること。そもそも『自分の影』なので指示がなくても臨機応変に動いてくれること。そして戦闘能力はオリジナルの俺と同じであること。
「……なんでもっと早くドッペルゲンガー取得しなかったんだろ」
あんまりにも有能過ぎて喜ぶ前にこの能力を今まで有効活用できなかった事実に悲しくなったぞ。
頭を抱える俺の肩をドッペルゲンガーが優しく叩きながら仕方ないさと言わんばかりに首を横に振る……なんで自分の能力に慰められてんだ俺。
しかし打ちひしがれていても時間は戻らない。前を向こう、前を。
とにかく、これならクリフォトの樹を出現させても支障がないと証明された。アリバイ工作もバッチリ。後顧の憂いを断つことができてめでたしめでたし。
問題があるとすれば二十回に一回の頻度で、ドッペルゲンガーが顕現した瞬間から命令を一切受け付けず勝手に踊り始めるくらいか。たぶん、この能力における仕様なのだと思う。『５ＳＥ』でもバージル

の挑発にそんなのがあったし。もうそういう時はドッペルゲンガーの気が済むまで踊らせてあげている。躍りの内容がマイケルだったりブレイクダンスだったりパラパラだったりと毎回違うのがむしろ面白かったりして和むし、躍り終わると満足したのかその後はちゃんと命令通り動いてくれるし。

こうして俺は、表では魔物の退治を生業とするハンター『首狩り剣士ギルバ』としての顔で人間社会で堂々と生活しつつ、裏では『クリフォトの主ユリゼン』としての顔で人間同士の戦争に乱入し、人間を養分にする為に殺戮を繰り返していた。

そんな二つの顔を使い分けて暮らす日々を送っていたらあっという間に数年経過していて、いつしか『ハンター』は『冒険者』、『ハンターズギルド』は『冒険者ギルド』と呼ばれるようになっていた。

ある日。

『冒険者ギルバ』としての盗賊団殲滅の仕事が片付いたのでギルドに立ち寄り依頼完了の報告をしていたら――

「よう、久しぶりだなユ、ギルバ！　元気してたか？」

赤毛と赤目が特徴的な美丈夫にして悪魔であるギィが、美女三人を引き連れて来訪してきたのだ。

……　久しぶりだけど連絡もなしに急に何しに来たの？

とりあえず、この場で俺のことを『ユリゼン』ではなく『ギルバ』と呼んでくれた気遣いに感謝し、ギィへと向き直った。

「場所を移そう」
「ああ」
ギルド内では色々と都合が悪いと考え提案すればギィは文句言わずに頷いてくれるので、闇魔刀の鯉口を切り抜刀してから目の前の空間を十字に斬り裂く。
闇魔刀の能力により空間に穴が開き、空間転移が可能となる。そこに俺が闇魔刀を納刀し踏み入れば、ギィと美女三人が追従。
転移先は当然ながらギルドの外。俺が拠点にしている街のすぐそばにある山の頂上。そこから街を一望できる景色が良い場所であり、俺が鍛練などでよく利用する場所でもあった。
「ここなら人はいない。話を聞こう」
振り返り促せば、ギィは「まあ待て」と言ってから三人の美女の内メイドの格好をしている二人に視線を飛ばす。
二人のメイド――青い髪の女性と緑の髪の女性は恭しくお辞儀をすると、青い髪の方が恐らく魔法か何かで何処からともなく円形のテーブルを取り出し、緑の髪の方が白いテーブルクロスを取り出しテーブルにかける。それから二人はテキパキとした動きで（やはり魔法を使いながら）三人分の椅子、ティーセットと焼き菓子を用意し、ティータイムの準備が完了した。
準備が整い次第ギィが勝手に椅子に座り、三人の美女の内最後の一人――白髪の美女がその隣に座る。
「ユリゼン様もどうぞこちらに」
緑髪のメイドがギィと白髪美女の対面に座るよう促すので俺は促されるまま座ることに。
俺が座るのを見届けて、二人のメイドはギィの背後に控えるように立つ。
「では改めて。久しぶりだな、ユリゼン」
「ああ。久しいな、ギィ」
紅茶と焼き菓子の良い香りを嗅ぎながら、やり取りはとても穏やか

に始まった。
「突然の来訪には驚いたが、どうした？　絶世の美女を三人も引き連れて。お前と共に来たのであれば勿論紹介はしてくれるんだろう？」
　来訪目的が「こいつら全員俺の女だ！　羨ましいだろ！」とかいうただの自慢だったら熱々の中身がまだ入っているティーカップでぶん殴ってやると密かに心に誓う。
「あら、お上手ですこと」
　クスリと笑みを浮かべる白髪の美女は、優雅な仕草で紅茶を一口飲むとティーカップを置いてから立ち上がる。
「私はヴェルザード。以後、お見知りおきを」
「ギィ様の忠実なる下僕、ミザリーと申します」
「同じくギィ様の忠実なる下僕、レインと申します」
　美女三人が丁寧にお辞儀をしてくるので俺も立ち上がり軽く頭を下げた。
「クリフォトの主、ユリゼンだ。訳あって人間社会でギルバと名乗っている。気軽にユリゼンと呼んでくれて構わないが、事情を知らない者がいる場合はギルバと呼んでくれ」
　言って着席。三人は頷き、白髪の美女――ヴェルザードも着席する。
　緑髪のメイド――ミザリーと青髪のメイド――レインは立ったままだが服装の通りメイドらしいので気にする必要はないな。
　折角用意してもらったのだから紅茶と焼き菓子を堪能しよう。
「……ふむ、どちらも美味いな。素晴らしい」
　両方共恐らく最高級と思われる品質に違いない。香りも良い、味も良い、後味も良い。だが何よりも用意してくれた二人の腕が良いのだ。故に最高に美味いのだと分かる。
　俺の視線を受けて僅かにメイド二人の顔が綻び、会釈する程度に頭を下げた。
「ギィ、少しは見習って。この紳士ぶりを」
「俺が紳士じゃないとでも？」
「……　ハア」

ヴェルザードが肘で隣のギィを小突くが彼は動じないので、彼女はこれ見よがしにクソでか溜め息を吐く。今ので二人の関係を垣間見た気がした。

それから俺とギィは互いに、あの別れからどうしていたか話し合う。

俺が人間社会に紛れ込み人間のハンター（今は冒険者）として生活しており、これまでどんな日々を送っていたかの経緯は向こうは概ね知っていたようだ。彼はかなりの数の配下がいるらしく情報収集の一環で調べさせることもあれば、彼自身が娯楽として人間社会に様子を見に来るとのこと。

で、俺の話は一旦置いといて彼の話に移るのだが、彼は彼で結構色々あったようだ。

まず、この世界を作った神――星王竜ヴェルダナーヴァと出会い、勝負を挑んでボロ負けしたんだと。

いや神って何だよ？　とこの世界に来たばかりの俺なら笑い飛ばす内容だが、今の俺は信じるに値すると思っている。マジでこの世界は剣と魔法のファンタジーだから、悪魔も天使も精霊もエルフもドワーフもドラゴンも獣人も吸血鬼もそれ以外の多種多様な種族が存在しているのを知っている。そりゃそんな世界なら神様の一人や二人くらいいてもおかしくない、と半ば諦めの境地である。神様なら俺がこの世界に来たことについても何か知ってたりするんだろうか？

んで、その神様ってのは竜種というドラゴンの祖先みたいなもんで、竜種と呼ばれる存在はこの世界で四体のみ。

その内の一体（神様）に喧嘩を売ってボロ負けして友情が芽生えたので、それ以来神様から頼まれた『調停者』という仕事に勤しんでいるとかなんとか。『調停者』とは『魔王』として世界に君臨しつつ、世界が崩壊しないように、人類が絶滅しないように上手いことやっていく役目、と彼は誇らしげに笑う。が、俺には話のスケールが壮大過ぎてとてもやってられん仕事だ。いくら神様からの頼みだからってそんな面倒臭そうなことによく首を縦に振ったなと思う。

ちなみにヴェルザードはヴェルダナーヴァの妹で、兄に認められた

ギィを試す為に喧嘩を吹っ掛けたのが二人の馴れ初めだという。
確か少し前に天変地異が起きたり、大陸全土で年間の気候が変になって以来戻らなくなったり、気になって調べてみたら地軸がおかしくなってたりなことあったな。あれ全部お前らのせいか。
なお、この世界を創造した神である星王竜ヴェルダナーヴァには二人の妹と一人の弟がいる。
一人目の妹が目の前にいる白氷竜ヴェルザード。人の姿をしているが、本当の姿は竜とのこと。
二人目の妹が灼熱竜ヴェルグリンド。
最後の弟にして末っ子が暴風竜ヴェルドラ。
実はヴェルドラと遭遇したことはないが、その名前だけはハンター時代からたまに耳にしていた。よく暴れては酷い被害を出す生きた天災扱いで、人間の誰もが自分の住んでる国に、街に、村に来んなと思っていることもよく知っている。ある意味、戦争が勃発すると戦場に乱入してくる俺『クリフォトの主』とどっこいどっこいなくらいに畏怖されてたり。まあ、俺は主に王族や貴族や軍関係者などの政治及び戦争に直接関わる者達から、ヴェルドラは人類全体からという違いはあるが。
ヴェルドラ以外の名をあまり聞かないのは、単に他の三体が無駄に暴れたりしないからだ。
「とまあ、俺の話はこんなもんだ」
語り終えたのかギィはティーカップに手を伸ばす。
俺よりも遥かに濃い日々を送っていたのだなぁ、と思わせる話に苦笑し俺もティーカップに手を伸ばし紅茶を飲み干す。
直ぐ様レインが動き紅茶のお代わりを用意してくれたので「ありがとう」と礼を述べると、ギィがティーカップを置いて少し前のめりになって口を開く。
「ユリゼン、お前も魔王にならないか？」
「……」
話の流れからなんとなく、そんなことを言われるんじゃないかと予想はしていた。いや、むしろ本題はこっちに違いない。

「理由を聞いてもいいか？」
「いくつかある」
質問にギィは返答する。
まず、最大の理由がユリゼンとしての活動とギルバとしての活動が『魔王』の仕事に合致すること。無辜の民を守りつつ増長した愚かな一部の人間を粛正する、というのがいかにも『魔王』だと映るらしい。
次。『魔王』は人々から畏怖される存在でなくてはならず、ある程度の強さが必要であること。これに関しても俺は問題なし。『クリフォトの主、ユリゼン』の評判は文句の付け所がないと言う。
最後に、俺とは気心知れている仲であること。仲間にするなら気が合う者がいいとか……　最後の理由だけやけに可愛いな。悪魔なのに随分と人間臭い男だ。
もうあれだ、この世界の悪魔とＤＭＣシリーズの悪魔を同じ悪魔と見るのはやめよう。同じカテゴリーの別種族だということで納得しよう。だってＤＭＣに登場する悪魔、極一部を除き見た目が完全にモンスターだしな。しかもどいつもこいつも破壊と殺戮しか考えてない、まさに文字通りの化け物共。理性と知性がありコミュニケーションが取れるギィ達とは全く別な存在だ。
しかし魔王か。俺の脳内でＤＭＣシリーズの『魔王』達が浮かんでは消えていく。『魔帝ムンドゥス』、『覇王アルゴサクス』、前の二名と同格とされる大悪魔『アビゲイル』、そして俺の名前の元ネタである『反逆王ユリゼン』（バージル）。
うん、どいつもこいつも最終的にダンテにボコられた連中じゃねーか!!
ついでにスパーダの力を手にして『神』になろうとしたクソオブザクソ野郎な人間二名も何故か一緒に思い出す。
ＤＭＣシリーズにおいて『魔王』や『神』を名乗ることは後にボコられるフラグでしかないんだよなぁ。
そう考えると『魔王』になるのは気が進まない。以前の『世界の言葉』から察するに俺が魔王として覚醒進化を果たしていようとも、だ。
そこで俺はハッとなる。良いことを思い付いた。

「そういえば、お前とはまだ決着がついていなかったな」
突然脈絡なく話を変えた俺の意図に気づいたギィの顔が好戦的にニヤつく。
「いいぜ。そういうことなら、決着といこうか？」
和やかなお茶会の雰囲気が変わる。闘争の気配が醸し出され空気がピリつく。
ミザリーとレインが素早い動きでティーセットと焼き菓子を載せた皿とテーブルクロスを片付けて下がり、ヴェルザードがゆっくりと立ち上がってから跳躍してその場を離れる。
残されたのはテーブルと三つの椅子、睨み合う俺とギィ。
奇しくも計ったようなタイミングで俺とギィは同時にテーブルを真上に蹴り上げた。
空高く舞い上がるテーブルになど目もくれず闇魔刀の鯉口を切り抜刀。ギィに斬りかかり、彼もいつの間にか手にした剣で応じる。
甲高い金属音が響く。一度や二度では終わらない。何度も何度も刀と剣がぶつかり合い、交錯し、鎬を削り合う。
発生した衝撃波の余波で三つの椅子が消し飛ぶが気にしない。
俺とギィとの間にテーブルが落下してくるが構わず斬り結び、超高速で振るわれる刀と剣の間に割って入ったことでテーブルが一瞬にして原形を失い木屑と化す。
やがていくつもの剣戟の果て、鍔迫り合いとなり至近距離で睨み合いになった。
「前より随分力をつけたじゃねーか、ユリゼン！」
「それはお互い様だろう、ギィ！」
「当然だ！　ヴェルダナーヴァと出会ってユニークスキル『傲慢者（プライド）』を手にし、それがヴェルザードと喧嘩して究極能力（アルティメットスキル）『傲慢之王（ルシファー）』にまで進化したからよ!!」
「ベラベラとよく喋る！　自慢か!?」
「お前はどうなんだって聞いてんだよ!!」
互いに後ろに跳んで距離を離す。
「俺か？　俺は……」

俺にはギィのような出会いとそれによる強化イベントには恵まれなかったが、勿論何もせずに漫然と過ごしていた訳ではない。
彼と初めて出会って以来、俺は何度クリフォトの種を蒔いただろうか？
樹を育てる為に一体何人の血を樹に吸わせただろうか？
これまでどれほどのエネルギーを樹から供給され、いくつ果実を食っただろうか？
どれだけのレッドオーブを『時空神像』に捧げたのだろうか？
そして『ギルバ』として生活していく中で、どれだけ技を磨いてきただろうか？
ただひたすらに力を求めた結果を、今この場で示す時。
「俺もお前と同じだ。以前とは比較にならないほど自身を高めていた」
小手調べも探り合いもここから先は不要。全開で飛ばしていく。
あの時のように、勝負を下らん理由で中断することがないように。
圧倒的な力ですぐに終わらせてやる。
だから――

真・魔人化発動（シン・デビルトリガー）!!

変身に伴い青い衝撃波が妖気（オーラ）と共に全身から放たれる。
以前彼に見せた魔人化（デビルトリガー）の更に上の形態。魔人化（デビルトリガー）を超えた魔人化（デビルトリガー）。
強さは宣言通り以前とは比較にならない。
驚愕の表情となるギィには悪いがもっと驚いてもらう。
ここから更に追加で『ドッペルゲンガー』を発動。
真・魔人化形態の俺の隣にもう一人の俺が真・魔人化形態で現れる。
つまり戦力は単純に二倍。
これで押し潰す。
「……　面白くなってきたじゃねーか」
そう言うギィの頬に流れる汗は冷や汗だ。この状況で強がりとはいえ笑っていられる彼の胆力には心から尊敬する。

「いくぞ」
閻魔刀を構えた二人の俺が同時に彼に突撃した。

目の前で――周囲に被害を出さないように張った結界内――激しい戦闘が繰り広げられている。
しかし、その戦いは互角ではない。端的に言えば一方的であった。
ギィは必死に食らいついているが、相手は二人。自分と同格の存在を二人同時に相手にしている状況。分が悪いのは当然だ。
二人の戦う距離は武器を振るえば届く間合い、つまりは接近戦。本来であれば優れた剣士であるギィが得意とする距離だが、相手の能力が著しく彼の優位性を損なわせていた。
原因はユリゼンの技の一つ、幻影剣。
ユリゼンの魔力で構成された剣で、それを飛び道具として発射してくる。簡単に説明すればそれだけの代物なのだが、これが非常に嫌らしい使い方をされる。
ただの飛び道具として使うだけなら対処は容易い。が、当たり前だがそれだけではない。出現した時点で既にギィを全方位から囲むように配置されたり、配置されたそれらが瞬間移動を行う為の基点として使用されたり、ユリゼンを守るように円陣を組んだ幻影剣の群れがぐるぐる回っていたり。
常にギィの周囲を、真上を、正面を、背後を、左右を、死角を、いつの間にか配置された大量の幻影剣が狙っている。しかもその状態のギィに対して、二人のユリゼンが円陣を組んだ幻影剣に守られた状態で突っ込んでくる。
おまけにユリゼンの幻影剣は魔法と大きく異なり、顕現する際にそれらしい予備動作を見せないし準備も必要としないらしい。どんな体勢、姿勢、何かの動作中でも、それこそ剣で斬られていても構わず幻影剣を配置もしくは飛ばしてくるのだ。
幻影剣も厄介だがそれと同様に厄介なのがもう一人のユリゼン――ドッペルゲンガーの存在である。

ドッペルゲンガー自体はただの『本体の影』でしかない。ただし戦闘能力は本体と同一である為、純粋に本体が一人増えたもの。単純に戦力が二倍となっただけでも不利は否めない。
少しでも油断すれば幻影剣に即串刺し。幻影剣に気を取られると二人のユリゼンから攻撃を受ける。
思いっ切り距離を離しての遠距離戦も意味はない。先の通り幻影剣は出現した時点でギィを包囲しており、その幻影剣がある場所に瞬間移動するユリゼン、そしてもう一人のユリゼンが距離に関係なく居合い斬り――次元斬を当ててくる。
加えて酷いのがユリゼンのタフさと再生能力。ギィが肉を切らせて骨を断つ決死の覚悟で繰り出した一撃に全く怯まない。たとえ剣で心臓を貫かれようと、自爆覚悟の範囲攻撃に類する魔法を食らっても平然としながら反撃してきた。ダメージを受けてはいるようだが少しも気にした様子もなければ痛痒を感じない振る舞い、瞬時に再生する回復力に不死身なのかと疑う。
なのにギィの傷は再生しない。厳密には闇魔刀で斬られた傷だけは治らない。厄介な性能を持つ刀を所持していた。
前回が結果的に見れば互角に渡り合っていただけに、両者の力の差にこれほど開きがある事実に驚きを禁じ得ない。
それなのにギィは笑っていた。とても楽しそうに、嬉しそうに、まるで遊びに興じる幼子のような笑みで。
「彼、危険ね」
ポツリと呟くヴェルザードの表情、目つき、氷のように冷たく刃のように鋭い視線も危険だとミザリーとレインは思ったが、決して口にはしない。
「似たような能力はいくつか知ってるけど、それらとは根本的に何か違うわ。いえ、そもそも彼の能力、彼の存在そのものが全体的に私達とは異なる気がする……　彼は一体何者なの？」
紡がれた疑問は一人言のようでありメイド二人の返答を待っている訳ではないようだが、二人は可能な限り答えることとした。
「ユリゼン様は、我々と同じ悪魔族でありながらどの系統にも属して

いません」
「どの系統でもない？」
　ミザリーの言葉にヴェルザードが訝しむ。
「はい。最初は変身したお姿が青いのでギィ様やミザリーは私の系統かと思いましたが、もしそうであればそもそも私がユリゼン様の存在を認知していないはずがないのです」
「……」
　レインの補足にヴェルザードは形の良い眉を少し歪めて考え込む。
「本来なら存在し得ない、どの系統にも属さない悪魔」
「ギィ様曰く、初めて会った時のユリゼン様は本当に何も知らない赤子のようで、悪魔族についても、この世界についても何一つ知らなかったそうです」
「同胞としては認識できるのですが、こう、表現し難い違和感のようなものが拭えない、そんな不思議な方ですね」
「違和感、そう、それよ。私も彼には違和感を覚えるわ」
　ミザリーの言うことに頷き、レインの補足にヴェルザードは同意。
　確かに生まれたばかりの悪魔はどの系統にも属していない。だが、いずれはどれかの系統に属することになる。これに例外はない、はずだった。
　だがユリゼンは違うのだ。生まれてから何年経ってもどの系統にも属さない。しかも生まれたばかりなのに当時からギィに匹敵する戦闘力を保有していた。
　悪魔族としては明らかに異常で異質な存在、それがユリゼンだ。
「おまけにユリゼン様には物質生命体、具体的には人間と全く同じ生理現象があるのがそれに拍車をかけています」
「生理現象？　そういえば以前は彼が途中でトイレに行きたくなったから決着がつかなかったって……」
「はい。悪魔なのに生命活動上で必要なものが人間と同じなんですよ。ユリゼン様は」
　ヴェルザードはまるで知らない別世界からやって来た生物の話を聞かされているような気分になってきた。

悪魔でありながら悪魔らしくないその生態。かといって人間かと問われれば確実に否だ。あの凶悪なまでの妖気（オーラ）、あの禍々しい姿こそ変身系の能力を持つ悪魔の一言に尽きる。

聞けば聞くほど謎が深まる。お兄様なら何かご存知かしら？　と頭の片隅でそんなことが浮かんだ。

ギィは何故かやたらと彼を気に入っているようで、ヴェルザードとしてはそれが気に食わないという個人的な感情に加えて、直感した通り危険な存在だと考えていた。

できることなら早急に排除したい。女としての感情と竜種としての本能が訴える。だがそれを実行に移せばギィに嫌われるのは分かり切っていた。

（こっちの気も知らないで、私よりも男の友情を優先するんだから）

「……　決着がつきそうです」

「ギィ様、もうダメそう」

主が敗色濃厚で少し不満そうなミザリーはともかく、なんだかちょっと面白そうに言うレインに下僕としてその態度はどうなんだと内心で舌打ちする。

やがて、ヴェルザードがユリゼンを睨み付けるその青い宝石のような美しい瞳は、金色へと変化して――

両手で握った闇魔刀を袈裟斬りに振り下ろし、その斬撃をまともに食らいギィは片膝を突く。

「くっ……！」

「勝負あったな」

剣を杖のようにして立ち上がろうとしているギィに告げて真・魔人化を解除し、血振りしてから闇魔刀を納刀する。

するとドッペルゲンガーがいかにも「俺の勝ちだぁぁぁっ!!」と言わんばかりに闇魔刀を持った右腕を高く掲げてガッツポーズ。

いや、何やってんだ早く消えてくれ。

だがドッペルゲンガーは俺の意思に反して消えない。それどころ

かギィの周囲を回りながら踊り始めた。
やめろ！　なんで急に『ＤＭＣ５ＳＥ』のバージルのＥＸ挑発みたいなことしてんだ!?　手拍子を打つな！『カモンカモン、一緒に踊ろう』じゃねーから！　煽ってるようにしか見えねーだろ!!
「そこまでだ!!」
内心焦りまくった俺は慌ててサタデーナイトフィーバーのポーズを決めたドッペルゲンガーを閻魔刀で真っ二つにぶった斬って消滅させた。
お、怒ってないかな？　ドキドキしながらギィの顔色を窺えば、今の一連のやり取りが面白かったのか腹を押さえて必死に笑いを堪えている。
怒ってないみたいだ。良かった。
それにしても、と思う。
幻影剣とドッペルゲンガーがなかったら負けてたかもしれない。
やっぱ強いわこの二つ。ゲーム内ではなく現実だからこそ可能となる操作や運用が、戦局をこちらを有利にしてくれる。その分、魔力消費激しいんだけどね。真・魔人化形態でやるならなおのこと。
傍から見れば俺に余裕があるように映るけど、実際は魔力の残りも僅かで、もう少し粘られたら魔力切れになってたからかなり際どい勝負だった。
正直に言わせてもらうと、真・魔人化まで使ってんだから余裕で勝てんだろ！　ダメ押しにドッペルゲンガーも使うから圧倒的だな我が軍は！　勝ったなガハハッ!!　って高を括ってたら予想以上にギィも強くなってて全然倒れてくんねーから内心ヒヤヒヤしたわ。途中から、こっちは真・魔人化してドッペルゲンガーまで使って残り魔力とか後先とか考えず惜しみなく幻影剣も使いまくってんだから早く倒れろバカ野郎ぉぉぉっ!!　ってなってたし。
ユニークスキル『傲慢者（プライド）』をゲットして、それが究極能力（アルティメットスキル）『傲慢之王（ルシファー）』にまで進化したとか言ってたっけ？　聞かされた時はなんかイマイチよく分かってなかったけど、魔人化（デビルトリガー）できるようになって暫くしたら真・魔人化（シン・デビルトリガー）もできるようになったよ、って言い換えると

ギィの以前を遥かに凌ぐ強さに「なるほど!!」と納得できてしまう不思議。

体に蓄積された疲労を吐き出すように溜め息を吐いたその時、何か違和感を覚えた。

身体が、動かない？

指一本動かせない。眼球も動かせないので視界は固定されたまま。その変えられない視界内でのギィもまるで時間が止まったかのように動きを止めている。呼吸すら止まり彫像になってしまったか、もしくはビデオ映像を一時停止したかのように。

……　時間が止まってる？

まさか!?

パーフェクトクイックシルバー、発動!!!

世界の時間が止められている現象に言い知れない不安と危機感を覚えた俺は、ある意味では真・魔人化を超える奥の手中の奥の手を躊躇せず発動させる。

ＤＭＣシリーズにも時間に干渉する能力や敵キャラ、アイテムは存在した。『1』だとアイテムとして『イエローオーブ』と『時の腕輪』、『3』では敵キャラの『妖馬ゲリュオン』とそいつを倒すと手に入る能力『クイックシルバー』、『5』では『妖馬ゲリュオン』の再登場とそれに伴う諸々。

イエローオーブは死亡すると死亡する少し前に時間を戻してくれるアイテム。要するに『死に戻り』。ゲーム内のメタ的な言い方をすればコンティニュー用の消費アイテム(残機)で、これが尽きたらゲームオーバーを意味する。

時の腕輪は戦闘に利用する装備アイテム。魔力を消費することで自分以外の時間を止めることが可能。欠点は魔力を消費する関係で装備中は魔人化できない、強敵（ボスキャラ）には通じないこと。

妖馬ゲリュオンは時空間を操る能力を持つ馬の姿をした悪魔。

元々は太古の人間社会で名馬と呼ばれたほどの馬だったのが、魔界に迷い込んで瘴気を浴び続けたら悪魔化してしまったという設定があったり。この馬、馬の癖して空間転移ができたり、自分以外の存在の時間を止めたりゆっくりにしたりが可能。そんでゲリュオンを倒すと取得するのがクイックシルバー。魔力と引き換えに自分以外の存在の動きを一定時間スローモーションにできる『タイムラグ』を発動させるスタイルアクションで、分類的にはアイテムや装備品ではなく特殊能力。しかもこれボスにも通用する反則技、なのだが魔力をバカ食いするので使う場面を考える必要があった。

時間に干渉する能力ってどんな創作物でも反則級に強力だけど、DMCシリーズもその例に漏れない。

『2』と『4』はどうしたかって？　あるにはあるけど『2』の『クロノハート』は魔人化中に剣での攻撃を敵に当てるとその周囲の時間が遅くなるクイックシルバーの下位互換な装備品なので印象に残らない、『4』の『クロノスの鍵』はステージギミックを突破する為のキーアイテム（時間を遅くして罠を回避し易くする）でやっぱり印象に残らないので割愛だ割愛。

で、俺がこれらをどうしたかというと、当然ながらレッドオーブを『時空神像』に捧げて取得済み。

イエローオーブはゲーム内だとただのコンティニュー用消費アイテムだが現実世界だと所持してるだけで『死に戻り』ができるチートアイテムなので、購入の際に必要なレッドオーブがアホかと思うほど高くて二個しか買えてない。時の腕輪も高かったけど思い出補正が発動して衝動買いしたから持ってる。ちなみに時期は真・魔人化を取得してからの話である。

クイックシルバーは実は前の二つより先に取得していた。いつかというと一番最初にクリフォトの樹を生やした時だ。樹と融合しつつ玉座に座った状態で戦えるように取得した能力の中の一つとして。ほら、『5』でユリゼン（俺じゃなくてバージルの方）と戦う時『ゲリュオン』の技使ってくるじゃん、あれねあれ。

補足すると、『3』と『5』の時間干渉能力って『ゲリュオン』由来

のものだから、それぞれの作品で仕様や運用が若干異なってても『時空神像』的には『同じ能力』と見なしてるみたいで、レッドオーブを消費して入手する能力は一種類『クイックシルバー』のみって扱いだった。

まあ、結局当時はクイックシルバーが必要な強敵は来訪しなかったが。

『2』の『クロノハート』と『4』の『クロノスの鍵』は？　知らない子ですね（すっとぼけ）。

そして重要なのがここから。

クイックシルバーを保有している状態で時の腕輪を入手すると、その時不思議なことが起こった！

《レッドオーブを消費することで『クイックシルバー』と『時の腕輪』を合成、進化させることが可能》

そんなことできるん!?　というのが当時の率直な感想。

この合成進化、何を隠そう『魔剣スパーダ』や『魔剣ダンテ』を作成する為に元々『時空神像』に備わってた機能みたいなんだよね。

例えば『魔剣スパーダ』を作るには、まず『フォースエッジ』っていう何の能力も持ってない『1』の初期装備と、『アミュレット』っていうやはり何の能力も持ってないただのアクセサリーのアイテム（ダンテ用とバージル用で二つ）が必要で、それらを合成進化させると『魔剣スパーダ』になる、という過程を踏まなければならない。

ストーリー的には『フォースエッジ』は『魔剣スパーダ』の本来の力が封印された状態で、その封印を解く鍵がダンテとバージルがそれぞれ母の形見として所持してる二つの『アミュレット』、父スパーダの魂を正しく継承したダンテが全てを揃えることで『フォースエッジ』は真の姿『魔剣スパーダ』へと変化する、という初期装備が最強武器になる熱い展開がある。

前置きが長くなってしまったが、合成進化とはつまり特殊な条件に当てはまる能力やアイテムを文字通り一つに纏めてより上位のものへと置換すること。

その過程を経たが故に、クイックシルバーはゲームオリジナルには

存在しない『パーフェクトクイックシルバー』（命名は俺）となったのだ。
進化したそれは完全なる時間停止能力。所謂『ザ・ワールド！　時よ止まれ！』だ。これでスタンドバトルごっこが捗る。
しかし、やはりお約束というか何というか、同じ能力を持ってる相手には『今、動いたぞ……　こいつ……　バカなッ！　まさか、まさか、同じタイプのスタンド!?　我が止まった時の世界に入門してくるとは……　！』ってなるんですよね、お互いに。
……　あれ？　このアイテム合成進化の理論でいくと下位互換だったりステージギミック突破用アイテムだったりしても、とりあえず手に入れておけばパーフェクトクイックシルバーの更なる強化に繋がるんじゃね？　と気がつくのはこの一件が終わってからである。間抜けがぁ!!

時間が止まった世界の中で、俺は背後に振り返る。
そこには、金色の瞳を輝かせ危険な光を放つヴェルザードが。
こちらを射殺さんばかりの眼光は、露骨な警戒心と敵意が宿っていた。
何だ？　なんでこんな風になってんだ彼女？　彼ピッピが負けたことそんなに気に食わない？
とりあえず一戦終えて疲れた体に鞭打って残り少ない魔力絞り出してパーフェクトクイックシルバー発動させてるから、とっとと話を進めないと。
……　二連戦は勘弁だぞ。

神・・・・・　とついでに勇者

時間が止まった世界の中でこちらを睨んでくるヴェルザード。
それと相対する俺は既に疲労困憊。はっきり言って体力的にも魔力的にもこれっぽっちも余裕がないので、話をとっとと終わらせて休みたい。
「俺と二人きりで話がしたいならこんな大袈裟なお膳立ては不要だ」
だから早く能力解除してくれません？　痩せ我慢してる身としてはこの状況で平静を装うのも辛いの。心理描写すると今の俺は生まれたてのバンビなの。そんくらい疲れてんの。一人で辛うじて立ってるの。心境的に足ガクブルしてるイメージなの（決して実際にガクブルしてる訳じゃない）。人をダメにするソファーにでもこの身を投げ出して脱力させたいんだよ。
言った瞬間、彼女は目を細めるといきなり殺気を溢れさせ貫手で攻撃してきた。
「っ！」
ファッ!?　問答無用かい!!　咄嗟に納刀したままの鞘で防ぐ。というかパリィ。
「!?」
攻撃を弾かれ大きく体勢を崩し仰け反り下がるヴェルザードに反撃などしない。あまりにも隙だらけだったので首と胴体を離婚させてやろうかと一瞬魔が差しそうになったがギィの知己に反撃でダァーイ（疾走居合）なんてできる訳がなかった。
なおギィは怪我が酷いせいか、もしくはそもそも止まった時の世界に対応できないのか不明だが動けない模様。どちらにせよやり過ぎたかなと少し反省。
「理由ぐらい聞かせてもらってもいいと思うがな」
「あなたの存在が危険だからよ」
冷たい返事に俺は首を傾げる。お前さんがそれを言う？　竜種のお前さんが？　だいたいこの場に『危険じゃない奴』なんているの？
全員、人間の国家なんて大した労力も使わず片手間で消し炭にでき

るでしょうが。
「竜種の一体に危険視されるとは、誇っていいのか？」
「ふざけないで」
　ピシャリと言い切られてしまう。
「……　あなたは、得体が知れない」
「それはお互い様と言わないか？　人間から見れば俺もお前も化け物だ。神の妹と悪魔、どちらも得体が知れない存在だろう」
「あなたは薄気味悪い」
「俺もいきなり殺そうとしてきたお前が薄気味悪い」
「ギィに近寄らないで」
「それが本音だろうが」
　ギィの方からこっちに寄って来るんだよなぁ。
　つーか何なんだこの嫉妬深い女。結局彼ピッピの目が自分じゃなく男友達に向いてんのが気に食わねーだけじゃねーか!!
　なんか頭に来たな。こいつ、バイタルスター（体力回復用アイテム）とデビルスター（魔力回復用アイテム）使って全回復してからボコッていいよね？
　俺が左手の親指で刀の鍔を押し上げ、鯉口を切ったその時――

「いけないよ、ヴェルザード」

　そいつは現れた。
「っ!?」
「お兄様っ!!」
　突然の闖入者の存在に俺とヴェルザードは揃って仰天。
　全く気配を感じなかった。声が聞こえるまで存在を認知できなかった。一体何者!?　と考えたが答えは既に出ている。
　この世界の創造主にして神、ヴェルザードの兄、星王竜ヴェルダナーヴァだ。
　一見するとただの人間なのに底知れない何かを感じた。いつの間にか冷や汗をかいている。目の前の神に気圧されているのだろうか。

とにもかくにも第三者の乱入に気分が萎えた。戦う気が失せたので刀の鍔を押し上げていた親指の力を抜く。
「すまないね、妹が」
「……」
穏やかな口調での謝罪に俺はどうしたもんかなと悩み無言。
「お兄様、私は――」
「その前にギィ達も話に加えるべきだね」
何か言おうとする妹を遮りパチンッと指を鳴らせば、俺とヴェルザードの時間停止能力が強制的に解除され、止まっていた時が動き出す。
……マジかよ……!?
格上だ。しかも圧倒的なまでに。時間停止能力に対応するだけじゃなく、能力の強制解除まで呼吸をするように平然とやってのけた。
まさに何でもありの神様だ。この時点で妹のヴェルザードなんて比較対象にもならん。本当に同じ種族で兄妹なのかすら怪しい。それほどまでに両者の間に実力差があるのだと確信する。
クリフォトの樹をあと何十回育てたら勝てるかな?

「さて、お茶でも飲んで落ち着いて話そうか」
改めてメイドの二人がテーブルと椅子四つ、ティーセットを用意し、俺とギィとヴェルザード、そしてヴェルダナーヴァが席に着く。
「まずは自己紹介から。ボクはヴェルダナーヴァ、ヴェルザードの兄だ」
「ユリゼンだ、人間社会ではギルバと名乗ってる。呼び易い方で呼んでくれて構わない」
「ありがとうユリゼン。それから今一度謝罪させて欲しい、妹が本当にすまない」
柔和な笑みから一転、本当に申し訳なさそうな表情で頭を下げるヴェルダナーヴァ。
それに誰よりも反応したのはヴェルザードだ。

「お兄様が頭を下げるなんて！」
「ヴェルザードも下げるべきなんだよ？」
「……！」
感情を昂らせる妹に頭を下げたままジロリと横目で睨む兄。その口調は穏やかでおいたをした妹を嗜める兄のそれだが有無を言わせぬ圧力があり、数秒の逡巡後結局彼女は蚊の鳴くような小さな声で「ごめんなさい」と謝罪し兄同様こちらに頭を下げる。
「言っておくが、俺は敵意や殺意に対しては同じもので返す。害意を抱き攻撃してくる連中にやり返さないほど心が広い訳じゃない。むしろ後腐れがないように徹底的に、完膚なきまでに叩き潰す」
「流石は我が親友。その容赦のなさ、俺と共に『魔王』として君臨するに相応しい」
なんでギィが自慢気なんですかねぇ……　というか、俺とお前って会ってまだ二回目だよね？　なんでこんなに好感度高いの？　あとさっきの勝負は俺の勝ちだから『魔王』にはならねーから！　お前の仕事ちょっと手伝ったり相談に乗るくらいなら全然いいんだけどさ。
なお今のギィの発言にヴェルザードがちょっとショックを受けたような顔になる。さっきのように俺がヴェルザードに襲われて、もし返り討ちにあってもギィ本人はあまり気にしないということを意味するからだろう。彼としては自分から喧嘩を売っておいて負けても自己責任の範疇だから我関せず、というスタンスなのだ。
ま、男ってそういうことに関しては結構ドライだしな。むしろ女が感情的になり易くて湿気高くて面倒なんだよ。
「厚意や善意などに対しても同じだ。そういったものには誰が相手でも可能な限り礼を尽くすべきだと俺は考える」
「うん。それは素敵な考えだね」
腕を組んでうんうん頷き同意を示すはヴェルダナーヴァ。
これは俺の持論であり処世術である。自分を嫌ってる連中相手に下手に出たりへりくだったり媚びへつらったりする必要なんてない。逆にされてありがたいと感じたことは同じものを返していければい

い。
人間社会で暮らすことが俺にとって都合がいいからこそ、俺も『ギルバ』という形で人間にとって都合がいい存在として人間社会に貢献している。困っている人達を助け、救い、その返礼を受け取る。利用し利用される、見事なギブアンドテイクだ。
じゃあ『ユリゼン』としての活動――クリフォトの樹を育て人間を養分とする行為は『ギルバ』の真逆じゃないかとなってくるが、そもそも本来の目的はこっちだ。力を手に入れる為、ただそれだけの為に人間を犠牲にしている。そこに忌避感や嫌悪感もなければ罪悪感もない。そんな殊勝な感情があれば良心の呵責に苛まされて最初からクリフォトの種を蒔こうとは思わない。
人殺しはいけないこと？　私利私欲の為に人間を蹂躙するのは悪？　そうだな、そうだろうとも、あくまでも地球で特にモラルが高く平和ボケした日本人の価値観や倫理観そのままで、日本人として生きてくという話ならな。
人間を辞めた某金髪吸血鬼も言っていただろ？　『お前は今まで食ったパンの枚数を覚えているのか？』って。心も体も人間を逸脱した俺がまさにそんな心境だ。
俺は力を得る為にクリフォトの種を蒔いた。悪魔として生きることを選択した。その時点で倫理観はかつての人間とは異なっていた。ギィから初見で同族扱いされて違和感や不快感を覚えなかったし、ギィをはじめとした悪魔に対して同族意識がある。逆に人間には未だに同族意識が芽生えていない。
スパーダは人間を愛した？　うん、そうだね。で？　って感じ。別にスパーダムーブをするつもりなんて更々ないし、『ギルバ』としての活動は人間社会で暮らす為の仕事であり仮初めの顔だ。ギルド内の知人達や拠点にしている街とその住民達には愛着沸いてるから、いざという時は守るけど、人類全体に愛着がある訳じゃない。むしろ愚かな人類を粛清する『調停者』及び『魔王』の仕事には大いに賛成する。
クリフォトの樹の主、悪魔として生きると決めた俺に日本人としての常識やモラルなんてこの世界で生きる上で、便所のネズミのクソに

も匹敵する下らん考え方だ。今の俺にとってはナンセンスで、そんなものに従うなどそれこそトチ狂ってるとしか思えない。
『ギルバ』としても『ユリゼン』としても『人間は最大限利用する』だけだ。
「とまあ、色々言ったが謝罪は受け取るのでこの一件はこれで終わりで構わない。二度目はないがな」
最後にしっかり釘を刺しておけば問題なかろう。
話は終わったとばかりに俺は紅茶を飲み干し、レインにお代わりを注いでもらう。あー、良い香りだぁ。今度機会があったらギィん家にお邪魔してメイド二人にお茶の淹れ方でも習おうかな？
……ってバカ！　お茶のことをのんびり考えている場合じゃない！　折角隣にこの世界の神様がいんだから今の内に聞きたいことを聞いとくべきなんだよ！
「それよりヴェルダナーヴァ、少しいいか？」
「ん？　何かな？」
「この世界の神として聞かせて欲しい。この世界とは全く異なる別の世界、異世界についてだ」
これを皮切りに俺はヴェルダナーヴァに話し出す。
自分がかつては異世界に住む人間であり、気づけばこの世界にいたこと。そこは魔法や魔物、魔素が存在しない世界であること。この世界では当たり前となっている魔法が存在しない代わりに科学技術が発展していることなど。
ＤＭＣに関連することだけは話さない。俺の力の根幹に関わることだからいくら相手が神でも安易に話せなかった。
しかし話せる部分は包み隠さず全て話した。今まで誰にも話せなかっただけに、少し気持ちが楽になった気がする。
「なるほど、異世界か。興味深い」
最後まで口を挟まず黙って聞いてくれたヴェルダナーヴァは、紅茶で一度喉を潤してから真剣な表情でこう述べた。
「あり得ない話ではないよ。空間が歪んでそれぞれ異なる世界同士が一時的に繋がってしまい、それに偶然巻き込まれてこの世界に辿り着

くというのも、死後に魂だけがある程度記憶を持ったままこの世界に来てそのまま転生したというのも絶対にないとは言い切れない。両者共にかなり確率は低いと思うけど」
「そう、か」
「ユリゼンは前の世界に帰りたいのかな？」
「いいや、全く」
「え？　随分あっさり言うね。未練とかないんだ？」
「今の生活が充実していて楽しいからな。何よりもギィやヴェルダナーヴァに出会えた、この巡り合わせは貴重だと思う。向こうではそもそも『悪魔』も『神』も『竜』も『魔法』も想像上の存在でしかない世界だ。未練はない」
　無言で聞いていたギィが何故かニマニマ笑う。え？　何？　俺なんか変なこと言った？
「とにかく、俺個人に関する記憶がほぼない状態で気がつけばこの世界にいた。それ故にどういう経緯でこうなったのか少し気になっていたんだ。俺は死んで生まれ変わったのか、それとも世界を渡る際に肉体が別のものに変わったのか……　そしてその際に記憶を失ったのか、と」
「それはそうだろうね」
　親身になって付き合ってくれるヴェルダナーヴァに、俺は心が開いていくのを自覚する。この世界の神様、めっちゃ親しみ易いやん。しかもスゲー寛大だし世話焼きだし。あなたが神か？　問うまでもなく神だったわ！　もうこれはヴェルダナーヴァ教に入信するしかないぞ。
　ひっそり心の中でヴェルダナーヴァを崇め始めた俺の横で、ギィが快活に笑い飛ばす。
「まあそこまで難しく考える必要ねーだろ！　異世界から来たからってユリゼンが俺の親友であることには変わりねー、それに他に何か困ったことがあればヴェルダナーヴァもついてる、それじゃ不満か？」
「うん。異世界絡みだとボクでも分かりかねることが多いけど、もし

かしたら何かの拍子にあっさり記憶が戻ったりするかもしれないし、ギィの言う通りボクもキミの力になれたらと思う」
　気を遣われてしまっている。なんだか少し情けない気もするが、不思議と心地良い。
「ギィ、ヴェルダナーヴァ、恩に着る……　その心遣いだけで十分だ」
　この日以来、俺と彼らの交流が本格的に始まった。

　交流といってもそんな堅苦しいものではない。
　俺とギィとヴェルダナーヴァの野郎三人で、飲んだり遊びに出掛けたり、たまにガチンコで勝負したりをするようになったくらい。普段の日常生活にプラスアルファな感じだ。
　それに追加する形で、しょっちゅうレインが「仕事サボりに来たので付き合ってください」といくつもの酒瓶を抱えてやって来て、しょうがないので付き合ってたら暫くするとミザリーが「レインあなた仕事サボって何やってるの!?　ユリゼン様もユリゼン様でレインを甘やかさないでください！」と怒鳴りながら襲来。「違いますよユリゼン様がどうしても私と二人っきりで飲みたいって仰るから仕方なく付き合ってあげていただけです」「嘘をつけ！」とかなんとか二人が言い合ってる間に「俺抜きで何楽しそうにしてんだ！」とメイド二人がいなくなったことに気づいたギィが乱入し、その次に「私を除け者にするなんて!!」とヴェルザードがブチギレながら突撃してきて、最後にどうやって聞きつけたのか「ボクも仲間に入れてくれよ」とヴェルダナーヴァが現れる日々。
　俺が毎日寝泊まりしてる安宿は、いつから人外魔境の飲み会の場になったの？　周りの迷惑にならないように音や振動を遮断する結界張ってやる分には全然構わんけど。
　以前よりも遥かに騒がしく、だけど楽しくて充実していた。皆長命種の宿命か、誰もが退屈を嫌い面白いことに飢えていたので、俺の存在は暇潰しには丁度良い相手だったのかもしれない。
　だからという訳ではないが、俺は地球の娯楽の中でも比較的再現が

簡単そうなものを再現しそれを人間社会に広めて流行らせる、ということに手を出し始めた。トランプやウノなどのカードゲームから始まり、ビリヤードやダーツやボーリングなどの遊技場にあるタイプのもの、オセロやチェスや将棋といったボードゲームなどなど。既に似たようなものが存在していた場合もあったが、娯楽そのものが地球より遥かに少ない世界なので目的は概ね上手くいった。それらの地球産の娯楽は当然ギィ達も興味を示し、トランプを片手に酒を飲む日も多々あった。

ちなみに魔王になる云々の話は丁重に断った。勝負は俺が勝ったし、ＤＭＣじゃ魔王を名乗ったらろくな目に遭わないジンクスあるし（俺個人の見解）。その代わり魔王の『相談役』という立場に収まる。

つってもやることってあんま変わんないだよな。ミザリーの配下が人間社会で諜報活動をしてるらしく、戦争関連の情報を俺に流してくれるのでクリフォトの樹を育てるにあたり以前よりも少し動き易くなったって印象かな？

ただ、クリフォトの樹を全く育てる機会がない――人間社会で戦争が勃発しない時期が暫くして到来する。

いい加減人間達も学習したのか、クリフォトの樹が初めて現れてからこれまでの間に戦場でしか発生しないという事実から、ある程度戦争に対して抑止力として働くことになった時期だ。

これに関してギィとヴェルダナーヴァは素直に感心していたが、短命種である人間は世代交代が早いので数十年経過するとクリフォトの樹への恐怖が薄れたのか久しぶりに戦争が勃発する流れに。

持って五十年弱ってところかなー、とぼやきつつ俺は久方ぶりに種を蒔くことになった。

ちなみに俺も彼らと同じ不老長寿だったみたいで、何年経っても肉体の衰えもなければ老いる様子もない。相変わらず生活する上で必要な生理現象は人間と同じなのにそこら辺は完全に悪魔族と同一らしい。

そんなこんなで、彼らと交流するようになってから何百年という時間が流れて――

新たな出会いが訪れた。

しかも、よりにもよってクリフォトの樹と融合している時に、侵入者として現れたのだ。

「俺様はルドラ！　ナスカ王国の王太子にして人々の希望を一身に受けし『勇者』！　ルドラ・ナスカだ！　貴様の話は我が師ヴェルダナーヴァと魔王ギィから聞いてるぜ！　血に飢えた性悪な悪魔、災禍の魔樹クリフォトの主ユリゼン！　貴様をこの気色の悪い樹ごとぶった斬ってやるぜ!!」

剣の切っ先を向けられて、俺は反応に困る。

どういうこと!?

ヴェルダナーヴァとギィの知り合いっぽいけど、俺、二人から何も聞いてないんだけど!?

あいつら絶対に面白がってこの『勇者』を俺に黙って差し向けただろ!!

勇者に因縁つけられた

目の前には、勇者と名乗る若い青年とその従者と思わしき若い女性が二人、合計三名の人物がいた。

見た感じ、勇者の青年とピンク髪の女性は人間だが、もう一人の青い髪の女性は人間じゃないと気づく……ヴェルダナーヴァやヴェルザードと同じ匂いと気配からして、間違いなく彼らの妹の次女ヴェルグリンドだと思う。

勇者がギィやヴェルダナーヴァの共通の知己というのは先の勇者の言葉から理解できたが、そんな人物が何故俺と戦おうというのか、これが分からない。

だって、二人の知り合いってことは（少なくともヴェルダナーヴァの弟子という立場なら）魔王の役目やクリフォトが人間の戦争の抑止力となっていることを知っているはずである。

まさか知らない？　それとも知ってて喧嘩吹っ掛けてきた？　単純に俺を倒して名声を得たいだけ？　う～ん、どれもこれもあり得そうで分からん。『勇者』って名乗ってる割にはなんか俗っぽい雰囲気出てるというか、治安が悪い街の裏路地でカツアゲしてそうなチンピラ感あるんだよなこいつ。

こういう時は本人に聞くのが一番早いか。

「ルドラ。何故俺と戦う？　ヴェルダナーヴァの弟子なら知っているだろう。クリフォトの樹が人間達の戦争に対して抑止力として働いていることを。俺を倒すということは、人間同士の戦争を促すことになる」

「何言ってやがる。皆貴様が戦場に乱入してきて一人残らず皆殺しにするのが怖いから戦争しねーだけだろうが！」

「それが抑止力というものだ」

「だがここで俺様が颯爽と現れ貴様を倒せば誰もが俺様を認める！　勇者ルドラの偉業を誰もが讃える！　そうすれば世界は俺様の下で一つとなり、手っ取り早く世界征服が完了する！」

「世界征服？」

思わずオウム返しする俺。
勇者なのに、昭和の仮面ライダーの敵の目的みてーなこと言い出したぞこの勇者。
「そうだ、世界征服だ！」
「本気か？」
「本気の本気だ！」
俺はルドラではなくその後ろに控える従者二人に視線を向けて追加で問う。
「正気か？」
「失礼だな貴様⁉」
「ルドラ兄様は正気です。正気を疑いたくなる気持ちは分からないでもないですが」
「ルドラはおバカさんだけど、気が触れている訳ではないわ」
「ルシアもヴェルグリンドも失礼だなおい!!」
どうやら従者二人にも正気を疑われた過去があるらしい。
「世界征服を成し遂げたらどうするつもりだ？」
「ハン、そんなの決まってんだろ。世界征服が完了したらもう誰も争うことがなくなる。戦争は起きない、いや、俺様が起こさせない。そして世界は平和になる、誰もが笑顔でいられる毎日がやって来る。俺様はそんな世界を作る！　我が師ヴェルダナーヴァにそう誓ったんだ！」
口調と目つきはチンピラみたいなままだが、掲げている思想は勇者らしい素晴らしいものであった。
実現不可能な理想論であることを除けば。
で、その理想を実現する為の足掛かりとして俺に喧嘩を売ってきたと。
……　こいつが悪い奴ではない、というのはなんとなく分かった。
ヴェルダナーヴァの弟子というのが事実であるなら、実力も申し分ないのだろう。
しかし気になるのはギィとも既に知り合っていること。彼にも戦いを挑んだのだろうか？

「ギィとは戦ったのか？」
　俺が質問すれば、ルドラは苦虫を噛み潰したかのような表情となり答えた。
「貴様より先にギィの所に行ったが、一対一で戦う前に『ギィ・クリムゾン』って名付けちまったせいで本来は勝てるはずなのに引き分けに終わったぜ。そん時にあいつが言いやがった。『ユリゼンに勝てたら俺の敗北を認めてやる』ってな」
「あのバカ」
　頭が痛くなってきたので右手で頭を抱えてしまう。何勝手なこと言ってんだあいつ。絶対に俺のこと巻き込むつもりじゃん。それとも俺ならこのルドラに勝てるって信用して？　確かにガチンコ勝負は俺がギィに勝ち越してるけどそんなの嘘だぁ、単に面白がってるだけだよ。
　脳内で全く悪びれずに「アッハッハ！」と爽やかに笑うギィが浮かび上がる。
「だから、一対一で貴様に勝てばギィにも勝ったことになる、つまり一石二鳥！」
「あー、はいはいそうだな、そうなるな」
「急に投げ槍になるな！」
　プンスコ怒り出したルドラは剣を振り上げ鋭く踏み込み、突撃してきた。
「ということで俺様の理想の世界を作る為に大人しくぶった斬られろぉっ!!」
　血の気が多いというか喧嘩っ早いというか、やっぱりこいつ勇者じゃなくてチンピラなのでは？　と疑念を抱きながらも迎撃に移る。

　ヴェルダナーヴァの弟子でギィと引き分けたと宣うだけあって、ルドラの実力は本物であると初撃で悟った。
　パワーもスピードも申し分ない。俺を一刀両断せんと振るわれた一撃は、そんじょそこらの魔物ではろくな抵抗もできずに真っ二つに

なっていただろう。
しかし俺には届かない。クリフォトと融合している時の俺には鉄壁の盾がある。
閻魔刀バリア（正式名称知らない）。閻魔刀が細長くトゲトゲした赤い水晶体に変化し、ありとあらゆる攻撃を防いでくれるのだ。相手にすると非常に鬱陶しいが、自分が使う分には非常に便利な能力。
案の定、ルドラは自身の渾身の一撃を防いだ赤い結晶体に瞠目した。
「何だこれは!?」
「バリア」
「そんなこと分かってんだよ!!」
「どうする？　それがある限り俺には傷一つ付けられんぞ」
「だったらこんなもんぶっ壊して――」
ルドラが再度剣を振りかぶろうとしたその時、結晶体のトゲが一斉に槍のように変化してルドラを串刺しにせんと飛び出た。
「うわっ!?」
咄嗟に後ろに跳んだルドラはギリギリでトゲが届かない距離まで下がり、更にバックステップを踏んでからバク宙を決めてかなり間合いを離す。
「よく反応したな」
初見なら今ので穴だらけになってもおかしくないのに。実際にこれまでの挑戦者達――多くのハンターや冒険者を貫いてきた実績がある。
……　侮れないな。今の今までに戦ってきた人間とは格が違う。
警戒心を高めつつ剣を構え直すルドラの様子を伺う。
恐らく攻略法を模索しているのだろう。バリアがある限り玉座に座る俺にダメージは入らない。バリアを破るには生半可な攻撃は通じず、迂闊な近接攻撃はバリアそのものから反撃を食らう。ならば遠距離から飛び道具を使いバリアを削る、となる可能性が高いかもしれないのでこっちから先に手を出す。
「今度はこちらからだ」

ルドラに向けた掌の魔法陣から巨大な火炎弾を発射し、続いて光の矢を雨のように降らし、レーザービームのように極太の光の束を薙ぎ払うが如く左右に振る。
「うおっ、はっ!? うおおおおっとぉぉぉ!!」
横に跳んで火炎弾の射線上から逃げ、その勢いを殺さずに転がりながら光の矢の雨の範囲から脱し、すぐに立ち上がると同時に跳躍して極太レーザービームを避けた。
「調子に乗るなよ!!」
空中で叫びつつ反撃。剣を振り下ろすルドラが斬撃を飛ばしてくる。
かなりの威力が込められたそれを閻魔刀バリアが難なく防げば、彼は着地と同時に忌々しげに「ちぃっ!」と舌打ちした。
「そのバリア卑怯だ!」
「ならお前は戦いの最中に防具を装備していることを卑怯と咎められたら何と返す?」
「うるせぇ! 人間は魔物や悪魔と違って脆いんだよ! トカゲの尻尾みてぇに欠損部位が生えてくる貴様らと同じにすんじゃねぇ!!」
「……」
それはそうかも、俺って心臓貫かれても死なないし、と納得しかけたがよくよく考えなくても魔物全体が残らず再生能力が高い訳ではない。中には貧弱虚弱脆弱人間からも弱小呼ばわりされる種族もいる。それに知能が高い魔物は普通に武装することから防具を身に付けることは人間だけに許されたものではない。
「隙ありぃぃ!」
反論しようとしたらルドラが突撃してきた。が、やはり閻魔刀バリアが立ちはだかり、剣による鋭い刺突は俺に届かない。
「これでもダメか」
「頑張れ。バリアも万能ではない、続けていればいつか破れるかもしれんぞ」
これはマジ。バリアには耐久値が設定されているので、攻撃力があるものを何度も繰り返し叩きつければ打ち破ることは可能だ。そう

なると俺は一時的に無防備になりダメージを負うようになる。ま、一定時間経てばバリア張り直せるんだけどね。
「上から目線がムカつくな!!」
改めて距離を取り、左の掌をこちらに向けてルドラは魔法を放つ。いくつもの白い光の球が飛来するが、やはり闇魔刀バリアを破ることはできない。
「ぐぬぬぬっ……!!」
滅茶苦茶苛立ってる。そうだよな、そうなるよな。バリアさえ突破できればって思うよね。でもいつかバリア破れるのは本当だから頑張んなさい。
心の中で声援を送りつつ遠距離攻撃を飛ばしまくる俺と、それらを一切被弾することなく躱し間隙を縫って反撃するも全てバリアに防がれるルドラ。戦局は膠着状態となった。
時間干渉系の能力を使えば簡単に倒せるんだろうけど、個人的にあれは反則技の類いだと思うので使わない。
ドッペルゲンガーも使わない、というか今は使えない。ドッペルゲンガーは現在本体の俺の代わりに『ギルバ』としてのお仕事を遂行中だ。
幻影剣は、どうしようかな？　玉座に座って戦うスタイルだと移動しないからエアトリック（瞬間移動）が意味ないけど、やるだけやってみるか。
という訳で他の飛び道具に混ぜる感じで幻影剣を試しに一本、二本と飛ばしてみれば、ルドラは握った剣を振るい幻影剣を叩き落とす。
（単発ならこんなもんか）
砕け散って霧散、消滅する幻影剣。単発では簡単に対処されてしまうみたいなので、今度は同時に八本発射――急襲幻影剣でいってみよう。
「くそっ！」
流石に八本同時に発射されたら剣での迎撃は無理なのか回避に徹していた。
じゃあ五月雨幻影剣は？　上から雨のように降ってくる幻影剣に

は魔力の矢と同じで範囲外に即離脱で対処。
烈風幻影剣は？　自分を囲みつつ地面と水平に回りながら狙ってくる八本の幻影剣にはかなり驚いたようで、慌てて剣を振り回し一本残らず破壊する。
（やるやん）
ならば全方位からの幻影剣はどうだろう？　ドーム状に囲むように配置された数多の幻影剣。前も後ろも上も左右も斜めからも、避ける隙間も隠れる場所もないこの攻撃にはどう対処する？
「ふん！」
魔法によって発生したドーム状の光の壁がルドラを覆い、殺到する幻影剣を悉く防ぐ。このことから防御系の魔法も高い水準で修得していたことが判明。
ヴェルダナーヴァの弟子だしな、この程度なら当たり前か。
ならクリフォトの触手は？　玉座に座る俺のそばから伸びてきたものを剣で斬り払ってる間に地面から……　良い勘してるのか足元から伸びてくる前にその場から離れて逃げられた。
うーん、当たらん。遠距離攻撃だけだと避けるか剣で斬り払うか防御魔法で防ぐかのどれかで全然当たる気がしない。
当てるなら接近戦を絡める必要があるが、生憎とクリフォトと融合状態だと俺は接近戦できんのよ。
こうなってくるとスタミナ切れを待つか、となるところだが俺はその前にルドラがバリアを破る気がした。
彼がどのくらいの時間を掛けてバリアを破るのか。
俺はその時を楽しみにしながら待ちつつ攻撃し続ける。

やがて――
俺の目前で空間にクモの巣状の罅が入り、一拍置いてガラスが砕け散るような音を立てて闇魔刀バリアが粉砕された。
（やりやがった！）
想定以上に早いこと、何よりも闇魔刀バリアが初めて破られたことに称賛の言葉を口にしている間もなく、

「うおおおおおおおおおおっ!!!」
バリアが破れた瞬間を見逃さず、ルドラが飛び込んできた。
既に俺には防御手段が無い。剣を両手で握り上から下へと全力で振り下ろそうとしている彼が迫る刹那、咄嗟にできたことは剣の軌道から頭部を守るように両腕を構えた防御姿勢を取り魔力で最大まで肉体強化を図るだけ。
そして、一閃。
両腕に鋭い痛みが走る。
反撃を嫌い、彼は一撃入れて即離脱。再度距離を取り、ニヤリと唇を歓喜に歪めた。
「ハァ、ハァ、どうだ！　漸く、一太刀、くれてやったぜ!!　ハァ、ハァ」
疲労しているもののやっと努力が実り会心の一撃を決めたことで勝ち誇るルドラを、両腕共に切断はされていないが半ばまでざっくり斬られてその激痛に顔を顰めて睨む俺。
「やるな」
「よくも今まで散々好き放題魔法撃ちまくってくれたなクソッタレめ！　避けるの本当に大変だったんだからな！　だが今度は俺様が貴様を一方的になます斬りにする番だゴルァッ！　血祭りにしてやるから覚悟しやがれ!!」
神に見出だされた勇者なんだからもっと他に言い方ないのだろうかこいつは？
だが残念。これで第一ラウンドは終了だ。
「いきり立っているところ悪いが、時間切れだ」
「時間切れだぁ!?」
「間もなくこの樹、クリフォトは枯れる」
「何ぃ!?」
この発言にルドラだけではなく控えていた女性二人も驚く。
ついさっき樹からお知らせがあったのだ。成った果実が収穫の時期を迎えたと。ならば先にこっちの用を済ませておこう。それに人の姿に戻ってからの方が本領を発揮できるしな。
「安心しろ、クリフォトの樹が枯れてもすぐに続きをしてやる」

「本当だろうな？　尻尾巻いて逃げたらヴェルダナーヴァとギィに俺様の勝ちって言い振らすからな」
「さっさと二人を連れて樹から脱出しろ、枯れて崩壊する樹の内部で生き埋めになりたくなければな」
　一方的に告げて、闇魔刀を顕現しその力で空間転移。クリフォトの樹の頂上、つまり地下深くへと移動した。

「あいつ何処行きやがった!?」
　ルドラの問いにルシアとヴェルグリンドは首を横に振る。
「ルドラ兄様、彼はどうやら転移系の魔法とは異なる手段で移動したようで行き先を追跡することができませんでした」
「妖気（オーラ）そのものは消えてないからすぐ近くにはいるみたいだけど、ここは彼の妖気（オーラ）が濃過ぎて詳細な場所を特定できないわ」
　妹と相棒の返答にルドラは眉間に皺を寄せた。
「樹が枯れるって言ってたな。急にどうしてだ？」
「忘れたのルドラ？　確かに急ではあるけど、クリフォトの樹って発生してから一ヶ月程度で自然に枯れるのよ。そろそろ発生して丁度一ヶ月だからではなくて？」
「グリン義姉様の言う通り、そろそろ一ヶ月経つと思われます。あの時の魔王ギィの言葉が嘘でなければ」
　そう。事前に聞いた通りなら一ヶ月経過する頃だ。
　一番最初にヴェルダナーヴァからギィとユリゼンの話を聞いた時、ギィの居城は何百年も前から変わっていないので北の大地ということは伝説なりお伽噺なり伝承なりで予め分かっていた――そもそもヴェルグリンドの姉であるヴェルザードがいる為調べるまでもない――が、ユリゼンの居場所や棲み家は調べようがなかった。
　当然だ。ユリゼンが姿を現すのは人間同士で大規模な戦争が勃発した時のみ。その他の情報は無いに等しい、雲を掴むような状況だった。
　とりあえず居場所が分かっているギィの白氷宮に赴けば、引き分け

た際にギィからユリゼンに関する情報がもたらされたのである。
『あいつに挑戦するなら今しかねーぞ。なんせあいつは期間限定だからな。急がねーとクリフォトの樹が枯れちまうぜ。そうなったら次は人間達次第だ』
当時、クリフォトの樹が発生して既に四週間が経過しているとのことでタイミング的にはギリギリだった。
急いで帰国しルドラの力を回復させると同時に装備を整え、全快になり次第ギィが教えてくれた場所に飛んで行けば、どう低く見積もっても禍々しいことこの上ない、いかにも地獄の底から這い出てきましたと言わんばかりにやばそうな樹が天地を蹂躙している光景を目にする。
まだ樹が枯れてない、間に合った、とルドラ一行は安堵したものだった。

この世界の情報伝達速度は、インターネットが普及した時代の地球と比べて遅い。勿論、魔法があるお陰で一部の情報のやり取りはむしろ地球よりも早いくらいだ。しかしいくら魔法が存在し人を超えた生命体が溢れていようと、個人で収集し発信できる情報量には限度がある。たとえ転移魔法や魔法通信という手段があったとしても、誰かが収集した情報を発信しそれを別の誰かが受信するという過程は全て人伝てだ。おまけに政治や軍事に関わる情報は価値が高く、時には国にとって武器となる。つまり簡単には手に入らない場合が多々ある。地球のインターネットと違って一個人が発信した情報が一瞬で全世界に届くということがまずない。
科学技術が発展したが故に、全世界共通のインターネットというツールが生み出され、皆が皆手軽に情報の発信も受信も利用可能な地球の情報媒体と伝達速度が異常なのだ（その反面、情報を得易いというメリットは情報が意図せず漏れてしまったり誤情報が拡散されたりというリスクと表裏一体ではあるが）。
例えば世界の裏側で戦争が勃発してもそれを一般人が知るのは数ヵ月後から数年後、というのはこの世界のこの時代ではザラ。理由

は簡単、誰もが簡単に共通共有＆利用可能な情報媒体がないからだ。
ルドラ一行が最近のクリフォトの樹の発生に関する情報を得られなかったのは、単純に情報の発信側の母数が少ないことと、発信側と受信側との間に繋がりがなかったことに尽きる。
ちなみに、ギィが大量の配下を人海戦術で情報収集に当たらせ、集めた情報を取捨選択し精査した上でユリゼンに渡し、信頼度の高い情報を得たユリゼンが『へっへっへ』と怪しい笑みを浮かべながら戦場に襲来しクリフォトの樹が発生する、という人間側の戦争したい連中からしてみれば『開戦と同時に何処からか嗅ぎ付けたユリゼンに敵味方区別なく蹂躙される』クソみたいなサイクルが何百年も前からできあがっていた。

なお、ユリゼンは地下深くに潜っただけなので、ヴェルグリンドがその眼で真下を見れば容易に見つけることができたりする。彼女がそれに気づかない理由は、本人が言った通り樹の内部はユリゼンの妖気（オーラ）が濃過ぎて気配を辿れないことに加えて、ユリゼンの行き先がクリフォトの樹の頂上でそれが地下深くにあるとは知らないこと、樹の巨大な外見がカモフラージュとなって地下に意識を向けさせていないこと、樹が枯れると聞いてユリゼンの捜索ではなく脱出を優先し来た道を戻ることに意識を割いて下に視線を向けていないこと、といった複数の要素が絡んだ結果。つまり運的なものでたまたまだったりした。

「おっ、地面が白くなってきた!?」
「ルドラ、地面だけじゃなく壁や天井もよ」
「これは石灰に近い物質に変質しているようです。このままだと樹そのものが崩壊します。ルドラ兄様、グリン義姉様、脱出を急ぎましょう」
三人が言い合う最中、樹の内部を満たしていたユリゼンの妖気（オーラ）がこれまでよりも遥かに濃厚となる。
明らかに感じる気配が強大になった。ただでさえとんでもなかっ

たものが更に強化されたかのように。
「今度は何だ！　あいつ何したんだ!?」
「ルドラ兄様！　詮索は後です、崩れ始めています！」
「いざとなったら私が全部吹き飛ばすから二人共安心して」
　三者三様な反応を示しながら一行は、白く変色しボロボロと脆く崩れていく空間から転移魔法を用いて去った。
　クリフォトの樹の外――出入口となっていた木の洞付近に転移し無事に脱出を果たすと、それを待っていたかのようにクリフォトの樹はその巨大な全身を完全に石灰化させ、轟音と共に砕けて崩れて倒れてしまう。
　その様を呆然と見つめていた三人の背後から声が掛けられる。
「無事に脱出できて何よりだ」
　慌てて振り返る三人の視線の先には、銀髪碧眼の男が悠然と佇んでいた。

「だ、誰だ？」
　戸惑うルドラの返しに、何言ってんだこいつ？　と俺は一瞬訝しんだが、クリフォトの樹と融合していた時と今の人間の姿が異なることを思い出し納得した。
　仕方ないよな。融合時の俺、見た目巨人族みたいなデカさの青い悪魔だもんな。しかも全身を触手で覆われてるし。人間態とは似ても似つかない。
　なので抑え込んでいた妖気（オーラ）を解放する。これで気づいてくれるだろう。
「すまん、クリフォトの樹と融合している時の姿しか知らなかったのを忘れていた。それに俺は人の姿でいる時は癖で妖気（オーラ）を抑え込んでいる。気がつかないのも無理ないな」
「……！　ユリ、ゼン……！」
　剣を鞘から抜き放ち警戒するように構えるルドラ。
　そんな隣の男を横目でチラリと見てからヴェルグリンドが質問す

る。
「それがあなたの本当の姿？」
「どちらも本当だ。さっきお前達の前で見せていたのはクリフォトの主としての俺、この姿はそれ以外の時の俺に過ぎん。お前だって必要に応じて竜や人間に姿を変えるだろう？　それと同じだ」
「なるほど、その通りね」
　竜種であるヴェルグリンドが得心したように首肯した。
「じゃあクリフォトの主じゃない時は普段どうしてるんだよ？」
「人間社会で冒険者として働いている」
「は？　貴様が冒険者？」
　戦場で人を殺しまくってる奴が普段は人間社会に貢献してるのか？　とばかりに疑わしい目を向けられてるので、ヴェルダナーヴァと知り合いなんだし全部暴露しても問題ないやろと判断し教えてやる。
「『首狩り剣士ギルバ』の名を聞いたことはないか？　何を隠そう、それが俺の人間社会で生活している時の顔だ」
「……なん……だと……!?」
「？」
　なんだかルドラの様子がおかしい。まるで信じたくない事実を知ってしまったかのような、信じていたものに裏切られたかのような、驚愕と絶望を混ぜ合わせたような表情になる。
　何だろう？　俺なんか変なこと言ったっけ？
「ルドラ……　可哀想に」
「お労しや、ルドラ兄様」
「その、何て言ったらいいか分からないけど、気をしっかり持って」
「そうです。ルドラ兄様はこれまで幾度となく苦難を乗り越えてきたではないですか。今回の件もきっと乗り越えられるはずです」
　そして何故か女性二人が左右からルドラの肩に手を置き慰め始めた。まるで意味が分からんぞ。
「……」
　ルドラは俯いてしまったので表情が窺えない。しかも彫像のように固まって動かなくなった。

その両隣から必死になって声を掛けまくる女性が二人。
反応しなくなったルドラの態度が気になるので、彼が再起動するのを黙したまま見守ることに。
五分ほど待つと、俯いたままだが漸く口を開きポツリと零した。
「ユリゼンが、ギルバと同一人物だってのは、本当なんだな？」
「ああ」
覇気のない声音で紡がれた質問に少し心配しながら返答すれば、はっきりとルドラから歯軋りの音が聞こえてきた。ギリッ！　と。
「……　俺は物心ついた頃から、英雄譚が好きだったんだ」
「お、おう」
「特に好きだったのは、冒険者がハンターと呼ばれていた何百年も前の時代から人間社会を支え続けた『首狩り剣士ギルバ』の話だ」
おいこれまさか。
訥々と語り出す彼の話を耳にして嫌な予感がしてきたぞ。
「ずっと、ずっと憧れていた。大きくなったらギルバみたいな冒険者になって困っている人々を救うんだ。そんな夢があった」
彼の独白は続く。
「夢に向かって努力を重ねていたある日、ヴェルダナーヴァと出会って気に入られて弟子入りし、俺は歓喜した。これで夢が叶う、夢を現実にできる、そうすれば世界を統一して恒久的な平和を皆にもたらすことができる、そう思っていた……　思っていたのに」
空気がどんどん重くなり、剣呑な気配がルドラから醸し出される。
そして膨らませ過ぎた風船が大音量と共に破裂するようにルドラは爆発した。
「ふざけるな!!!」
親の仇を目の前にしたかのように激しい怒りと深い悲しみと狂おしい憎悪を瞳に映し、血走った目でこちらを射殺さんはかりに睨み付けてくる。
「貴様ふざけるなよ！　ユリゼンがギルバと同一人物だと!?　ふざけるのも大概にしろ！　戦場で人を殺しまくってる貴様が、どうして遥か昔から人間を守ってるんだ!?　人をバカにしているのか!?　無垢

で純粋な子ども時代の俺の純情を踏み躙りやがって!!　返せ！　あの時の俺の憧れを返せこの畜生!!!」

機関銃の如き勢いで捲し立てられた。

要するに憧れの『首狩り剣士ギルバ』の正体が『災禍の魔樹クリフォトの主ユリゼン』だったのが許せない、と。

……　こっちとしてはそんなこと知ったこっちゃねー話なんだけど、焦ったようなヴェルグリンドとルシアが口をパクパクさせて声無き声でこう言っている。

『とりあえずなんでもいいから謝って』

『この場を取り繕うだけでいいのでお願いします』

オッケー分かった。年長者として、元人間としてルドラの今後の人生の為に一つアドバイスをしてやろう。

「憧れは、理解から最も遠い感情だ」

額に手を当てて天を仰ぎ崩れ落ちるヴェルグリンドとルシアから『違うそうじゃない』という声が聞こえた気がした。

そして当のルドラは、

「絶っっっっっっっ対に貴様をゆ”る”さ”ん”!!　野郎ぶっ殺してやらぁぁぁぁぁぁ!!!」

口角泡を飛ばし、色々なものが限界突破してしまったのか血涙と鼻水を飛散させ、もの凄い顔芸を晒しながらブチギレて襲いかかってきた。

「嗚呼、やっぱりこうなってしまったか。だからユリゼンのことを教

えたくなかったんだ。すまないルドラ、キミの憧れを壊したくなくて真実を伝える勇気がなかったボクを恨んでくれ」
「……く、ダメだ腹いてぇ、面白過ぎて、腹が、捻れちまう……くくく、くくくくくくっ」
「ギィ、キミさっきから笑い過ぎだよ」
「ユリゼンの返しも最高だよな、一理ある内容ではあるけどよ、それ今言うことじゃねぇだろ!!」
「たまにユリゼンって素で煽る時あるよね。天然なのかな?」
「ありゃたぶん頓珍漢なこと考えた結果だろ。それでたまにヴェルザードがキレ散らかしてる時あるしな」
「ユリゼンとウチの妹、とことん相性悪いね」
「傍から見てる分には面白いがな」
「ボクとしては胃が痛いよ」
　少し離れた場所から認識阻害の魔法を用いて覗き見する神様と悪魔がいたとかなんとか。

勇者よ光あれ（物理）

「よくも、よくも、よくもよくもよくも!!　裏切ったな！　俺様の気持ちを裏切ったんだな!!」
「知らん」
　激情と共に何度も何度も振るわれる剣撃を、刀を納めた鞘を左手で握り受け流す。ついでに言われたこともテケトーに受け流す。
　するとルドラの怒りのボルテージが更に上昇し、それに比例して攻撃も激しさを増していく。
「クソッ、クソッ、この悪魔め!!」
「悪魔だが、何か?」
「おちょくってんのか貴様は!?」
　俺はまだ抜刀していないものの、鍔迫り合いの形となる。
「そう聞こえたなら謝罪しよう。こちらとしてはお前の事情など知ったことでもなければ心底どうでもいいんだが、小さな子どもの幻想を厳しい現実で打ち砕いてしまったのは事実だ。だが喜べ、大人になるとはこういうことだ。誰もが理想と現実のギャップを思い知り、己の無力や不運に嘆きながらも折り合いをつけて妥協点を探りながら生きている。成長するということは無垢ではいられない。年を重ねる毎に少しずつ穢れていき、その穢れを厭いながらも自分の一部として認め生きていくのが大人になった証――」
「それの何処が謝罪だ大嘘つきめ！　何勝手に講釈垂れてんだこのクソ野郎っ!!」
　ダメだ。口を開けば開くほどルドラが怒ってしまう。これでは火に油だ。どうにかして彼の怒りを鎮めたいのだが、いくら考えてもいいアイディアが浮かばない。
（仕方ない。こういう時は――）
　鍔迫り合い状態から一旦距離を置いたのを機に、俺は納刀したままの闇魔刀をヴェルグリンドとルシアに向かって放り投げる。
　放物線を描いた闇魔刀をルシアが慌てて受け止めたのを視界の端に捉えつつ、こちらに真っ直ぐ突撃してくるルドラに対してファイ

ティングポーズを取ると、俺の両手足が白く眩い光に包まれ籠手と具足が装着された。
　ベオウルフ。光の力を宿した格闘用の魔具でＤＭＣシリーズでの初出は『３』。ストーリー的には同名の悪魔がダンテと戦った後、バージルにトドメを刺されて魔具になり、暫くはバージルの武器として使用されるが最終的にダンテが手にするという経緯がある。ＤＭＣファンからは主人公のダンテの格闘武器というよりはバージル専用の格闘武器という印象が強い。何故ならダンテの武器は一部を除きシリーズ毎に一新されるが、バージルのプレイアブルキャラとしての武器は常に固定されている為。ダンテの格闘武器が作品毎に異なるのに対してバージルは毎回ベオウルフ。なのでベオウルフ＝バージル専用と思っているファンが大半で、俺もその例に漏れない。
「!?」
　ルドラは剣士と聞いていた俺が拳闘士に早変わりしたことに驚き目を見開く。それが俺には致命的な隙に見えたので真・魔人化（シン・デビルトリガー）を発動させ爆速で踏み込み、剣を振りかぶり突っ込んできた彼の顔に右ストレートを叩き込む。それはクリーンヒットした上でカウンターとなる。
（――とりあえず気絶するまで殴るに限る）
　錐揉み回転しながら面白いくらいにぶっ飛んで、地面に三回バウンドしてからゴロゴロ転がりそこら辺の岩に激突してから漸く止まるルドラ。
　やったか？　と思ったのも束の間。ガバッと起き上がり元気に怒鳴ってきた。
「いってぇぇぇぇ！　ギルバが拳闘士の真似事するなんて聞いたことねぇぞ!!　それに何だその姿!?　さっきのと全然違うじゃねぇか!!!」
「それは固定観念だ、小僧。誰が剣しか振るわないと言った？　誰が変身した姿が一つしかないと言った？　そんなんだからそんなんなんだ、お前は」
「うるせぇっ！」
　しまった。つい余計なことを口走ってしまった。

それにしてもタフだな。本当に人間なのか疑わしい。いや、魔王に対抗する勇者ならこのレベルが標準なのだろうか？　ベオウルフの一撃は閻魔刀よりも威力が高い。しかも真・魔人化（シン・デビルトリガー）を発動してるんだぞ。それでも意識を保つどころか立ち上がるなんて見上げた根性とタフネスだ。

まあ、ギィと引き分けたんだから加減の必要がないのは正直ありがたい。とにかく全力でタコ殴りにしてやろう。気絶したらお供の二人に預けてトンズラこく、これでヨシッ！

「ハッ！」

俺は気合いを入れて高く跳躍し、ルドラ目掛けて斜めに急降下しながら蹴りを放つ。流星脚という技名だがどう見てもライダーキック。

ルドラが横に回避し、立っていた場所に俺の足が突き刺さり地面が陥没する。

「この……！」

反撃としてルドラが剣を振るおうとするが甘い。まだ俺の追加攻撃が終了してないぜ！

「フンッ！」

流星脚が斜めに向かって放つ急降下キックなら、流星脚の追加攻撃はその逆。斜めに向かって急上昇しながらの飛び蹴り。つまりもう一回蹴り入れるドン！　ちなみにこれを初めて見た時俺は格ゲー版『北斗の拳（世紀末スポーツアクション）』の南斗獄屠拳みたいだと思った。

ライダーキック（流星脚）からの南斗獄屠拳（追加攻撃）の二連撃が『V』の字を描き、迂闊なルドラを後方へ蹴り飛ばす。どうにか剣を盾にして防いだようだが完全に防ぎ切れていない。大きく仰け反るように体勢を崩しこちらを見上げてくるのが眼下に映る。

「砕けろ」

引力に逆らわず自由落下に身を任せながら右の拳に力を込めて真っ直ぐ振り下ろす。

寸でのところでルドラに避けられるが構わず地面をぶん殴った。

拳が地面を叩いた瞬間、目を灼く閃光を伴う魔力の爆発が発生。光の柱が俺の周囲を覆う。ヴォルケイノ――元はダンテがベオウルフ

を装備し更にソードマスターという戦闘スタイル時に使える技。地面を拳で叩くと光の奔流が柱となって自身の周囲を吹き飛ばすカッチョいい技だ。ちなみにバージルにもベオウルフ装備時に似たような技――ヘルオンアースというのがあるが、そっちは三つある秘奥義の内の一つで、破壊力と攻撃範囲がヴォルケイノよりも段違いに強化されている代わりに技発動まで隙がとても大きくて使い勝手が悪い。

そもそも人間にヘルオンアースなんて当てたら、いくらタフでも大怪我しかねない。

至近距離にいたルドラが衝撃波をまともに受けて吹き飛ぶ。

「さあ、ペースを上げるぞ」

ルドラを囲むように数十もの幻影剣を全方位に配置。

樹の内部での戦いを思い出し、彼は即座にドーム状の防御魔法を展開。

ここで闇魔刀を装備していれば次元斬で防御魔法の内側を斬り裂いてやるところだが、ベオウルフを装備しているので防御魔法をぶち破る選択肢を取る。手始めにルドラの背後に配置された幻影剣の場所までエアトリック――瞬間移動を使い、続けて防御魔法を殴り付ける。

当然防御壁が俺の拳を阻む訳だが、突然俺が視界から消えたことと背後からの轟音にルドラが驚愕の表情で振り返った。

俺は再度エアトリック。ルドラの死角となった場所に配置されていた幻影剣のそばに現れ、防御壁に蹴りを、踵を打ち付ける。

ルドラがこちらを向いたその時を待ってから彼の死角に瞬間移動し攻撃、というのを何度も繰り返していくとやがて防御壁に罅が入り、次第に罅は大きく広がり脆くなっていく。

「貴様……！」

焦燥の滲んだ声。どうやらこちらの意図が何であるかだいたいは察したらしい。

しかし流石は勇者というか、防御壁が破られるまで手をこまねくなど言語道断らしく、

「舐めるな!!」

幻影剣と俺を纏めて吹き飛ばすように、防御壁のエネルギーを外側に向かって放射、爆発させ衝撃波を生む。
（バリアバーストか。思い切りがいいな）
これには距離を取らざる得ないし幻影剣も全て消滅。
一旦間合いが離れるが、今度はルドラが素早く踏み込み体を回転させながら剣を横薙ぎに払う。
高速移動回避――トリックドッジを使用し後方へ下がって剣を避けてから右足で一歩大きく踏み込みそれを軸足にして左ハイキックを繰り出す。
体を一回転させていたルドラが遠心力を利用して再度剣を袈裟懸けに振る。
ゴッ!!
ベオウルフを装着した左足とルドラの剣が激突し、轟音と衝撃と閃光が発生。
力と力が拮抗して互いに攻撃した体勢から動けなくなるなるものの、俺はそのままの体勢で幻影剣をルドラの鼻先に三本配置。
「っ!?」
視界のほとんどが突如幻影剣に塞がれたこと、俺の体勢に関係なく幻影剣が配置されたことに動揺した隙を見逃さず、左足を一度戻してから配置した三本の幻影剣の下を潜らせるよう左足による突き蹴りの連続――百裂脚をお見舞いしてやる。
鎧越しなのであまりダメージは期待できないが手応えはあったしルドラの体勢を崩すことには成功。
配置していた三本の幻影剣を一本ずつ飛ばし体勢を整えさせないようにし、三本目の射出から僅かに遅れたタイミングで踏み込む。
幻影剣の対処に追われて俺に反応できないルドラに、速度と体重を十分に乗せた右ストレートを顔面にぶち込んでからの、
「鉄山靠!!」
背中からぶつかる体当たり、八極拳の技の一つを追撃にくれてやる。なお正式名称は違う模様。
もんどり打って転がる拍子に彼が手にしていた剣も一緒に転がる。

真っ先にそれを拾い上げると地面に深々と突き刺し、柄を二、三度踏みつけ地中に埋めておく。
「貴様、何を――」
「後で回収するのを忘れるなよ」
言って、尻餅を着き上体を起こしただけという明らかに不利な体勢のルドラに対し間合いを一瞬で詰め、高速で繰り出すは蹴りによる八連撃――キック13（キックサーティーン）をお見舞いだ。蹴り終わりの際に相手に背中を見せるような左の中段蹴りを初撃とし、その左足を引き戻す形となる後ろ回し蹴りが二撃目、くるりと一回転しその勢いで再度左後ろ回し蹴りを行う三撃目、そこから流れるように右中段蹴りの四撃目と左後ろ回し蹴りの五撃目を繋ぎ、もう一度右中段蹴り六撃目を入れたら回転し遠心力を乗せた左の踵落としで七撃目、そこからまた回転し右の踵で蹴り上げる八撃目。
最後の蹴り上げでルドラの体を浮かす。
追撃の手ならぬ足を俺は緩めない。
日輪脚――またしても横に一回転して遠心力をつけ跳躍しながら左足で下から弧を描くように蹴り上げ、更に右足で同じく下から弧を描くように蹴り上げて勢いそのままにくるりと横回転。なお、日輪脚のことを見て『ＫＯＦ』の『ジェノサイドカッター』みたいだと思ったならその人はただの格ゲーファン、跳躍しながら下から弧を描く蹴りの二連撃だから『ジェノサイドカッター』の強化版の『ダークジェノサイド』だと思ったならその人は訓練された真の『ＫＯＦ』ファンだ。
最後におまけの月輪脚――今までの蹴撃では全て横回転だったが今度は縦回転、前方宙返りしながらの左足による踵落とし。しかも連続で八回。冗談みたいな速さで前方宙返りを行い一回転する度に踵を落とす。計七回踵落としをかましたら、最後に一瞬溜めを作ってから渾身の踵落としでフィニッシュ、地面に叩きつける。
一連の技を順に並べると、キック13（キックサーティーン）（八連蹴り）、日輪脚（二連蹴り）、月輪脚（八連蹴り）といった感じで見事にひたすら蹴りまくるコンボであった。横に何度も回りながらキックして、横に一度回ってか

らジャンプしながらキック&キックで横回転、最後に縦に何度も回りながらのキック。我ながらよく目を回さないなと思うが、言いたいことは一つ、とにかく回転し過ぎぃ!!
「ぐ、う」
カエルみたいに地面にビターンしていたルドラも流石に効いたのかなかなか起き上がらない。
そのそばに着地し、これで終わりかなと思って真・魔人化（シン・デビルトリガー）を解除しようとして、俺は目を細めた。
ゆっくりとだが、ルドラが立ち上がろうとしている。
震える腕になんとか力を入れ、顔を上げ、固い決意を宿した瞳でこちらを見ていた。
「まだやる気か？」
「当たり前なことを抜かしてんじゃねぇ……　やられっぱなしで引き下がれるかよ」
「諦めが悪いのは嫌いじゃないが無理はするな。限界が近いのは自分でもよく分かってるはずだ」
「限界？　ハッ、笑わせやがる。限界ってのは――」
這いつくばっていた彼が急に勢いよく飛び上がり、
「俺様にとっちゃ、超えてくもんなんだよぉ!!」
何処にそんな力が残っていたのか疑問に感じるほど力強く殴りかかってきた。
（やられた振りをしていたのか!?）
だとしたら滅茶苦茶強かだな。というか、ベオウルフの攻撃って実は思ったほど効いてない？
完全に油断していた俺は咄嗟に反応できず、右の拳を左頬にまともに食らう。今度は俺が何度も地面に転がる番だ。
「立てこの野郎！　この程度じゃ済まさねぇぞ！　俺様の子ども時代の純情と同じくらい粉々になるまで殴りまくってやるぜオラァッ!!」
最早地中に埋まった愛剣など目もくれない。拳を振りかざしてこちらにダッシュ、間合いを詰めると立ち上がったばかりの俺に殴りかかってくる。

「ナイスガッツだ、気に入った」
応じるように俺も拳を突き出す。
「オラァッ！」
「ハアアッ！」
同時に互いの顔に拳がめり込み、弾かれたように仰け反るのはルドラ。俺は真・魔人化状態（シン・デビルトリガー）である為、不意打ちではない限り生憎と怯まない。
彼がダメージから復帰して体勢を整えるまで待ち、こちらに向かってパンチを繰り出すのをあえて受けてから、お返しに俺もパンチ。
殴って、殴られて、蹴って、蹴られて。互いに一発ずつ交換し合うように攻撃。
ステゴロの殴り合いが始まった（俺は籠手と具足装備しているけど）。
ヤベー、なんか凄く楽しくなってきた！

俺が今装備しているベオウルフは、先の通り光の力を宿した籠手と具足で、くどいようだが同名の悪魔がバージルに殺害された際に魂が屈服しその力が魔具となったものだ。
なんで悪魔が光の力を駆使していたのか？　それはＤＭＣ内でも語られていないので分からない。
しかし悪魔ベオウルフが神々しい白く輝く天使のような翼を二対持ち、『光』属性を操り、弱点が『闇』属性だったのは事実。
ちなみに『闇』属性に該当するのが闇魔刀だったり。
で、ここでちょっと疑問が。
ＤＭＣシリーズにおける武器の属性って、この世界だとどうなんの？　その効果はどのくらい？
この疑問を解明する為、以前ギィ相手にやってみた実験がある。
闇魔刀だけで戦った場合とベオウルフだけで戦った場合を比較してみる。悪魔族であり属性的には『魔』や『闇』に類するギィはどうなるのか？
以下、結果。

闇魔刀の場合。闇魔刀の『闇を切り裂き食らい尽くす』という特性により斬撃によるダメージは回復できないが、かなり粘る。とにかく粘る。正直早く倒れろバカ野郎と思うくらい一回の勝負が長引く。恐らく『闇』の属性ダメージは一切入っていない、むしろそれが変に作用して力を与えているんじゃ？　と疑っているくらいだ。

んで、ベオウルフの場合はというと、これがあっさり負けを認める。こっちが拍子抜けするくらい潔く。ベオウルフから受けるダメージは闇魔刀と異なり回復するというのにだ。ギィ本人曰く『闇魔刀の攻撃はスパッと斬られてそれで終わりだが、ベオウルフの攻撃は……しんどい』とのこと。闇魔刀より攻撃力が高いことに加えて、がっつり『光』の属性ダメージが入るらしい。ギィと同じ悪魔族のミザリーとレインも、ベオウルフで殴られるくらいなら闇魔刀で斬られる方がマシと言っていた。

結果的に見れば武器の属性は、相手によっては非常に有効だというのが分かったのだ。

これを鑑みるに、『勇者』であるルドラに『光』属性のベオウルフで戦う場合、思ったよりもダメージが与えられないのは当然の帰結なのかもしれない。現にギィならとっくに負けを認めるであろう回数を攻撃しているが、ルドラはなかなか倒れない。打撃による物理ダメージは入っているものの、『光』の属性ダメージが入っていないのは明らかだ。

だがしかし、彼の奮闘も長くは続かない。

真っ正面からの殴り合いを始めて十数分後。

「……」

「カヒュー、カヒュー」

変な音がする呼吸をし出したのでもうレフェリーストップやドクターストップがかかってもいい頃合いだと思うんだが？

顔もギャグマンガみたいにボコボコで赤く腫れ上がり、折角のイケメンが作るの失敗したアンハ〇ンマンの顔みたいになっている。しかもそのせいで前が見えてないのか、時折フラフラと体を左右に揺らし目の前に立つ俺を探す素振りを見せる。

身に付けていた鎧も既に砕け散って破片となったものが転がっており、彼の現状も相まって殴り合いの激しさを物語っていた。
「ルドラ、もういいだろう。お前は頑張った」
「う、うるしぇぇ、おれしゃまは、まだ、やれりゅ」
呂律が回ってない。辛うじて意識はまだあるようだが、これ以上は本当に危険な気がする。
助けを求めるようにルシアとヴェルグリンドに目配せするが、二人は覚悟を決めたような顔をしていた。いや、止めろよ。お前らの仲間だろうが。
「ちっ」
舌打ちしながら考える。もうこうなったら強力な攻撃でルドラの意識を刈り取るしかない。
「これで最後だ。死ぬなよ」
まず丁寧に距離を測る為に左でジャブを打つ。威力は込めない。ピシッ、ピシッ、とルドラの顔に当てるだけ。
これにすらろくに反応を示さない時点で限界超えてんのが丸分かりだ。
距離を確認したら、次に打つのは右のコークスクリュー・ブロー。先に右手首を外側に捻ってから、左足で踏み込む動きに連動させて腰、肩、肘、手首を捻り打つ。
狙うは心臓。心臓打ち(ハートブレイクショット)が決まれば相手の時間を止められる、魔法のパンチだ。
「……っ!!」
鎧が壊れて喪失したルドラの無防備な左胸に俺の右拳が突き刺されると、思惑通り彼の動きがピタリと固まったように止まり動かなくなる。
その隙に俺は次の、そして最後の攻撃の準備に入った。
一歩踏み込みルドラの懐に潜り込むようにして屈む。
次に右の拳に力を集約させ、それに伴い右手の籠手が白く輝く。
そして溜めた力を解放すると同時に、跳躍しながら渾身のアッパーカットを放つ。

リアル・インパクト（真・昇龍拳）!!!

ＤＭＣシリーズの『３』『４』『５』におけるダンテが持つ必殺技の中でトッププクラスの破壊力。ジャンプアッパーカットの前に溜めが必要という隙が大きく、攻撃範囲もアッパーカット故に狭いので使いどころは限られるが、当たれば雑魚敵は勿論のことボスキャラですら大ダメージを与えられる一撃。ただ一発殴るだけ、だがそれが最強の破壊力を誇る、一種のロマン技でもある。

こんなもんをいきなりぶっ放しても当たる訳ないので、確実に当てるには事前準備が必要だ。相手を気絶させたり動きを止めたり等々。今回に限ってはルドラが既にグロッキーだった為、幻影剣や特殊能力ではなく『はじめ○一歩』を読んで得た知識を活用しフラフラしているのを止めさせてもらった。

え？　なんでバージルのドラゴンブレイカー（ジャンプアッパーカット×２　ｏｒ　３）じゃないかって？　こっちの方が好きなんだよ!!

とにかくこれでルドラも気絶するだろう、と確信していた俺の拳がめり込んだのは、ルドラの顔ではなかった。

（は？）

目の前にいるのは、俺の拳がめり込んだのは、リアル・インパクト（真・昇龍拳）が綺麗に決まったのは、ルドラではなく、ヴェルダナーヴァだった。

（はぁっ!?）

ヴェルダナーヴァの顔面に、俺の拳がぶち当たっている。

（ダメだ！　もう動きを止められない!!）

特殊能力など一切使っていないが体感時間が引き伸ばされ、スローモーションのようにゆっくりと世界が動いていく中で、俺の肉体は昇り龍の如く跳躍しながら拳を振り切り、親友でありこの世界の創造神であるヴェルダナーヴァを空高くぶっ飛ばす。

いつからルドラがヴェルダナーヴァに入れ替わっていた？　拳が

当たる直前までは確かにルドラがいたはずなのに!!
「ぐふぅっ!!」
くぐもった悲鳴。
ヴェルダナーヴァの体は顔面から血飛沫を吹きながら大きな大きな放物線を描き、まともに受け身も取れず頭から地面に激突した。その際ドシャアッ!! という嫌な音がやけに響く。
スゲー綺麗な車田飛びと車田落ち！ 我ながら惚れ惚れする！
ってそんな感傷に浸ってる場合ではない。
「ヴェルダナーヴァ！ お前、何をやっているんだ!?」
真・魔人化（シン・デビルトリガー）を解除し慌てて駆け寄りながら咎めるように叫び、仰向けで大の字になっているヴェルダナーヴァの上体を助け起こす。
「ヴェルダナーヴァ様！ なんて無茶を!!」
「お兄様なら殴られずに済んだでしょうに!!」
ルシアとヴェルグリンドもそばまで走ってきた。
「おいヴェルダナーヴァ！ しっかりしろ！」
「……前が見えない」
そりゃそうだ！ だって今のお前、『前が見えねェ』状態だもん！
真・魔人化（シン・デビルトリガー）発動させてのリアルインパクト（真・昇龍拳）が何故か顔のど真ん中にぶっ刺さるという謎の角度と入れ替わり現象だったもん！ 入れ替わりはなんとなくルドラを庇うつもりだったのが分かるが、なんでお前ちょっと俯いてたの!?
「回復魔法を」
「はい……！」
「それでお兄様、ルドラは何処に？」
俺の指示にルシアが素直に従い、ヴェルグリンドがキョロキョロと辺りを見回す。
「こっちだ。こいつにも回復魔法を頼むぜ」
声がした方に顔を向ければ何もない空間が一瞬歪み、そこから意識を完全に失っているルドラをお姫様抱っこしたギィが現れた。

ヴェルダナーヴァを師とし、俺より前にギィと戦ったというのであれば、二人が近くで隠れて様子を窺っているのではと予想していたが、まさか勝負の途中でヴェルダナーヴァが割って入ってくるとは想定外だった。

「まあ、その、ルドラにはユリゼンのことをあえて教えなかったし、ユリゼンにもルドラのことを一切伝えようとしなかったからね。とりあえず一発殴られておこうかなと思って」

「お前らしいとは思うが……　あ、おい無理して立つな、まだ座っていろ。膝が笑っているぞ」

「正直死ぬかと思ったよ、さっきのパンチ。凄い威力だったね」

「……」

真面目で誠実なことを言う神様の相変わらずな態度に呆れてしまう。だからと言ってＤＭＣシリーズにおける必殺技の中で最大火力を誇るリアルインパクト（真・昇龍拳）をまともに食らう必要はないだろう。躱すなり防ぐなりすればいいものを。

リアルインパクトの元ネタはＤＭＣシリーズを生み出したＣＡＰＣＯＭの別作品、超人気格ゲー『ストリートファイター』シリーズに登場する必殺技だ。設定上、天――つまりは神仏に拳を向けるという意味を持つ為、禁じ手扱いになっている技でもある（どいつもこいつも使いまくるけど）。

……　まさかそういった設定が『属性』となってこの世界の『神』であるヴェルダナーヴァに大ダメージを与えたんじゃないだろうな？　アニメやゲームでなんかそういうのあったよな。確か概念武装とか哲学兵装とかなんとか。

やれやれと溜め息を吐いて妙な思考を追い出し頭を切り替え、まだ意識が戻らないルドラに視線を移す。

彼は今、ヴェルグリンドに膝枕をしてもらっている。ルシアから回復魔法も受けているので、すっかり元のイケメン面に戻っていた。（それにしてもバカだよなこいつ）

でも、嫌いなタイプのバカじゃない。愛すべきバカと言えばいいのか、好感を持てるタイプのバカだ。

さっき戦いの最中に地中に埋めてしまったルドラの剣を掘り出すと、魔力でタオルを作り出し綺麗に汚れを落とし、横になっている彼のそばに置かれた鞘に納刀、そばに置いておく。
「あら優しい」
「違う。埋めたから掘り返した、当然のことをしたまでだ」
「……フフ、そういうことにしておきましょうか」
俺の行為にヴェルグリンドが感心したように言うので否定したら、彼女は僅かに驚いた表情を見せてから柔らかく微笑んだ。
やがて「ううーん」とルドラが呻き声を上げた後に目を覚ます。
「ルドラ、大丈夫？」
「心配したんですからね」
彼の額を愛しげに撫でながら問うヴェルグリンドと若干怒ったようなルシアにすぐには応えず、自身を上から覗き込む面々を見回し状況把握に努めた後、右手で顔を覆ってから「ああ、もう平気だ。すまない」と返答する。
「ルドラ、すまない。ボクが――」
「謝らないでくれヴェルダナーヴァ。俺様がガキだっただけだ」
上体を起こしたルドラにヴェルダナーヴァが頭を下げるが、ルドラはそれを遮り自嘲気味に笑う。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
なんとも気まずい空気がどんよりとこの場を支配し、皆黙ってしまった。
事実を黙っていた師匠と何も知らずに憧れを抱いていた弟子。事情がどうであれ、今回の件でちょっとした蟠りができてしまったのは仕方がないのかもしれない。
でも俺には直接関係ないし、後は当人同士で気が済むまで腹割って

話し合えばいいことである。
　ということで!!
「俺は帰る」
「えええええ!?　ユリゼンお前この空気放置してか!?　って待て、おい本当に待てってば!!」
　踵を返し闇魔刀で空間転移しようとしたらギィに背後から羽交い締めにされた。
「放せギィ。動いたから腹が減った、だから帰る、当然のことだ。そもそもヴェルダナーヴァとルドラの師弟関係を今日初めて聞かされた俺にどうしろと？　ヴェルダナーヴァは謝罪したがルドラは既に怒る気もなければ謝罪を必要としていない、ならそれでいいだろう？　後のことは俺の知ったことではない。当人同士で納得いくまで話し合え」
「言ってることはごもっともだが俺を置いていくな！」
「お前は自分で転移できるだろう」
「だからって置いてくなよ！」
「お前も自分の家に帰ればいいだろうが！　まさか最初からウチに来るつもりだったのか!?」
「つれねぇこと言うなよ？　俺とお前の仲だろう？」
「今日はもう疲れたから勘弁しろ！」
　放せ！　放さねぇ！　と二人でわちゃわちゃやっていたら、ルシアが「ウホッ☆」と変な声を出したような気がしたがきっと気のせいだ。
「おいこらそこの悪魔共」
「「あ？」」
　ルドラの声。ギィが俺を放し、二人揃って振り返った。
「俺様は諦めてないからな。また後日貴様らに戦いを挑む」
　これってもしや今後は顔合わせる度に勝負挑まれる感じか？
　戦うことそれ自体は嫌いじゃない、むしろ好きな方だが、毎回それってのは少し味気ないな。というか、俺に挑むならまずギィに勝ってからにして欲しいんだが。
　それなら――

「ならルドラ、今から俺の街に来い。次は飲みで勝負だ」
「何？」
鳩が豆鉄砲食らったような顔になるルドラ、ルシア、ヴェルグリンド。たぶん心の中で「急に何言ってんだこいつ」と思われてるんだろうけど。自分の都合に他人を付き合わせるなら、他人の都合に付き合わされることも了承しないとな。
彼らのそばでヴェルダナーヴァが微笑ましそうにしている。
「酒だ。下戸で飲めないなら無理に付き合わせるつもりはないが」
「さっき『今日はもう疲れたから勘弁しろ』って言ったじゃねぇか!!」
「拗ねるなギィ、気が変わったんだ。それに結果的にお前のお望み通りになっただろう？　全員ついて来い」
あー腹減った何食おう、と考えながら闇魔刀で拠点にしている街まで空間を繋ぎ、皆を促す。
ギィは当然といった面持ちで、ヴェルダナーヴァは苦笑しながら、ルドラ一行は困惑しながらついてくる。
こうして、なんやかんやあったが『勇者』であるルドラとの縁ができたのであった。

それにしても『ルドラ』と『ルシア』か。ただの偶然だろうが、DMCシリーズにも同名の存在があった。
『ルドラ』は『3』にてダンテの敵＆武器として登場した『アグニ＆ルドラ』と同じ名前だ。
『ルシア』は『2』に登場したヒロイン、及びもう一人の主人公。『5』の前日譚の小説にファンサービスで出てきたのはとても良かった。
確実に偶然でしかないが、これも何かの縁に違いない。この出会いを大切にしようと思う。

ずっと、楽しい日々が続くと思っていた

ある日。

「来てやったぜユリゼン、勝負しろこの野郎！」

『おーい磯野、野球しようぜ』なノリでルドラがやって来た。

「今日はギルドから指名依頼が入っているから、それが終わった後なら付き合えるが」

「なら仕方ねぇ、この勇者であるルドラ様がそのちんけな仕事を一瞬で片付けてやる。あ、報酬は折半でいいぜ」

「勝手に決めるな」

あの日以来、こんな感じでルドラがしょっちゅう訪れるようになった。

「ユリゼン、お前ルドラに稽古つけてやってるんだってな」

またある日、まるでルドラが来ない日を狙っていたかのようなタイミングで少し拗ねた顔のギィが現れた。

「稽古というか、数日置きに勝負を挑まれるだけだが」

「それを世間では稽古と言うんだ！」

「そう、か？」

首を傾げる俺にギィが剣の抜き切っ先を向ける。

「ということで俺にも付き合え。あいつだけには負けたくねぇ。次の勝負でコテンパンにしてやる」

「いや、この後仕事が――」

「だったら俺が手伝ってやる、この魔王ギィが即終わらせてやる。それならいいだろ？　あ、報酬は折半だからな」

「お前ら言ってること同じだぞ」

悪魔族だがよく人間の街で買い物したり食事をしたりするので、普通に報酬を要求するギィの態度に溜め息を吐くのであった。

「ユリゼン、少し相談したいことが」
　またまたある日。緊張した面持ちのヴェルダナーヴァが来訪したので迎え入れる。
「ヴェルダナーヴァが俺に？　珍しいな。それで、内容は？」
「引かずに聞いて欲しいんだけど」
「……」
「ルシアと、もっと仲良くなるにはどうしたらいいと思う？」
……　恋愛相談？
　え？　これって恋愛相談だよな？
　ヴェルダナーヴァの顔が凄く赤い。
　おや？　おやおや？　おやおやおやおやおや？
　神から直接愛のキューピッド役を任されてるのかこれ!?
　神様が人間に恋をする、なんか前世のギリシャ神話にもそういうのあったな。まあヴェルダナーヴァはギリシャ神話に登場するろくでもない神々と違って善良で人格者だから、もし振られても理不尽に怒って天変地異を起こすなどしないので何も心配はしていないが。
　ならば不肖の身ではあるが謹んで承ろうじゃないか。
「二週間後、この街の近くの村で収穫祭がある」
「収穫祭？」
「そこそこ大きな村で外部の人間も問題なく参加できる行事だ。俺も以前参加したことがあるが、なかなか楽しめたぞ」
「それにルシアを誘えと」
「そう。勿論二人っきりでな」
「二人っきりで!?」
　え？　そこ動揺するところじゃないだろ。まさか一度も二人っきりでというシチュエーションになったことないのか？
「安心しろ、当日のお邪魔虫共は俺が一人残らず叩き潰しておく」
　魔王だろうが勇者だろうが、ヴェルダナーヴァの恋路は邪魔させない。
　いや、この場合は包み隠さず話して協力させた方が良いかもしれない。その上でもし先走って妙なことをしようとしたらぶっ飛ばせば

いい。
「でも、ルシアは一緒に来てくれるかな？」
　不安そうにしているヴェルダナーヴァの肩に手を置き俺は大きく頷く。
「不安になる気持ちも分かるがまずは一歩踏み出すことだ」
　それから俺は人間の女の子に恋をしたこの世界の神様にデートプランを授けたのであった。
　勿論、当日に話を聞いて面白そうだから出歯亀しようとした魔王と勇者は全力で叩き潰したのである（二人の仲を応援しているということで珍しく竜種二体が味方してくれた）。

「お前ら農村の収穫祭好きだよな。この前も行ったじゃねぇか」
「ボクは一所懸命に生きている人々が楽しそうに生を謳歌している姿ならなんでも好きだけど、収穫祭の類いはギィとユリゼンが特にね」
「俺の場合祭は人間を可愛いと思うようになった切っ掛けだしな」
「神様目線のヴェルダナーヴァとギィの二人と違って悪いが、俺は純粋な食い気だ。その地特有のものが惜し気もなく振る舞われて飲み食いできるのは何よりも勝る至福の時間だ。海なら海の幸、山なら山の幸、その地域の酒、他にも数えだしたらキリがないが、冒険者として人々を守るのもクリフォトの主として戦争の抑止力になっているのも、半分はこの為だ。豊かな食事は人生を豊かにしてくれる、これは世界が変わっても種族が変わっても変わらない真理だからな」
「だからいつも忙しそうにあっちこっち行ってんのか。流石は伝説の冒険者様、勇者の俺様より働き者だ。まあ、俺様も民が幸せそうにしてる姿を見るのは嫌いじゃねぇけどよ」
「ユリゼンらしくて良いよね、自身の欲望の為に他者を救うっていうのが。ボクとしては大歓迎だよ」
「人間が皆そんな感じなら俺の仕事も多少は減るんだがな。で、残りの半分は？」
「残りは趣味だ。刺激があるから人生は楽しい、そうだろ？」

「「確かに」」

いつの間にかあいつらと一緒にいることが日常となっていく……というか、ルドラと知り合う前からもそんな感じだったが、彼が加わったことで頻度が更に増したのだ。今まで隔週だったのが数日置きになったといえば誰もが納得してくれるだろう。

まるで地球の男子高校生のノリ、学生の放課後や休日と表現すればいいのか。野郎四人で集まってバカ騒ぎして、一緒に美味いものを飲み食いして、たまに喧嘩して殴り合って、楽しいことをひたすら探し求めて、かと思えば丸一日何もせずにグダグダだらだらとくっちゃべって、たまに困ってる人達を助けたら崇められたりして、四人でいる時のノリと勢いを全力で楽しんでいた。

神と魔王と勇者と俺……俺だけなんか『俺』ってそれらしい肩書きがなくて締まらねーな。いや、一応は『魔王の相談役』とか『伝説の冒険者』とか『災禍の魔樹の主』とかあるけど他の面子と比べてふわっとしてる。

とにかく、俺達は互いに心許せる友人同士で、暇を見つけては誰かと共に行動するのが当たり前になっていて、俺は漠然とこんな楽しい日々がいつまでも続くのだと思い込んでいた。

信じて、疑わなかった。

「ユリゼン……ボクはルシアと、正式に付き合うことになったんだ」

「今更？」

「え？」

「『え？』じゃないだろ。もうとっくの昔に恋人同士になってると思ってたぞこっちは。初めて相談に乗ってから一体何十回デートしたんだお前は？」

「……　奥手でごめんなさい」
「で、プロポーズはいつにする？」
「早くない!?」
「お前が奥手だから早い段階で手を打っておくんだろうが」
「……　ごもっともです」

ルドラ達と知り合ってから数年後、ヴェルダナーヴァとルシアが結婚した。
幸せの絶頂にいる二人を俺は当然祝福した。皆も同様だ。
白氷宮で俺主催の、地球の結婚式的なものと披露宴的なものを開催し、大いに盛り上げ祝う。
二人の新しい門出。輝かしい未来を夢想して、末永くお幸せにと心から願った。

それから暫くして、ルシアの懐妊の知らせを受ける。
そして――

生後数日の、まだ首も据わっていない赤ちゃんをルシアから教わった通りに抱く。内心でおっかなびっくりしているこっちのことなど気にしていないのか、腕の中の赤ん坊はすやすやと穏やかに寝ている。
「女の子だったな……　ヴェルダナーヴァ、ルシア、この子の名前は考えてあるのか？」
俺の質問に夫婦は互いに顔を見合わせてからそれぞれ返答した。
「はい。ヴェルダナーヴァ様に良き名を考えていただきました」
「この子の名前はミリム。ミリム・ナーヴァ。よろしく頼むよ、ユリゼン」
「……　ミリム・ナーヴァ……」

聞かされた名前を反芻しながら視線を腕の中の赤ん坊に向ける。
「俺はユリゼンだ。よろしくな、ミリム」
挨拶をするが、寝ている赤子が反応する訳がない。
小さな命の確かな脈動と温かさを直に感じて、俺は言葉では表現できない感動に包まれ自然と笑みを浮かべていた。
「顔は母親似だな。きっと将来美人になるぞ」
「そうでしょそうでしょ！　ユリゼンもそう思うよね！」
早速親バカっぷりを発揮するヴェルダナーヴァに俺とルシアは苦笑する。
その後、目を覚ましたと同時に泣き出したミリムをルシアに返し、お暇することになったのだが――
（……　もうすぐただの人間になる、だと？）
別れ際にヴェルダナーヴァが告げたのだ。この世界を創造した神である己の力をミリムに継承させ、自身はただの人間に成る、いずれはルシアと共に寿命で逝く、と。
ミリムに自身の力を継承するのはいい。誰だって親なら子に色々なものを受け継いで欲しいという思いがあるのは分かる。
ルシアと共に寿命で逝くというのも……　妻に先立たれてしまい独り残されるのが辛いから、という理由で不滅の存在から定命の存在になることにも理解できる。妻を心から愛する彼の意思を尊重しようと思う。
しかし、何の力も持たないただの人間になるというのは反対せざるを得ない。
せめて最低限、自分や妻子を守る為の力は保持しておくべきだ。少なくともミリムがある程度大きくなるまでは。
ヴェルダナーヴァとしては、まだ生まれたばかりのミリムには当然ながら自衛手段が存在しないので、早い段階で力を継承させどんなことがあっても生き延びられるようにしたいとのことだが。
（まだあの子は乳児だぞ）
言葉は分からないし話せない、善悪の区別もついていない。当たり前だ、新生児なんだから。

友の方針に文句を言いたくはないが、力の前にもっと大切なことがたくさんあるはずだ。もう少し彼女の成長を待ってから様々なことを教えて、経験させてからでも遅くはない。
神が生まれたばかりの赤子に己の力を全て与えて自身は無力な人間に成り下がるなど、誰が想定していただろうか。
(嫌な予感がするな)
胸がざわつく。仲間内で誰かを心配するなど初めてのことだった。
ヴェルダナーヴァ達のことは気に掛けておくべきだと思う。皆にも声を掛けておくつもりだ。俺もなるべく暇な時は顔を出すようにしよう。杞憂に終わるならそれでいい。
現在のヴェルダナーヴァ達の住まいはナスカ王国の宮殿。ルシアがナスカ王国の王女で、彼女の実家で暮らすことになった為だ。
ルドラもミリムが生まれる少し前に戴冠式を経て王太子から国王へ。以前より忙しい身になったにも関わらず態度は相変わらず。執務仕事を抜け出しては剣を片手に相手をしろとせがんでくる、夜になると飲みに付き合えと酒瓶片手に要求してくる破天荒な王になっていた。
宮殿の警備は厳重だし護衛の兵達もなかなかの精鋭なので、ちょっとやそっとのことでは危険な目に遭うことはないだろう。
我ながら心配のし過ぎだと感じるが、ヴェルダナーヴァの話を聞いてから胸騒ぎが収まらない。
彼の決断が裏目に出ないことを祈り願うものの、胸の奥でしこりのように残った蟠りはいつまで経っても消えなかった。

ミリムが誕生してから一年も経たずして、杞憂で終わらなかった事実に俺は打ちのめされる。
その知らせは、いつものように目を覚まし朝食を摂ろうと安宿の部屋を出ようとしていた時に、突然前触れもなく室内に空間転移してきたレインとミザリーからもたらされた。
「ユリゼン様！」
「ヴェルダナーヴァ様とルシア様が……！！」
二人の悲痛な表情と声。レインなんて今にも泣き出しそうだ。それだけで俺はその場で嘔吐したくなるほど気分が悪くなり、思わず口元を片手で押さえる。
「二人が、どうした？」
震える声で問い詰めれば、レインから返ってきた答えは、
「……お亡くなりに、なりました」
目に見えない誰かに不意打ちでガツンと殴られたような衝撃を受けた気分になるもの。
信じられない、信じたくない言葉。
危惧していたことが現実になってしまい、一瞬意識が遠のく。全身から力が抜けて立っていられなくなり、無様に四つん這いとなる。レインとミザリーが慌てて駆け寄り何か必死に呼びかけてくれるが耳に入らない。
あの日以来、嫌な予感はずっと続いていた。不安を拭うことはできなかった。いい加減痺れを切らした俺が考えを伝えてもヴェルダナーヴァは頑として首を縦に振らなかったのだ。
困ったような笑みを浮かべて『すまないね、ユリゼン』と謝るだけ。
結果的に言えば神であるヴェルダナーヴァは己の力をミリムに託し、不滅の竜種から人間へと零落し、その結果がこれだ。
「ミリムは、無事なのか？」

「はい、ミリム様だけは」
辛うじて出せたか細い声での質問にミザリーが応じる。
聞いた答えにより僅かに、本当に僅かに安心したものの、胸中を渦巻く悲しみは消えてくれない。
「二人は何故死んだ？」
「それは……」
口を噤みどう答えようか迷う素振りを見せたミザリー。そんなに俺に聞かせられない内容なのかと思考が過った時、レインが憎悪と怒りが込められた呪詛を吐くように言う。
「人間です。人間の仕業です。ナスカ王国と敵対関係にあった国の人間共が、ルドラ様が不在の時を狙って宮殿に自爆テロを仕掛けてきたのです」

天蓋付きの大きなベッドの上で、二人は仲良く手を繋ぐように横たえられていた。
二人の遺体は、死んでいるのが信じられないくらいに綺麗な状態だ。まるで眠っていて、今にも起き出すのではないかと勘違いしてしまうくらいに。
俺より先に来ていたギィにどういうことか視線で問えば、レインとミザリーが俺を呼びに行っている間に皆が力を合わせて遺体を修復したとのことだ。
つまり修復しなければならないほど、二人の死に様は酷かったと？
ギリッ、と奥歯を噛み締めた。
ベッドの前で両膝を着き、二度と目を覚まさない親友に問う。
「どうしてだ？　どうしてだヴェルダナーヴァ？　どうして俺の忠告を聞き入れてくれなかった？」
視界が歪み、涙が溢れるのも構わず問い詰める。そんなことをしても反応などないし何か起こる訳でもないというのに。
「お前が、力を失う必要などなかったはずだ。お前がルシアとミリム

を守ればそれでよかったはずだ！　力の継承はミリムが成長してからでもよかったはずだ!!」
嗚咽混じりに感情をぶつけても何の意味もない。しかし俺は嘆かずにはいられなかった。
もしかしたら、ヴェルダナーヴァはこうなることを予見していたのだろうか？　ミリムに力を受け継がせないと彼女の身に何かあるかもしれないから、だからこそ生まれた直後の赤ん坊に力を授けたのだろうか？
分からない。答えは出ない。もうヴェルダナーヴァは何も応えてくれない。
だが後者の可能性は非常に高かった。娘に訪れる最悪を回避する為なら自身が力を失っても構わない、もしそれで自分が死んでも娘が無事ならば、という選択を躊躇なく取れる。彼はそういう男で、父親だったのだ。
「……俺の責任だ」
背後では自責の念に駆られるルドラが。
「俺がもっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかった!!」
下手人はナスカ王国と敵対していた国の人間。やり方は卑劣極まりない、大量の人間爆弾という非人道的な自爆テロ。犯行のタイミングはルドラが遠征中を狙ったもの。ヴェルダナーヴァとルシア以外にも宮殿にいた者達には大勢の犠牲者が出ている。
怒りと憎しみが沸々と沸き上がってくるものの、今は優先すべきことがあると思い直し、冷静になるように努めた。
「……」
二度、三度と大きく深呼吸をしてから袖で乱暴に涙を拭い、立ち上がると俺は皆に背を向けたまま促す。
「……今は、二人を弔おう。動くのはその後だ」
「ああ……そうだな」
ギィだけがポツリと同意を示すのを聞きながら、どうしてやろうかと考えを巡らせ始める。

二人の葬儀は、仲間内だけで粛々と行われた。所謂家族葬のような。二人の性格上、必要以上に大事にするのは嫌がるだろうと誰もが思ったのだ。

一つの大きな棺に二人の遺体を納め、蓋をした段階で俺は心の内を吐露した。

「俺は、ヴェルダナーヴァとはもう会えない気がする」

この言葉に皆が弾かれたようにこちらを向き大きく目を見開くが、構わず続けた。

「ヴェルダナーヴァはミリムに全てを託してただの人間と同じ存在となり、逝った。不滅の竜種ではなくなったんだ。きっと復活はできない」

「それは……」

すぐ隣に立っていたギィが否定しようと口を開き、固まった。

やがて絞り出すように紡ぐ。

「……ミリムが既に不滅の存在となっているのなら、ユリゼンの言う通りかもしれねぇ。それにヴェルダナーヴァの性格なら、自分だけ復活することよりルシアと共に逝くことを望むだろうしな」

ギィの見解に息を呑む声がいくつも鼓膜を叩く。

それはルドラのものであり、ヴェルグリンドのものであり、ヴェルザードのものであり、レインとミザリーのものであった。

きっと誰もが楽観視していたのだろう。人間であるルシアは死んでしまったらそれまでだが、不滅の竜種であるヴェルダナーヴァだけは復活できる、と。

馬鹿げている。妻は死んだままで自分だけ復活？　そんなことをヴェルダナーヴァが望む訳がない。愛する妻と共に寿命で逝くことを望んでいた彼が、己のみの復活を望むなどあり得ない。

だから、本当にこれでお別れなのだ。

ただの人間になるって聞いて、覚悟はしていたんだ。いつか、さよならをしなければならない時が訪れると。

でも、こんなに早くその時が来るなんて思ってなかった。何十年後かに、シワシワのお爺ちゃんになったヴェルダナーヴァが笑って逝く

のを送り出すことになると思っていたのに。
「さようならだ、ヴェルダナーヴァ、ルシア……　どうか安らかに」

葬儀を終え、闇魔刀を抜刀し空間転移をしようとする俺にギィから声が掛かる。
「やるのか？」
具体的に何を、とは言わない。そんなことなど言うまでもないし確認するまでもないからだ。
「ああ。やるに決まっているだろう」
目の前の空間を十字に斬り裂き穴を開く。
俺は皆に背を向け振り返らないまま闇魔刀を納刀し、踏み出しながら宣言した。

「地獄を見せてやる」

地獄之王（ザキングオブヘル）

それに最初に気づくことができたのは、魔法に詳しい者達だけだった。

突然、前触れもなく張られる結界。

しかもただの結界ではない。その国をすっぽり覆ってしまうほどに広範囲かつ大規模な代物。人の行き来を制限する類いのそれは、異変に気づいた優秀な魔法使いが解析してみれば、範囲内の人間の脱出を禁止し、発動者を殺害しなければ決して解くことはできないという効果を持っていた。

続いて訪れた異変は魔法不能領域（アンチマジックエリア）。

結界内全域に効果を及ぼし、発動直後にその国に存在していた全ての魔法使いを一瞬で無力化する。

発動者を殺害しないと脱出不可能な結界が張られ、魔法が使えなくなったことに各所で困惑と疑問が生まれるのを他所に、事態は無慈悲に進む。

その国の王都、王城の上空に巨大な魔法陣が描かれる。

まるで血のように赤黒く、禍々しい光を放つ魔法陣だ。

雲一つない快晴である青い空の下、赤黒い色の魔法陣を人々が不安を胸に抱えて見上げていると、その魔法陣から血が滴るように何かが大量に降り注ぐ。

滴り落ちたそれらは地上に激突する前に蠢き、産声を上げ、形を成してその姿を顕す。

「うわあああああ!!!」

目撃した者達は皆一様に恐怖し絶望の悲鳴を上げ、我先にと逃げ出す。

何故ならそこには化け物共がいたから。

魔法陣から止めどなく降り注ぎ、生み落とされる化け物共。

まるでこの世のありとあらゆる邪悪が形を成したかのような化け物共が。

人を本能的に恐怖に追いやる妖気（オーラ）を惜し気もなく放ち、殺意に満ち

た血走った眼差しで睥睨し、これから哀れな獲物を蹂躙する悦びに期待し嗤う。
化け物共は多種多様だった。鎌を手にした死神のような姿をした者や、短剣や散弾銃で武装した人間大の糸操り人形（マリオネット）、兜と盾で武装した蜥蜴、拷問器具のようなもので全身を拘束された白骨死体、重厚な全身鎧と剣や槍を装備した騎士、人を簡単に補食できそうな体躯を持つ蝙蝠や猛禽や蝿、猿に似た何か、宙に浮く頭蓋骨、蟷螂のような前足を持つ巨大な蟲、容易く人を真っ二つにできそうな大きな鋏を手にして飛び回る仮面を着けた悪霊（ゴースト）のような存在、その姿を変幻自在に変える影、女性の上半身に蜘蛛の体というアラクネのような姿の者、鋭い背鰭が特徴的な地面を泳ぐ魚、鳥のように空を飛ぶ剣など、他にも様々な種類の化け物共が枚挙の暇がないほどにいた。
そして、一斉にそれらが人々に殺到、襲いかかる。
化け物共の爪が、牙が、剣が、槍が、銃が、鎌が、ありとあらゆる攻撃手段が容赦なく人々を肉片へと変えていく。
「ぎゃあああああ!!」
「誰か助け、助けぐぼぉっ!!!」
「ひぃ！　や、やめ――」
「嫌だあ！　嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「に、逃げ――」
「死にたくない、死にたくない!!!」
「やめろ、やめてくれ！　やめてくださ――」
引き裂かれ、斬り裂かれ、刺し貫かれ、咬み千切られ、粉砕され、叩き潰され、踏み潰され、弄ばれては消えていく命の灯火。
一方的な殺戮が開始され、ろくな抵抗も許されず蹂躙される人々。目を覆いたくなる惨劇があちこちで生まれ、その度に血飛沫が舞い血の雨が降り、犠牲者が恐ろしい速度で増えていき、次々と打ち捨てられる無惨な屍が血の海を作る。
絶望の絶叫、断末魔の悲鳴、必死の命乞いがそこら中に響き渡った。
同時に歓喜の嗤い声が上がる。我慢できないと言わんばかりに愉悦の咆哮を上げ、逃げ惑うことしかできない人々の命を狩ることに、

虐殺に対して悦に入った化け物共の狂喜乱舞する嘲笑が。
それはまさしく悪魔だった。地獄の住人に相応しい悍ましさだ。やること成すこと全てが悪魔の所業であり、人間を老若男女問わず悦んで殺し返り血を浴び嗤う姿は悪魔であり、その悍ましい行為と姿と精神は悪魔以外の何者でもなかった。
化け物共改め悪魔の軍勢は人間を一人残さず血祭りに上げながら進軍していく。
これに対抗すべく人間側の軍及び騎士団が遅まきながら迎撃を開始するが、嵐の中の河川のような濁流を凌駕する勢いの悪魔達相手にあまり意味は成さない。
人間達の剣や槍は木の枝のようにへし折られ、身を守るべき鎧や盾は床に叩きつけた皿のように粉砕され、鍛え上げられた肉体は紙屑のように吹き飛ばされ、皆揃って物言わぬ肉塊にされた。
犠牲者を求める魔の手は何処までも伸びていく。王都を完全に制圧したら次へ。他の人間の住み処に向けて凄まじい速度で移動を開始。そして行く先々で同様の虐殺を繰り返す。
悪魔達は移動と虐殺を嬉々としてひたすら繰り返す。それが自分達に課された使命であり、最高に楽しめる仕事なのだから。
この国の人間を根絶やしにするまで。
悪魔の軍勢により、人々の営みや平穏な日々が阿鼻叫喚の地獄絵図に塗り潰されていく。
やがて――

悲鳴や絶叫の類いが止む。人間の声が一切聞こえなくなる。生きた人間は誰一人としていなくなってしまった証だ。人間だったものが、さっきまで命だったものがこの国中に散らばり転がるのみとなった。
この瞬間、この国の人間は全滅し、国としてはこれ以上ないほど完璧に滅亡したことが確定する。
残ったのは死体の山と血の海。田畑は踏み荒らされ、村々は更地と化し、王都を含めた全ての街は制圧され、建築物などの類いは種類を

問わず軒並み破壊され尽くし、瓦礫という名の残骸がかつてこの国に人間が暮らしていた証拠だということを物語っていた。
悪魔の軍勢は既にいない。皆殺しが完了した時点で全ての悪魔が直ぐ様送還されたからだ。
王都もその他の街も悉くが死都と化し、悪魔の襲撃でありとあらゆる建築物は一つ残らず崩れ落ち以前の姿など見る影もなく、僅かな期間でこの国はただの墓場へ、建築物の残骸は墓標へと成り果てていた。
その時、死臭が漂う広大な墓場に血を啜る魔樹の種が蒔かれる。
災禍の魔樹クリフォト、その種だ。
種は蒔かれた刹那に発芽すると死体の山を喰らい、血の海を吸い尽くし、爆発的に増殖と巨大化を繰り返しうず高く積み上げられた瓦礫の山すら呑み込み、それでもなお留まることなく周囲を侵食し続け、最終的には滅亡した国を隅から隅まで埋め尽くすほどの超巨大な樹となりその存在を世界に知らしめる。

「やりやがったな、あいつ」
白氷宮、その玉座の間にて。
ワイングラスを片手に玉座に腰掛けたギィが、もう片方の手で頬杖をつきながら感慨深げに呟く。
彼の視線の先には、ことが始まる前に予め用意された魔法で映し出された遥か遠くの映像。ヴェルダナーヴァとルシアが殺された復讐としてユリゼンが赴いた土地。悪魔の軍勢が召喚され、その国の住民を一人残らず抹殺し、クリフォトの樹が出現するまでの一部始終を見守っていた。
「あれが、ユリゼン様の眷属……」
「……あのようなことが可能だなんて」
ギィの隣に控えていたメイドのレインとミザリーは、ユリゼンとは長い付き合いがあるのに今日初めて目にした眷属召喚能力に驚いている。

「……」
ヴェルザードは視線を映像に向けたまま、固い表情でひたすら無言を貫いているのでどういう心境なのか読めない。
とにかく、ギィも眷属召喚には内心でびっくりだ。何故なら彼もユリゼンから一切聞いたことがなかったから。
何より個として他を圧倒する戦闘力を保有するユリゼンが、その性格上『数』に頼る戦い方や能力を保有しているとは夢にも思わなかった。
召喚された悪魔の大半は恐らくユリゼンにとって雑兵でしかないのだろう。その証拠に保有するエネルギー量が少なく、そういう種族は雑魚らしく同種が複数体で固まって行動しているのを確認できたしそもそも数が多かった。
しかし、後半になって魔法不能領域（アンチマジックエリア）が解除されて以降に召喚された連中は明らかに違う。エネルギー量が桁違いに高くその上巨体で、同種が存在しない唯一個体であり、単独で行動していた。溶岩や火炎を吐き出す白い蜘蛛、雷を纏い体に複数の嘴を持つ猛禽、三つ首の犬、二対の白い翼を広げ光を操る獣、チョウチンアンコウの誘引突起に似た器官を持ち氷を操る蛙などといった、やはり多種多様な悪魔が我が物顔で好き勝手に暴れ回っていたのだ。

――『地獄を見せてやる』

彼はあの時そう言った。あれはギィ達仲間に向けた言葉であり、同時に今滅ぼされた国の住民に対しても向けた言葉でもあったのだ。
なるほど、確かに彼は地獄を見せてくれた。彼の眷属が、異形の化け物共が人間を一人残らず蹂躙しその魂すら穢し弄ぶ様は、悪魔族の頂点に君臨し魔王として恐怖で世界を支配するギィの視点から見ても、素晴らしいの一言だ。
だからこそ残念である。彼の力の一端を見ることができたこの機会が、よりにもよって亡くなってしまった友への手向けになった事実に。

（……ヴェルダナーヴァ……）
ベッドの上で眠るヴェルダナーヴァとルシア、その二人の亡骸の前で膝を突き涙を零したユリゼンの後ろ姿、自身を責めるルドラの横顔が脳裏を過る。
「……」
無言でワイングラスを呷ってから、ギィは顔を顰めた。
最高級のものを用意させたはずなのに、全く美味いと感じない。
こんなものと比べたら、以前四人で面白そうだという理由で何処ぞの小国にあった小汚ない場末のバーで飲んだ安酒の方が遥かに美味かった。
あの時に飲んだ酒は安酒なのに、とても楽しく飲めた酒だった。
「クソ……！」
嗚呼、本当にクソみたいだ。
あれほど美味かった酒はもう二度と味わえないという事実を改めて思い知り、ギィは心の底から悔しくて毒づいた。

ギィ達同様、ルドラとヴェルグリンドもナスカ王国内のルドラの自室にて一部始終を見ていたのだが、あまりにも酷い惨劇の連続と結末にルドラは嘆くことしかできない。
「俺が、俺がもっとしっかりしていれば、二人をちゃんと守れていたなら、こんなことにはならなかった……」
「ルドラ……　あまり自分を責めないで」
ヴェルグリンドはルドラに寄り添いその手を握り慰める。
彼女とてユリゼンと同じ気持ちだった。敬愛する兄と可愛い義妹が殺されて黙っていられる訳がなかった。しかし自分よりもずっと悲しみ怒り泣きながら憎悪を抱えていたユリゼンを見て彼に全て任せることにした。結果が想像以上の地獄で血の気が引いたが、彼女にとって死んだ人間達も滅んだ国も元々ナスカ王国の敵国、つまりルドラの敵という認識だったのでざまあみろとは思っても可哀想とは微塵も思わない。

ただ、敵国の人間が死に絶えたことに心を痛める慈悲深いルドラが自分を責めるのは見過ごせない。
「ルドラ、あなたは何も悪くない、悪くないのよ。あなたはいつだって最善を尽くしてる、それはこれまであなたをそばで見てきた私が保証するわ」
「……ヴェルグリンド」
「だってギィとユリゼンはあなたを責めた？　お兄様とルシアが死んだのはルドラのせいだって言った？　言ってないでしょう」
「……」
「二人共ルドラが頑張ってるのをよく分かってるの。特にユリゼンはお兄様が力を失うことを何より危惧していた。きっとこうなってしまう可能性を考えていたのよ」
「だからこそ俺がもっとしっかりしていれば――」
「ルドラだけじゃないわ、私もよ」
叫ぶルドラの言葉を強引に遮る。
「私も……私がもっとしっかりしていればよかったの。『別身体』を使えば、お兄様達のそばを片時も離れなければ、こんなこと、起きなかったのよ」
「ヴェ、ヴェルグリンド」
「馬鹿よね、私。私の能力は護衛に向いていたのに、皆の中で一番近くにいたのに」
自分で言いながら、段々悔しくなってきた。本当にその通りだったから。
その時、不意に葬式の最中にユリゼンとギィが交わしたやり取りを思い出す。
不滅の竜種から人間へとなった兄は、もう二度と復活できないと言われた。
「あ」
そもそも兄の性格的に妻である義妹が死んで自分だけ復活などしないと言われれ、納得せざるを得なかった。
「あ、あ……あ」

ヴェルグリンドの目からポロポロと涙が溢れていく。
今更になってやっと二人の死を認めて、でもそれを防げる可能性が一番高かったのは間違いなく自分であったと気づいて、そしてもう取り返すことができないと思い知らされて――
「ごめんなさい、ごめんなさいルドラ……　私が、私が」
「泣くなヴェルグリンド、お前まで泣くなよ」
今度はルドラがヴェルグリンドを慰める番だった。
二人は互いを抱き締め合いながら声を押し殺して泣く。泣き続けた。
今はただ、それしかできなかったから。

クリフォトの種を蒔いてから一ヶ月が経過。
それまでの間、樹に侵入してくる者は皆無だった。
理由は知らない。国一つ丸々呑み込む規模なんて初めてだからか、国民を全員皆殺しにしたからか、レッドオーブを使えるだけ使って悪魔を召喚しまくったからかは分からない。はっきり言ってどうでもいい。
今俺は、クリフォトの樹の頂上――地下の最下層にいる。クリフォトの樹の実が完熟を迎えたから収穫しに来たのだ。
薄暗い半円状のホールのような広い空間内で、その空間の中心には赤黒くて気味の悪いサルスベリみたいな木が一本生えている。その木にたった一つだけ果実が成っており、果実であるにも関わらず血が滴っていた。
クリフォトの樹の実。人間の血を養分にして成る禁断の果実。
相変わらず何度見ても不味そうな外見で、実際普通に不味いのだが。
これまでは戦場でしか種を蒔いたことがないので、多くても吸った命は十万前後が最高だった。が、今回は国一つ、国民全員を贄として捧げ為、少なくとも吸った命は数十万から百万は越えているだろう。結構な大国だったからもっといくかもしれない。

まあ、ヴェルダナーヴァとルシアの二人の命と比べたらカスみたいなもんだ。万だろが億だろうが兆だろうが知ったことではない。
果実をもぎ取り、食らいつく。
「……しょっぱい」
血の味がするはずの果実は、零れた涙が口の中に入るせいでしょっぱい。
「畜生、しょっぱいなあ、クッソ不味いなあ」
俺はぶつぶつ文句を言いながら、泣きながら果実を食い続ける。
結局、果実は最後の一口までしょっぱかった。

果実を収穫してすぐにクリフォトの樹が枯れる。
樹全体が石灰のようになり、脆く崩れて倒れ伏す。
石灰のようになった樹の残骸は風に吹かれて砂となり、砂は舞い散りいずれは樹が発生していた痕跡すら消えてしまう。
故に、クリフォトに呑み込まれたその国は、最早何も残らない。生き残った者もいない、建築物も何一つ残っていない、文化も全て残らない。ただ広大な大地が残るのみ。
やがてその土地もナスカ王国に併呑され、歴史書に初めてクリフォトの樹に滅ぼされた国として名を記すのみとなった。

引きこもりのニートをしていたら大変な事態になってた件

ヴェルダナーヴァとルシアが亡くなってから数年が経過した。
二人が死んだ原因を作った国を滅ぼして以来、俺には『やる気』というものがごっそり抜け落ちてしまい、丸一日何もせずにだらだらするという全く生産性のない生活を送っている。
起きたらとりあえず何か食って、眠くなるまでだらだらして、寝る。そんな引きこもりのニート生活をいつまでも続けてはいけない、と頭では分かっているのだが残念なことに心と体が反応しない、動かない。
何もかもが面倒で、だるくて、億劫で、何かをする気になれない。
典型的なダメ人間と化していた。
そして周囲はそんな俺を――
「ユリゼン様、お昼ご飯ですよ。食べます？」
――特に何も言わずに許してくれた。
部屋に入って来たのはレイン。相変わらずのメイド姿で、料理を載せたワゴンを押しながら気軽に聞いてくる。
何故レインが引きこもりニート生活をしている俺にわざわざ食事の差し入れをしてくれるのかというと、そもそもここが白氷宮だからだ。更に詳しく説明すると間借りしている部屋はレインのアトリエで、その部屋の隅の一角に寝袋を敷かせてもらっていた。
絵を描くのが趣味のレインは白氷宮内にギィの許可を得てアトリエを所持しており、アトリエ内には写真かと思うくらいに精巧な絵が壁を所狭しと飾られている。レインがこれまで見てきたものが、彼女の手によって描かれていたのだ。
つまりこの部屋は、レインのアトリエは俺にとって思い出がたくさん詰まっていることを意味する。
壁に飾られている絵には人物画が多い。また、日常の一端をそのまま捉えたかのようなものを彼女は好んで描く。絵の中では俺達四人

が酒盛りをしていたり、殴り合っていたり、テーブルに齧りつくようにトランプをしていたり、もしくは女性陣だけで優雅にお茶会をしていたり……　今では懐かしいなぁ、と感慨に耽る絵がたくさんあった。

もう二度と取り戻せない『過去』が、そこにあった。俺は日がな一日、ボーッと壁の絵を眺めて過ごす。楽しかった過去に浸り、寝て起きてを繰り返すだけ。

「さあ、冷めない内に食べましょう」

食事の準備をテキパキこなすレインに促され、部屋の隅の粗大ゴミと化していた俺は立ち上がる。

「……　いただきます」

両手を合わせて言う食事前の挨拶。その一連の言動にレインはくすぐったそうに笑う。

「どうぞ、お召し上がりください」

こうやってレインのアトリエで、彼女と二人で食事を摂るのも最早日常だった。

食後の紅茶を淹れながらレインが口を開く。

「報告によりますと、ミリム様はいつも通りとのことです」

「……　そうか。それは良かった」

ティーカップに注がれる紅茶を注視しながら応じる。

ミリムの両親――ヴェルダナーヴァとルシアが亡くなって、あの日以来ミリムはどう暮らしていたかというと、ナスカ王国内にある非常に小さな農村で村民全員から世話を焼かれながら静かに平穏に暮らしていた。

勿論、ただの農村でもなければただの村民でもない。それはあくまで偽装。農村はミリムが平穏無事に生きる為に急遽用意された箱庭であり、村民全員がナスカ王国の騎士団から選抜された護衛である。

あの国を滅ばした後、一度ミリムに会おうとその村に訪問したことがあった。

今思えば、会いに行くんじゃなかったと後悔しているが。

まだ言葉は分からなくても『お父さんとお母さんの仇は討ったよ』と一言伝えようとした時に彼女が見せた目、純粋無垢な眼差しが俺を射抜く。キョトンとした表情でこちらをじっと見つめてくる態度は赤子特有のものだが、俺にはそれが両親を守ってくれなかったことに対して責めているように感じた。

まだ当時一歳になるかならないかの赤ちゃんにそんなつもりがないのは理解している。酷い被害妄想だというのは分かっている。しかし、俺は何故か彼女に見つめられることに耐えられなかった。

自責の念と罪悪感に押し潰されて俺は逃げるように彼女の前から姿を消し、過去に縋る為にレインのアトリエまで足を運び、結局そのまま住み着くようになってしまったのだった。

ミリムにはそれ以来会っていない。こうしてレインから話を聞かせてもらう程度。

こんな生活が数年続いている。

なんとも無様な話だ。

「では、失礼します」

食後の紅茶を終え、後片付けを済ませて退室しようとするレイン。

その背中に俺は躊躇いがちに声を掛ける。

「……　いつもすまん、レイン……　お前だけじゃなく、ギィやミザリーにも迷惑ばかりかけてしまっている」

「とんでもございません」

レインは立ち止まって振り返る。

「もう何度もお伝えいたしますが、ユリゼン様がよろしければ好きなだけいてくれて構わないとギィ様は仰せです。私もミザリーもユリゼン様のことを迷惑だとは思っておりません」

「……」

「それに私、今の生活結構気に入ってるんです。ユリゼン様は受けた恩を倍返しにする方だとよく分かっているので、いずれどのような形で恩返ししてくるのかと妄想を膨らませるのが楽しくて」

強かだなぁ……　外見は美人のメイドさんだけどやっぱ悪魔なんだなこの娘も。しかも七柱いる悪魔の王の一柱、原初の青（ブルー）。その時が

来たら一体何を要求され、何をやらされるのやらでちょっと怖い。
でも、こういう軽口を叩いてくれるのは凄く気持ちが楽になる。衣食住も含めて、本当に彼女には世話になりっぱなしだ。
「お前達には感謝している……　必ず、世話になった恩は返す。俺ができる範囲でな」
「約束、いえ、これは契約ですよユリゼン様。忘れないでください」
朗らかな笑みを浮かべてレインは今度こそ退室した。
一人部屋に残された俺は壁に背を預けるようにして床に座り込む。
「いい加減、この引きニート生活から脱却しなきゃな」
それが簡単にできれば苦労はしないか。
絵の中の今は亡き友は、当然ながら何も応じてはくれなかった。

「ふふ、ふふふ、ふふふのふ」
自身のアトリエ、というよりはユリゼンから十分距離を取ったことを確認したレインは、不気味な笑いを零し始める。
「ふーっふっふっー!!　もうこれは落ちたでしょ！　ユリゼン様、私に骨抜きでしょ！　依存してきたでしょ！　もう私がいないと生きてけないでしょ！」
真面目に働くメイドの姿は何処へやら。「アーッハッハッハ!!」と高笑いしながらその場でくるくる踊り出す。
「ここまで来たら私のお願いならもう何でも聞いてくれそう！　昔原初の黒（ノワール）にいじめられたから仕返ししたいですとか言ったら二つ返事であいつのこと粉微塵にしてくれちゃったり!?　ギィ様すら凌駕しヴェルダナーヴァ様に次ぐ強さのユリゼン様にどんなお願いでもできる、うへへ、夢が広がるなぁ！」
すっかり有頂天になって馬鹿笑いをするレインの背後に、いつの間にか現れたギィが彼女の頭に右手を載せ、
「この、馬鹿野郎!!」
凄まじい力で彼女の顔面を床に叩きつけた。
「ぐばっ!?」

汚い悲鳴を上げて床の染みになるレインの上からギィが怒鳴りつける。
「ユリゼンが自分のアトリエに居着いても嫌な顔一つせず甲斐甲斐しく世話してた裏でんなこと企んでやがったのか、てめぇはっ!?」
更にミザリーまで参加してきて、厳しい視線でレインを見下ろしながら吐き捨てた。
「親しい男性が弱った時に突け込んで契約させるなんて……　見損なったわ、レイン」
「おいボンクラ、テメーに人の心とかねーのか?」
「まさに悪魔の所業ね」
「いやいやいやいや、私悪魔ですから!　悪魔の中の悪魔、原初の青(ブルー)ですから!　というか同じ原初の悪魔のギィ様とミザリーからそんなこと言われたくないんですけど!?」
復活したレインがガバッと起き上がって弁解するが、二人は聞く耳持たない。二人としては、長年の友人であるユリゼンがヴェルダナーヴァ達の死からなかなか立ち直れずにいる状態で詐欺紛い契約を迫った（ように感じた）のがお気に召さないようだ。
「というか、見てましたよね!?　私のアトリエ内、どういうやり取りがされてたのか把握してましたよね!?　や～んギィ様のスケベ」
無言でギィはレインの頭頂部に拳を振り落とす。
「ぐおわぁぁぁ!!　割れる、頭が割れるぅぅぅ!!!」
頭を抱えてレインが床の上をのた打ち回る。
「覗き見なんて趣味じゃねぇが、ここは俺の城で、居候のユリゼンは俺の親友だ。たまに頓珍漢なことをやらかすあいつがいきなり切腹してもすぐ止められるように見張るのは義務だろうが」
過去にギィは、ユリゼンが『魔剣リベリオン』を覚醒させる為にＤＭＣシリーズ恒例行事の貫通式（心臓を剣で貫く）をしていたり、『魔剣アラストル』の使い手となる為にやはり貫通式をしていたり、『魔剣ダンテ』を作る為に『魔剣リベリオン』でまた貫通式をしていたり、というような正気を疑う自傷行為を何度も目撃したことがあった。
必要なことだから、と宣い自分の武器で自分の心臓を刺す光景がど

う贔屓目に見ても血迷ってるようにしか見えず、そんな経験があるせいでとにかく心配でギィは少し神経質になっている。
「ですがギィ様。見守り続けるのは構いませんが、このままではいつまで経ってもユリゼン様の為にはなりません。そろそろ動かれてもよろしいのでは？」
ミザリーの進言にギィは悩ましげに唸った。
「……　やっぱそう思うよな」
「お二人がお亡くなりになってからそれなりの月日が経過しました。ユリゼン様も心の整理は大分ついているようにお見受けします。あと一押しすれば完全に立ち直っていただけるかとは思いますが……」
「が？」
「私やレインではその『あと一押し』が思いつきません」
「それは俺もだ」
ギィとミザリーはレインの喧しい呻き声をＢＧＭに顔を見合わせると、揃って溜め息を吐く。
ユリゼンはほぼほぼ立ち直っている。心の傷も大分癒えていた。だがかつての抜き身の刀のような鋭さや覇気といったものが戻ってきていない。原因は、ミリムから両親を守れなかったことについて責められている、という被害妄想。当然ながら実際にそんな事実などない。勝手に罪悪感を持っているだけだ。
二人の死を誰よりも悲しみ、嘆き、その死の元凶に怒り、憎み、呪ったことから分かる通り、ユリゼンは鉄面皮の癖して感情の起伏が激しく、それでいて繊細な部分を持つ。
他に何かしてあげられることがあればいいのだが、と常日頃から考えるギィではあったが、生憎と妙案は浮かばなかった。
「もう少しだけ時間が経つのを待つか」
「畏まりました」
仕方ないと言わんばかりの主の発言に、メイドは文句も挟まず頷く。
結局、ユリゼンが己の力で乗り越えていくしかない。自分達はそれ

まで見守るくらいしかできない。ギィはそう結論付けた後、まだ床に転がり喚いているレインを容赦なく蹴り飛ばした。

不本意ながら相変わらず自堕落で引きこもりのニートな生活を送っていたのだが、それは唐突に終わりを告げる。

「ユリゼン様！　たたた大変、大変です!!　ミリム様が行方不明になりました!!!」

「何だと!?」

いつものように床に転がる粗大ゴミと化していた俺は、慌てた様子でドアを蹴破り入室してきたレインの言葉に飛び起き、彼女の両肩を掴み問い詰めた。

「ミリムが行方不明ってどういうことだ!?」

「配下からの報告で、いつものようにあの村の様子を見に行った時点で既にミリム様が行方不明になっていたとのことです。しかも転移魔法が使用された形跡が発見されまして」

ミリムが何処かに遊びに行く時は、生前のヴェルダナーヴァから与えられたペット兼護衛の精霊竜（エレメンタルドラゴン）と一緒に飛んだり走ったりといった手段を用いる。基本的に転移魔法は使わないと聞いていた。つまり、転移魔法という移動手段は明らかに第三者によるものだと考えられる。

村民は全員ミリムの護衛として派遣されたナスカ王国の騎士団だ。皆手練れの戦士や魔法使いばかり。そんな連中がミリムを見失うというのは、可能性はなくはないが限りなく低い。常に陰ながら彼女を見守っているという話だから。

そしてその第三者とやらが護衛の目を掻い潜りミリムを連れ去ったならば、そいつは卓越した魔法使いである可能性が非常に高い。

「ギィはどうしてる？」

「ミザリーを連れて既に転移魔法が使われた場所に向かいました」
現場検証を兼ねた転移先の捕捉を試みているのだろう。魔法を得意とする悪魔族のギィなら何か分かるかもしれないが、もしあいつでも何も情報を得られないなら最悪だ。俺は半魔の癖して魔法が得意じゃないから完全にお手上げになってしまう。
「俺も行く」
「はい」
数年ぶりに闇魔刀の鯉口を切り抜刀、空間を切り裂き転移する。

「ギィ！」
「ユリゼンか」
村に到着しギィの後ろ姿を発見したので名を呼びながら駆け寄れば、彼は振り向き忌々しそうに眉を歪めた。
「巧妙に隠蔽されてて転移先を捕捉するのに時間が掛かりやがる。魔法に関しちゃ相当の使い手だな、誘拐犯は」
舌打ちしたい気分を無理矢理押さえ、思考を巡らせる。
もし本当に悪意ある者がミリムを狙ったとして、こうもあっさり成し遂げるとなると犯人はかなり絞られてくるのでは？　何せギィは魔法を呼吸のように扱う悪魔族で、その王だ。魔法の実力はこの世界でトップクラス。そんな彼が転移魔法の痕跡から転移先をすぐには辿れない？
「ギィ。お前にそこまで言わせることが可能な魔法の使い手は、この世に何人いる？」
恐らくそんなに多くないはずだ。彼と同じ原初の悪魔と、それと対となる始原の七天使。あとは、あとは、神祖トワイライトの関係者……か？　俺が知る限りではそんくらいしか候補がいない。で、その中から創造神である星王竜ヴェルダナーヴァの力を受け継いだミリムを狙ってた奴となると、一体誰だ？
「……そんなに数は多くねーが、それだけで犯人特定は厳しいぜ」
どいつもこいつも俺は実際に会ったことがなく、ヴェルダナーヴァから話を聞かされただけであるから断定はできないが、誰も彼もが

ヴェルダナーヴァを敬っていたらしい。そんな連中がヴェルダナーヴァの娘であるミリムを狙うか？　創造物の中で最も創造主に近い位置にいた連中が？

あり得ない、とは言い切れないのが怖い。ある意味、ミリムの存在はヴェルダナーヴァが力を失い死んだ原因、と見えるからだ。

「だが、お前の解析が終わるまで手をこまねいてる気はない。容疑者になり得る人物をシラミ潰しに当たってみる」

「ならレインとミザリーを連れて行け。原初の悪魔は当然として、始原の七天使にも多少は顔が利く。案内くらいは役に――」

立つ、とギィが言い終わる直前に、突如凄まじい妖気（オーラ）を感じて総毛立つ。

ヴェルダナーヴァに似ていながら少し違う、だが途方もない力を感じさせる存在感。

「……ギィ、今のは」

「まさかミリムか？」

俺の震えた声、ギィの険しい表情。

状況的にミリムのものとしか考えられない。肌を刺すような妖気（オーラ）から推測するに、彼から受け継いだ竜種としての力が覚醒したに違いない。

俺達二人は顔を見合せ、直ぐ様妖気（オーラ）の発生源に転移する。

転移先は酷い状況だった。

台風のように妖気（オーラ）が渦巻くことで暴風が吹き荒れ、視界に映る建築物でまともな形を残しているものは存在せず全てが瓦礫と化しており、地面は巨大なクレーターだらけ。あちこちで火の手が上がっていて辺りは火の海。まさに地獄を連想させる。

隕石の雨でも降ってきたのかのような惨憺たる有り様に思わず顔を顰めてしまう。

都市――だったものが眼下に広がる空の上で、俺はエアハイクを応用し魔力で構成された力場を作って立つ。ギィは隣で体を魔法で浮かせた状態で周囲を見渡す。

「ここが何処か分かるかユリゼン？」
「闇魔刀で転移ができたから過去に一度来たことがある。位置的には確かエルフの国の、超魔導大国ソーマだ。観光で来た当時は平和でまともな国だったはずだが、随分前に国王が乱心して色々とおかしくなった、という噂を聞いたな」
　国王が乱心云々は引きこもり生活をする前に得た情報だが。
「乱心？」
　気になるワードだったのかギィが目を細める。
「そういや何年か前に配下からの報告で聞いた覚えがある。今まで賢王だったのがある日を境に暴君になったって」
「ああ。別人のような性格になって気に入らない者を即処刑したり、非人道的な人体実験をするようになったとか」
「……　まさかその乱心した国王がミリムを狙って、とかじゃねーだろーな」
「分からんが、あり得ない話じゃない」
　二人で喋っている視界の奥で、目映い閃光と大きな爆音が生まれて空気を震わせ、一瞬遅れて爆風が襲いかかってきた。
「言ってる場合じゃねーな」
「ああ」
　巨大なキノコ雲が出来上がった付近にミリムがいる、そう確信してその場へ急ぐ。

「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、!!」
　涙を溢れさせ狂ったように慟哭し自身の頭を両手で掻き毟るミリムを一目見て、彼女は完全に理性を失っており、更には覚醒した力を制御できず暴走していることが分かる。
「ミリムだけ、か？　ペットの精霊竜（エレメンタルドラゴン）はどうした？」
　首を傾げるギィの疑問に俺は嫌な予感がした。
　ヴェルダナーヴァが死ぬ少し前、つまり彼が自身の力をミリムに継承した後、娘の為にと最後の力を振り絞って生み出し与えた一体の小

さな竜。ミリムのペットであり、護衛であり、唯一の友達だ。
俺もギィも何度か会っており、ミリムのそばを片時も離れようとしないが人懐っこくて穏やかな性格をした竜だったのを覚えている。
そいつがミリムのそばにいないことが、彼女の現状に繋がっているのなら――
「最悪だ」
「ユリゼン？」
今もなお泣き叫びながら、自身の頭や頬、腕や肩を掻き毟り血を流す様から激しい怒りや悲しみ、そして憎悪をひしひしと感じてしまう。
そういった負の感情をトリガーに竜種の力を覚醒させた上で都市を壊滅させたのなら、その際に得た魂で魔王種としても覚醒済みだろう。
だが、彼女は突如目覚めた自身の力を全く制御できていない。力に呑まれ、振り回され、暴走しているのが明らかだ。
どうすればいい？　どうやって彼女を止めればいい？　何をすれば彼女は元に戻る？
そんな思考を遮るように、
「■■■■■■■■!!」
奇しくもミリムと同じ理性があるとは思えない獣の咆哮が響き、瓦礫の山の下から巨大なドラゴンが姿を現す。
「今度は何だ!?」
「次から次へと、一体どうなってやがる！」
体長が百メートルはありそうな、巨大なドラゴン。禍々しい妖気（オーラ）を放つその体躯を用いて周囲の瓦礫を手当たり次第に粉砕し暴れ回る様は最早怪物。破壊の権化と言っても過言ではない様相だが、その見知らぬはずのドラゴンを俺は何故か知っている気がした。
そして俺は唐突に、かつてヴェルダナーヴァから教わったこと――名付けと進化についてを思い出す。
『祝福（ギフト）？』

『そう。名付け親が大量の魂（エネルギー）を得て覚醒魔王に進化すると、魂の系譜に連なる者達にもその恩恵が与えられるんだ』
『なるほど』
『ユリゼンの場合は既に覚醒魔王に進化済みだから、もしキミが名付け親になったらその時点で祝福（ギフト）が与えられるよ』
『懇切丁寧に講義してくれたところ悪いが、俺は配下を持たん主義だ』
『まあ、知識として知っておいても損はないから。ユリゼンにだっていつか配下にしようと思える誰かに出会うかもでしょ？』

「ギィ。あのドラゴンがミリムの精霊竜（エレメンタルドラゴン）である可能性が高い」
「はあ!?　こんな時に笑えねぇ冗談はよせ！　あのチビがこんな化け物になって堪るか！」
「……」
　俺の言に納得いかないのか思わず怒鳴り声を上げてしまうギィだったが、こちらの表情から冗談を言っている訳ではないと察し改めてドラゴンに向き直る。
「……　流石にミリムのチビ竜って考えは間違いだぜ。半魔のお前と違って俺達純粋な悪魔族は魂を見ることが、できる……」
「いや、だったらいい。俺の杞憂で終われば――」
「魂を見ることができる、はずなんだ」
　食い気味にこちらを遮ってきたギィの顔が苦虫を噛み潰したように歪む。
「？」
「あのドラゴン、もうとっくに死んでやがる。魂が見えねー。魂の無い死体が動いてる、そんな状態なんだ。通常ならまずあり得ねーよ」
　は？
　え？　ちょっと待って欲しい。もうとっくに死んでる？　魂が見えない？　魂の無い死体が動いてる？
「ど、ど、どういう、ことだ？　つ、つまりあれは、死霊術（ネクロマンシー）で操られてる、死体と、似たような、状態ということなのか？　扱い的には不死者（アンデッド）と同じだと？」

動揺が隠し切れずどもりながら、ギィ曰く魂が無くて動く死体と化しているらしいドラゴンをプルプル震える右手で指差せば、彼は首肯。

「魂が見えないから、あの化け物はミリムのチビ竜じゃねー、と思う……　たぶん、違うんじゃねーかな……　だったらいいな……　きっと違う、はず、だよな」

後半のほとんどが希望的観測になってるぞおい!?

俺と同じようにギィもかなり動揺しているみたいだ。彼らしくない自信無さげな発言が何よりの証拠である。

しかしこの状況下で、ドラゴンゾンビ（仮称）がミリムと全く無関係でたまたま今この瞬間に出現したとは考え難い。

可能性の一つとして挙げられるのは祝福（ギフト）による影響。

恐らく、精霊竜（エレメンタルドラゴン）は死んだ。

きっとそれを目の当たりにしたミリムがその小さな体に宿る力を覚醒させ、この国を壊滅に追いやった。

それに伴い得た魂で覚醒魔王へと進化。

進化に合わせてミリムの魂の系譜に連なる精霊竜（エレメンタルドラゴン）に祝福（ギフト）が授与されたが、既に死亡し魂を失っていたが故に祝福（ギフト）は正しく授与されず、残った死体に変な影響を与えた。もしくは死んだ精霊竜（エレメンタルドラゴン）に復活して欲しいというミリムの願いが死体に何らかの作用をもたらしたのか。

確証はないもののギィに思ったことを告げてみると、彼は暗い雰囲気を纏った。

「ヴェルダナーヴァが復活しない理由聞いた時もそうだったが、こういう時のユリゼンの考えって核心突いてる気がしてこれっぽっちも否定する気が起きねーよ」

それから深く嘆息した後、切り替えるように暗い雰囲気を引っ込ませて促してくる。

「で、あれをどうする？　ユリゼンは何かいい案あるか？」

顎でクイッと示す先にいるのは暴れ回り破壊を撒き散らす一人の少女とドラゴンゾンビ。

「力ずくで止めるしかないだろうが、元に戻るかは分からん」
「だろうな。俺も同意見だ」
しかもドラゴンゾンビの方は死亡している以上、力を暴走させているミリムと違い元に戻る可能性が絶望的だ。
だからせめてミリムだけでも何とかしなければ。
二人で同時に頷き合うと、行動開始。
俺は真っ先にドラゴンゾンビの目の前に降り立ち、少し遅れてギィがミリムの前に躍り出た。
今にも噛み付いてきそうなドラゴンゾンビの正面で閻魔刀をいつでも抜刀できるように腰を低くし構える。

「■■■■■■■■■■!!」
「がああああああああああ!!」
全く同じタイミングで吼えると、ドラゴンゾンビは俺に、ミリムはギィに襲いかかってきた。

大きく口を開き噛み付き攻撃をしてきたドラゴンゾンビ。
迫ってくる丸太より太さがある巨大な牙――前方に突き出た二本の犬歯の内一本を、閻魔刀を納刀したまま左手に握った鞘で打ち払う。
破砕音と共に犬歯が半ばから砕け、鞘で殴った衝撃でドラゴンゾンビは横にぶっ飛ぶ。その巨体が空中で横に三回転してから一度バウンドし瓦礫の山に突っ込んだ。
「ん？」
思ってたよりも力が入ってたみたいだ。もう少し弱めにしたつもりだったのだが、はて？
そこで思い出す。ヴェルダナーヴァとルシアが亡くなって、そのすぐ後にクリフォトの樹を発生させて以来、これが初めての戦闘なのだ。いつもなら増大した力に体を慣らすことを必ずするのに、今回はそれをせずに白氷宮で数年間ずっと引きこもり生活。力加減を間違

えてしまうのも無理はない。
「気をつけないといかんな」
追撃はせず、瓦礫の山から這い出てくるのを待ちながらギィとミリムの様子を窺えば、七つ揃えれば何でも願いが叶う玉を集める某人気漫画みたいな大迫力のハイスピードバトルを繰り広げている。
あっちの心配をする必要はなさそうだ。
「■■■！」
騒音を立てて瓦礫の下から漸く這い出てきたドラゴンゾンビが威嚇するように唸り、こちらに狙いを定めて口を開き空気を大きく吸い始めた。
次の瞬間放たれたのは竜の吐息（ブレス）。
飛来する破壊の光を前に慌てず騒がず闇魔刀の鯉口を切り抜刀。居合いの斬り上げで竜の吐息（ブレス）そのものを真っ二つにする。破壊の奔流が左右に割れて俺の横を通り過ぎていくが、勢い余った斬撃がドラゴンゾンビの顔を縦一文字に斬り裂く。
「■■■■■!!」
悲鳴を上げ、どす黒い血を噴出させ大きく仰け反り後退すると、ドラゴンゾンビは翼を広げて羽ばたく。
飛ばれると厄介だな。
刀を鞘に納めてからエアトリック。
「落ちろ」
空中でホバリングするドラゴンゾンビの背中に瞬間移動し、抜刀。居合い斬りで両翼を根本から切断。
翼を失い降下していく背中から元の位置へエアトリック。納刀すれば一拍遅れてドラゴンゾンビが落下して盛大な音を伴って粉塵が舞う。
「■■■■■■■■!!!」
これで大人しくなってくれればいいが、という一縷の望みは咆哮により掻き消える。そりゃそうか、もうとっくに死んでて魂が無いんだもん。期待するだけ無駄なんだよな。
こいつはもうミリムのチビ竜じゃない、ただの動く死体、もうどう

することもできない、そんな残酷な現実を突きつけられる。
悲しくなってきたのを無理矢理押し殺し、再度閻魔刀を構えた。
「すぐ楽にしてやる」
閻魔刀の秘奥義『次元斬・絶』で弔おう。そう決意し鯉口を切ろうとした刹那――
「ユリゼン!!!」
切羽詰まったギィの声に振り向けば、ミリムがこちらに突撃してきたことに気づく。
「ちっ」
「あああああああああああああああ!!」
舌打ちしつつ攻撃を中断、防御に変更。振り返りながら鞘でミリムの拳を防ぐ。
衝撃、そして轟音。高エネルギーがぶつかったことによる魔力の爆発が発生。俺が立っている場所とその背後を除いた地面が消し飛ぶ。大地が変な風に抉れて足下が崖か天然の飛び込み台みたいになっていた。
予想以上の凄まじい威力。秘めたる潜在能力に末恐ろしいものを感じる。しかし暴走状態で戦闘経験も浅いミリムの拙い技術では、いなすのは造作もない。
バカ正直に真正面から受け止めるのをやめ、半身となってミリムを横に反らす。
折角分断したのに結果的にミリムとドラゴンゾンビが合流するのを許すが、それは特に気にはならない。
「すまねーユリゼン、いきなりミリムが――」
「ギィを無視して俺の方に来たんだろう。分かってる」
隣に降り立ち宙に浮いたまま臨戦態勢を保つギィの謝罪を不要と断じて遮る。
むしろ気になるのは、ドラゴンゾンビにトドメを刺そうとした瞬間にミリムが反応し邪魔しに来たこと。
理性はぶっ飛んでいるが、魂の系譜に連なる者に関連することには鋭敏に反応する、のか？

となると、下手にドラゴンゾンビを消滅させたりしない方がいいのだろうか。
分からない。とにもかくにもミリムを正気に戻さないとどうにもならない気がする。
……一応、殴って気絶させて目を覚ましたら正気に戻るかどうかを試してみるか。

パーフェクトクイックシルバー！
真・魔人化（シン・デビルトリガー）！
同時発動!!!

「時よ止まれ」
時間が止まった世界で青い魔人となり、ベオウルフを装着して駆け出す。
一瞬で間合いを詰めて左ストレートをミリムの顎に、続いて右ボディブローを鳩尾に、左ハイキックを側頭部に、最後にくるりと横に一回転してから遠心力を乗せた右の踵落としを頭頂部に叩き込む。
バックステップを踏んで元の位置に戻ってから、
「そして時は動き出す」
パーフェクトクイックシルバーを解除。
止まっていた時が動き出し、それによってどしゃりと前のめりに崩れて倒れるミリム。
気絶してくれたか？
「やったか？」
「バカ言うなギィ！　フラグが立つだろうが!!」
「???」
慌てる俺のリアクションに疑問符を浮かべるギィだったが、こいつは自分がとんでもないことをやらかしたことに気づいていない。
そして案の定、ミリムから放出される力が増大する。
クソッタレめ!!!
ゆっくりと立ち上がりこちらを見る彼女の目は、先程とは大きく異

なり虚ろだ。その表情も狂気に染められていたものではなく無表情へと変わっており、やけに不気味に映った。
「っ!!」
ミリムが地を蹴る。その速度は先の一撃よりも格段に速い。
「うお!?」
突き出された左拳への対処として、咄嗟に俺も一歩踏み込み右の拳を相手の左腕に被せるように振り抜く。
俺の右腕とミリムの左腕が芸術的な十字を描き、彼女の左拳のストレートは虚しく空を切るが、俺の右拳のフックは彼女の顔面を正確に打ち抜く。
クロスカウンター。それが綺麗に決まった時、目を灼く閃光が生まれる。ミリムの小さな体はベオウルフが宿す光の魔力による爆発をまともに食らい吹き飛び、ドラゴンゾンビにぶち当たり、それでも勢い止まらずドラゴンゾンビを巻き添えにしながら一人と一匹は大地を深々と抉りながら地平の彼方へと消えていく。
「……あ」
間抜けな声が、俺から漏れた。

「やり過ぎだ馬鹿野郎っ!!!」

当然の如くギィがキレる。
「いや、えっと、その、あんまりにも良いパンチ打ってくるもんだから、つい、反射的に体が動いて、手加減できず……」
「ついじゃねぇだろお前はよぉ!?」
ゴツッ、と俺の額に彼の額が押し付けられた。
「ユリゼンお前、本当にミリムに罪悪感持ってたのか!? 手加減できなかったってことは今の本気か!? 本気の全力でミリムのことぶん殴ったのか!! 変身してベオウルフ装備したお前のパンチがどんだけ破壊力あんのか自覚ねぇのかよ!!」
それを言われると弱い。しかも数年前にクリフォトの樹を発生させてから増大した力を確認したり慣らしたりする作業を一切してい

ない。さっきドラゴンゾンビの牙を鞘で殴り砕いた時に注意しなきゃと思っていたのにこれだ。面目ないし情けないし、何よりミリム本人とヴェルダナーヴァとルシアに申し訳ない。
「……すまん」
「いや、俺も言い過ぎた、すまねー。だが次からは気をつけてくれ」
真摯に謝罪すれば彼も我に返ったように謝ってくる。悪魔族の王なのにちゃんと相手を気遣える、そんな彼に対して俺は本当に良い友人を持ったなと改めて思う。
さてミリムとドラゴンゾンビはどうなった？　と気配を探れば、彼女らしき高エネルギー反応が地平線の向こうからこちらに急速に接近してくるのを感じた。
「ウソ、だろ？　今の食らって、まだ倒れねぇのか！」
戦慄の声を上げるギィには同意するしかない。俺も真・魔人化のままあんぐりと口を半開きにして間抜け面を晒す。だって、それほどのダメージが入ってもおかしくない一撃だったぞ!?
「まさかルドラと同じで、光の力がダメージになってない？」
「なるほど、見た目ほど効いてないってか」
二人で分析してる間にミリムが飛び込んできた。感知した通りミリムだけで、ドラゴンゾンビは置いてきたらしい。
両腕をクロスさせパンチをガードしてる間にギィが彼女の背後に回り込み羽交い締めにする。
「落ち着けミリム！　この、暴れんじゃねぇ!!」
「ギィ、ダメだ。何一つ聞こえていない、言うだけ無駄だ」
「じゃあどうすんだ!?　ミリムが動かなくなるまで殴り続けるのか？
理性が戻るまでこの暴走に付き合うのか！　そんなことしてたらミリムの体が持たねぇぞ!!」
「それは……」
「とにかく今は無駄だと分かってても呼び掛けるしかねぇ!!」
「くっ！」
何もできないという事実に歯噛みする。結局俺達にできることって力ずくで押さえ付けるくらいしかないのか？

亡き友の忘れ形見が、一人の少女が慟哭の声を上げているのに、それを止めることすらできない。
なんて無様なんだろう。
しかし身に付けた力は戦闘に特化しているせいで、それ以外のことにはてんでダメ。
他者の怒りを鎮める、狂気に囚われた者に理性を取り戻させる、暴走状態を抑える、せめてそういう能力を持ってる奴がＤＭＣに存在していたら地獄之王（ザキングオブヘル）で召喚してミリムを元に戻せたかもしれないのに。
……ん？
能力（スキル）？　召喚？
この時、俺の脳内でベオウルフの秘奥義『ヘルオンアース』が爆裂し目映い閃光が生まれる。
そうだ！　こうすれば良かったんだ!!
「ギィ、頼みがある!!」
暴れるミリムを力ずくで押さえ付けるギィが「何だ!?」と聞き返してくれるので告げた。
「ミリムのことは俺が受け持つ、その間にお前には探して欲しい奴がいる！」
「こんな時に一体誰だよ!?」
「他者の怒りを鎮める、精神状態がおかしい者を正気に戻す、暴走状態に陥った者を正常にする、そんな能力（スキル）を持ってる奴を探して連れて来てくれ!!」
俺の意図を察したのか、ミリムを押さえ付けながら少し考えるような沈黙を経て彼は返答する。
「もうそれしかねーな。だがその間ミリムの相手を任せて大丈夫か？」
「もうさっきのようなヘマはしない。もう俺は一切ミリムに攻撃しない。ミリムからの攻撃を受け止め続ける」
視線が交錯して数秒、こちらの覚悟が伝わったのか彼はコクリと頷くとミリムの拘束を解き離れた。

自由の身となったミリムが警戒するようにギィを睨む中、彼は今日初めて見せる彼らしい自信満々の笑みを浮かべる。
「らしくなってきたぜユリゼン……　急いで戻るが、期待はするなよ。そんな能力(スキル)持ってる奴なんて眉唾だからな、何日かかるか分かんねーぞ」
そもそもそんな能力(スキル)が存在するのか、たとえ存在していても所持している者が見つかるのか怪しいところだが、今のままよりは遥かにマシのはずだ。
「面倒な役目を押し付けてすまんな」
「謝るなよ、それはお互い様じゃねーか」
言って、彼は空間転移を用いて姿を消す。
ギィがいなくなったことで、ミリムの警戒と敵意が俺だけに向いたのを確認し、俺は真・魔人化を解除した。何故ならこれから先はなるべく魔力を温存したいが為。
「さあ来いミリム、俺が相手だ」
闇魔刀とベオウルフは使用しないので仕舞う。無手の状態で半身となり、やや腰を落とし重心を低くし、両腕でどんな攻撃が来ても防げるように構える。
これから俺はミリムの全ての攻撃を受け止める。やることはひたすらガードのみ。反撃は絶対にしない。
故に、ＤＭＣにおけるバトルスタイルは一択のみ。
「ロイヤルガード!!」

事件の結末とその後

『ロイヤルガード』。

ＤＭＣシリーズにて『３』以降に登場した、ダンテ専用のバトルスタイル。

それまでのシリーズ、『１』と『２』では敵の攻撃は回避するものというのがゲーム内での常識であり、ＤＭＣにはガードが存在しないとされていた。

しかし、『３』にて初実装されたロイヤルガードはこれまでの常識を覆す。ついにダンテが敵の攻撃を回避するだけでなく防ぐようになったのだ。俺はこれを初めて知った時、やっと『鬼武者』みたいにガードができるようになるのか、と思ったものだがその考えはストロベリーサンデーよりも甘いとすぐに思い知らされる。

ガードはガードでも、敵の攻撃に合わせてタイミング良くガード、所謂ジャストガードじゃないとダメージを食らってしまう仕様だった訳で。

通常のガードが『ブロック』と呼ばれ少しダメージを受けてしまうのに加えて『ブロック』では防ぎ切れない攻撃が存在することと比較し、攻撃をギリギリまで引き付けてタイミングを合わせてのガードが『ロイヤルブロック』といってノーダメージかつ全ての攻撃を完全に防ぎ切ることができる、という差があるのだ。

回避と移動に特化したスタイルの『トリックスター』、近接武器による多彩な技を駆使するスタイルの『ソードマスター』、銃器等の遠距離攻撃武器に特化したスタイルの『ガンスリンガー』とは異なり、ロイヤルガードは明らかに玄人向けのスタイルだったのだ。他三つが初心者でも○ボタンをポチポチ押してればそれなりに使いこなせるのに、防御とカウンターが売りのロイヤルガードだけロイヤルブロックに失敗するとダメージ受けるとかそりゃないよ、というのが『３』で初めてロイヤルガードでプレイしてみた時の感想だった。

一応、ジャンプやサイドロールなどの回避行動に存在する無敵時間を利用するとロイヤルブロックになるというテクニックがあったが。

『5』になって仕様が少し変わり、通常のブロックでも魔力ゲージが残ってたら魔力を消費する代わりにダメージを受けずに済む、となったことで敷居が下がりそれ以前のシリーズよりは使い易くなったものの、やはりガチ勢のように使いこなすには、ロイヤルブロックを成功させ続けるには練習、練習、また練習な感じであることには変わりない。

まあ、使いこなすことができれば無茶苦茶強いスタイルではあった。何せ、ロイヤルブロックが成功すれば敵のありとあらゆる攻撃を完全にノーダメージで防ぐことができるし、魔力は回復するし、スタイリッシュランクは上がるし、ガードする際に蓄積されたエネルギー『ロイヤルゲージ』を最大まで溜めてぶっ放すだけでボス敵ですらHPが面白いくらいに溶ける。敵の攻撃を華麗に防いでカウンターでスタイリッシュに決める、他のスタイルにはない魅力があったのだ。

で、ゲーム内のことをつらつら述べた上で現在の俺がどうなってるのかというと――

「ぐっ！」

両腕のガードの隙間から入り込んだミリムの拳が頬に刺さる。鋭い痛みを伴って口の中が切れたのか血の味が広がった。紛うことなきブロック失敗に舌打ちしたい気分になる。

次のボディ狙いのストレートは両腕でがっちり防ぐ。防御成功ということでロイヤルブロックが成立し、体は勿論、パンチを防いだ腕にすら痛みもダメージもない。少しではあるが魔力もしっかり回復した。

更なる追撃にやって来たのはアッパーカット。これは顎と拳の間に片方の掌を割り込ませることはできたものの、完全に防ぎ切ったとは言えず大きく吹き飛び後退してしまう。魔力の消費を代償にダメージ軽減が働き、顎に若干の鈍い痛みが走る。ブロックは成功だがロイヤルブロックにはならず。ブロック失敗よりは遥かにマシな結果なので贅沢は言ってられない。

と、現状はこんな感じである。

簡潔にまとめると、

誰の目から見てもガード失敗
←
通常通りダメージを負う
一応ガードはできたが完全に防ぎ切れたとは言えない
←
ブロック成功、魔力を代償にダメージ軽減、ガードしたことで『ロイヤルゲージ』がチャージされる
誰がどう見ても完全に防ぎ切った
←
ロイヤルブロック成功、完全にノーダメージ、魔力が少し回復、通常のブロックよりも多くの『ロイヤルゲージ』がチャージされる

というような三段階になっていた。
ゲームの仕様をリアルに落とし込んだことを鑑みれば、ロイヤルガードはドッペルゲンガーや幻影剣に比べて使いこなす難易度が高くなったと感じる。
例えばドッペルゲンガーはゲームにおいてあくまでプレイヤーのボタン入力に従っているだけだが、この世界では『もう一人の自分』としてその場の状況に応じて臨機応変に行動してくれたり、細かく指示をしなくても勝手に動いてくれる。しかも感覚も共有してるし遠隔操作も可能。はっきり言って滅茶苦茶使い勝手が良くなっている能力の代表格だ。
幻影剣もゲーム内とは全く異なる動きや操作、運用が可能だから牽制や攻撃としてのバリエーションは豊富だ。瞬間移動の基点としても使えるし、大量の幻影剣で壁を作り盾として防御に使うなんてこともできる。
しかしロイヤルガードはそれらとは違う。ゲーム内ではボタンを押すだけで成立していた事柄だが、ロイヤルガードは両腕でガードするのが前提条件となる能力だからだと思う。
また、ゲーム内ではジャンプやサイドロールといった回避行動に存

在していた無敵時間など当然のように無い。無いったら無い。無敵時間なんて甘えだと言わんばかりに存在しない。無敵時間を利用してロイヤルブロックを成功させるテクニックなんて当然ながら成立しない。

そしてジャストガードも意味はない。散々試したが意味はなかった。そもそもアクションゲームや格闘ゲームのジャストガードって現実的に有効か？　棒立ちの状態で攻撃を待って、ギリギリ当たりそうになったら咄嗟にガードしても体勢崩すだけだろ常識的に考えて、と。パリィならそれでいいかもしれないが、ロイヤルガードはガードなのだ。パリィとは違う。

結論。ゲーム内とは違うからガードは余裕を持ってしよう。ちゃんと防げたらロイヤルブロック成功するよ、ということである。

「ふぅ」

疲れたように――いや、実際疲れた――息を吐いてからトリックダウン。後方に向かって大きく距離を離すように瞬間移動し間合いを取る。

……　それにしてもガードがムズい。

ミリムは体が小さいことに比例してリーチも短い。その為、懐に入られるとパンチの連打がやたらめったら速い。しかも体格差をものともしないパワーがある。一発一発がめっさ重いのにそれらがオラオララッシュで飛んでくるから、どうしても防ぎ切れないのが出てきてしまう。

ギィが誰か連れて来てくれるまで持てばいいけど。

間合いが離れたことでミリムが大きく仰け反りながら息を吸う。竜の吐息（ブレス）の前兆だ。

『アルティメット』

片手を前面に翳し白く淡く光る魔法陣を張る。見た目は防御魔法っぽいが魔法ではない。これもロイヤルガードの技の一つ。『3』のみに実装されていた『アルティメット』という技で、両腕を用いて行うブロックとは異なり魔法陣で防御する技。前方からの敵の攻撃を防ぐと同時に、防いだ攻撃のエネルギーを少しだけ体力回復に還元

できる優れもの。残念なことに実装されたのは『3』のみでそれ以降のシリーズでは使えない。
山すら軽く消し飛ぶ威力の破壊光線をアルティメットで受け、体力を回復しつつ次の準備をしておく。
破壊光線が終わったらすかさず次の技を発動。
「『ドレッドノート』」
ロイヤルゲージを全て注いで魔力の鎧を生成、全身に纏う。見た目は完全に敵役や悪役な感じの、全身鎧（フルプレートアーマー）を身に付けた暗黒騎士みたいな姿になる。暗黒騎士っつーか、なんとなくネロ・アンジェロっぽい。
『ドレッドノート』は『4』にのみ実装されたロイヤルガードの技の一つ。敵の攻撃を無効化する鎧を一定時間纏う技である。
が、ロイヤルゲージを消費して展開するにしては効果時間が短い、鎧を纏うまで隙だらけ、鎧を展開中は走れないので移動に制限がかかる、そもそもロイヤルゲージは『リリース』に使う、でも見た目は少しカッコいい、ということでシリーズファンからは全く使われないネタ技扱いされていた。
しかし今の俺にとっては違う。そもそも反撃しないのでロイヤルゲージを使わない。つまり『リリース』や『リヴェンジ』などのロイヤルゲージを消費して放つカウンター攻撃は封印。ロイヤルゲージをドレッドノートに回せば、効果時間が多少短くても俺にとっては戦闘中でありながら一息つくことが可能になる。そしてミリムの攻撃を受け止め続ける為、必要以上にその場から動かない。
要するにかつて散々ネタ技扱いされていたドレッドノートが今、日の目を見ているのだ。
「ウウウガアアアアアアアアアア!!!」
ドレッドノート越しにミリムが乱打してくるが、痛くも痒くもない。効果時間が切れるまでの間、目を閉じて首や肩を回したり体を伸ばしてストレッチをするなどのリラックスを図る。
効果が切れた瞬間にミリムの攻撃をガード。ロイヤルブロックを狙う。

ロイヤルゲージが溜まるまでガードし続けて、溜まったらトリックダウンで後退、距離を開けて遠距離攻撃を誘う。ミリムが即行動しない場合は、「遊んでやろう」と指先で小さな幻影剣を生成しくるくる回してから握り砕く挑発をして煽る。
竜の吐息（ブレス）をアルティメットで防ぎつつ回復。それが終わればドレッドノートで少しだけ休憩。
そしてまた攻撃を防ぎつつロイヤルゲージを溜める。
パターンができあがってきた。
あとはギィがミリムの暴走を鎮められる人物を連れて来てくれるのを待つだけ。

一日が終わった。ギィはまだ来ない。
途中で、ロイヤルブロックを成功させれば魔力は回復するんだから、真・魔人化（シン・デビルトリガー）の状態でパワーとスピード、その他知覚能力などを底上げしてロイヤルブロックを確実に成功させ続ければいいんじゃね？　と思いついたのでずっと真・魔人化（シン・デビルトリガー）を発動させたままだ。
この状態なら、完全なる悪魔の肉体を維持するなら人間状態の生理現象とは切り離される為、空腹や睡眠欲、尿意や便意を気にする必要がなくなる。
早くギィ来ないかな、と親友に思いを馳せつつロイヤルブロックを成功させる。

二日が経過。ギィはまだ来ない。
ドレッドノートを展開している間、魔力の鎧が剥がれるまでの僅かな時間に真・魔人化（シン・デビルトリガー）を解除し眠るという特技を覚えた。数秒間だけだが眠れるというのはデカイ。
たまに眠り続けてしまったせいで文字通り殴り起こされることもあるが、即真・魔人化（シン・デビルトリガー）で傷が治るので問題ない。アルティメットでの回復もあるし。

ギィよ早く来てくれと願いながら、ドレッドノートを発動させて寝る。

三日が経過。ギィはまだ来ない。
そしてミリムの暴走に収まる兆しもなければスタミナ切れを起こす様子もない。相変わらず狂ったように咆哮しながら殴りかかってくるのは最初から変わらない。
ギィはいつになったら戻ってくるのだろうかと考えつつ、竜の吐息（ブレス）をアルティメットで防ぐ。

四日が経過。ギィはまだ来ない。
この時点で意識しなくても体が勝手に動いてロイヤルブロックを成功させてくれる。
……なんだか、極致に辿り着いた気がする。
これが、ロイヤルガードを極めた者が見る風景！
己の成長に感動しながら、ミリムの攻撃をロイヤルブロックする。

五日が経過。ギィはまだ来ない。
やはりそんな都合のいい能力（スキル）を所持している者などいないのだろうか。
もし見つからなかったらどうすればいいのだろうか？
他の対策を考えるが良策は浮かばない。それでも思考を止める訳にはいかない。
悶々と思考に耽りながら、指先で小さな幻影剣をくるくる回してミリムを挑発する。

六日が経過。

ついにギィがきtらあああああああ!!!
彼の隣には、金髪の見知らぬ女が一人。
誰よその女!?
後で聞いた話によると、精霊女王のラミリスとかいうらしい。
その後、ラミリスの活躍により、暴走状態に陥っていたミリムは力尽きたように動かなくなり、寝入ってしまった。
「……やっと終わったか」
眠るミリムを横抱きにする俺は、真・魔人化（シン・デビルトリガー）を解除し、これまでの心労を吐き出すように大きな溜め息をつく。そんな俺にギィが近寄ってきた。
「待たせちまったな、ユリゼン」
「ああ……疲れた」
「だろうな」
ギィが苦笑する。
「帰ろうぜ」
「ああ」
彼の労うような口調で言われた提案に断る理由はなかった。

「今後のミリムについてだが……余は、ユリゼンに託したいと思う」
「奇遇だな。俺もそう思ってたところだ」
「きっとミリムには、人と竜種の間に生まれたあの子には、ユリゼンのような先達が必要なのだ」
「何の因果か、あいつも半人半魔（ハーフ）だからな」
「ユリゼンなら何も違えることなくあの子を導いてくれるはず。力の使い方も、人としての生き方も、人ならざる者としての生き方も」
「そっち（人間側）に行ったりこっち（魔物側）に来たりで忙しい奴だが、ミリムにもそう

いう生き方が合ってるのかも、ってのは同意だぜ」
「少なくとも余の庇護下にいるよりは遥かにいい」
「……　あまり自分を責めるなよ」
「無茶を言うな。余は、俺は、あの子に何もしなかった。狭い箱庭に押し込めて、それだけだった。あの二人の大切な忘れ形見だったのに!!」
「何もしなかったのは俺達も同じだ。大なり小なりユリゼンのように、いつか二人を守れなかったことを責められるのが怖くて、そばにいなかった」
「それでも俺は、もっと何かするべきだったんだ！　血の繋がった姪なんだぞ!?　家族なんだぞ!!」
「お前のそばにいると二人みたいになるかもしれないから、あえて遠くに、離れた場所に置いたんだろうが!!」
「それがこの結果だ！　この様だ！　あの子から両親だけでなく、友すら奪ってしまった!!」
「……」
「……」
「……」
「……　取り乱した……　すまない」
「謝るなよ」
「ユリゼンには、負担をかけてしまってすまない、姪を頼むと伝えておいてくれ」
「もう帰るのか？　せめてユリゼンが起きるまでいろよ。たぶん、もうすぐ起きてくる。数年振りだろ」
「やめておく」
「なんで？」
「あいつが寝ているのはレインのアトリエだろう？　そこに行ったら思い出してしまうからな」
「……」
「二人が生きていた、楽しかったあの日々を」
「……　そう、か」

「さらばだ。次会う時は、余が勝負に勝った時だ」
「抜かせ、勝つのは俺だ……　あばよ」

目が覚めると、視界いっぱいに逆さまのレインの顔があった。
「……　なんだか知らんが、近い」
「失礼しました」
澄まし顔でレインはそう言うと、吐息がかかりそうな距離にあった顔が離れていく。
そこで漸く気づいた。
「何故俺に膝枕？」
「頑張ったご褒美です」
しれっと宣うレインの言葉がどういう意味なのか考えながら、状況把握と寝る直前の状態を思い出すことに努める。
確か、眠ったミリムを抱えて白氷宮に帰ってきて、ミリムをミザリーとレインに預けてから風呂に入って飯食って、いつもの寝床であるレインのアトリエで寝袋に潜り込んで寝たんだっけ。
それはそれでいいとして、じゃあなんで寝ていた俺にレインは膝枕してんの？
メイド服のままペタンと女の子座りし、その太ももの上に俺の後頭部が載っけられていた。
伝わってくる体温と柔らかい太ももの感触が心地いいし、なんか良い匂いもする。幸せな気分になってきた。ずっとこのままでいたい。許されるならこの状況下でもう一眠りしたいとう欲望に駆られる。
そんな心境などが悟られないように努めて表情を変化させずに冷静を装って問う。
「俺が寝ていた間に何がどうなったのか教えてくれ」
「畏まりました」

コクリと頷きレインは語り出す。

レインが言うには、俺は丸々二日間も眠っていたとか。

その間の出来事としてまず挙げられるのが、俺が寝てから一日経過したタイミングでミリムが意識を取り戻す。

目を覚ました彼女は、自身を取り囲む見慣れぬ面々に警戒しつつ、ペットの精霊竜（エレメンタルドラゴン）の安否をまず最初に気にした。

それまでドラゴンゾンビと化した精霊竜（エレメンタルドラゴン）のことをすっかり忘れていたギィ達は、寝ている俺を放置しミリムを引き連れ慌てて白氷宮から転移。ちなみに精霊女王のラミリスもミリムの暴走を止める為に力を消耗してしまい、俺と同様に白氷宮の客室で今も寝ているらしい。

で、精霊竜（エレメンタルドラゴン）はどうしていたかというと、これが暴れに暴れ回っていたようだ。魂が消えてしまい理性も知性も肉体の制御も失い暴走状態に陥っていたことに変わりはなかった。

ミリムの呼び声にもろくに反応を示さない。ただひたすら目の前に映るものに攻撃を加える破壊の権化となったまま。なお数日間でいつの間にか混沌竜（カオスドラゴン）と人間やエルフからは呼ばれるようになっていたらしい。

何をしてもダメだと、もう友はいないという残酷な事実を突きつけられたミリムは、涙ながらに混沌竜（カオスドラゴン）を封印した。

そして封印が終わって帰ってきたのが昨晩だとか。

「それで、ミリムは？」

「昨晩戻ってきて以降、客室にいます。今は一人にして欲しい、と」

一晩中泣いていたのだろうか。

「……」

レインの膝枕の時間が終わってしまうのは非常に残念だが……

いや、ホント、マジでこんな心地よくて幸せなポジションから移動しなければいけないなんて悲しいにも程があるしとてつもなく名残惜

しいが、今はミリムの所に行かなければならない気がした。
「ミリムがいる部屋まで案内してくれ」
「畏まりました」
「……」
「……」
「……」
「……　あの、ユリゼン様？」
「どうした？」
「どいていただかないと、その、ご案内が……」
「!?」
う……　動けんッ！　ば……　バカな、ま……　全く体が動かん!?
新手のスタンド使いから未知のスタンド攻撃を受けているのか!?
結局、俺はレインの膝枕からどくのに三十分を要した。

「ひっく、ひっく……」
レインに案内された部屋のドアにノックをしたが反応がないので、ゆっくりドアを開けてみれば女の子の啜り泣く声が聞こえてくる。
一瞬怯んだものの、ドアの前で彫像になっててもいると自身を奮い立て部屋に踏み込む。
室内はギィが来客用にと配下に用意させただけあって高級というか豪奢な作りになっており、何から何まで高級感が凄い。初めて見せてもらった時も思ったけど相変わらず何処ぞの王族の部屋みたいである。
根っこの部分が庶民な俺としては正直落ち着かない。家具や調度品を何かの拍子に壊しそうで怖い。やはり白氷宮で寝泊まりさせてもらうならレインのアトリエの床に寝袋を敷く、これ一択だな。昔はよくこういう客室を使わせてもらってたが、比較するとレインのアトリエの方がよく眠れたと思う。城主のギィには本当に申し訳ないことではあるのだが。
「うう、うぅぅう」

広い部屋の奥に設置された天蓋付きベッドに、うつ伏せで枕に顔を埋めて呻き続ける少女が一人。
ミリム・ナーヴァ。友の大切な一人娘。
緊張しながら近づき、彼女に背を向けるようにしてベッドに腰掛ける。
俺の存在に気づいているようだが無視しているかのように反応なし。しくしく泣くのが止まらない。
参ったな。どう声をかけるべきなのか。
早くも八方塞がりになって困ったその時、かつての友の言葉が脳裏に甦る。

『この子の名前はミリム。ミリム・ナーヴァ。よろしく頼むよ、ユリゼン』

あれはミリムが生まれてすぐの頃だったな。当時のヴェルダナーヴァとルシアの幸せそうな表情を思い出して、覚悟が決まった。
「俺はユリゼンだ。よろしくな、ミリム」
あの時と同じように自己紹介。反応はないが気にせず続ける。
「お前の両親が死んだ時、俺も今のお前と同じように部屋に引きこもって毎日泣いていた」
ピクリとミリムが反応したが気がつかない振りをした。
「大切な友人だった。一緒にバカ騒ぎするのが楽しかった。死んでしまうなんて思ってもなかったから、この先ずっと一緒だと、ずっと楽しい日々が続くと思っていた」
昔を思い出しながら語る。
「だから、二人が死んでしまったことがあんまりにもショックで、数年間部屋から出ずに引きこもっていた……　つい最近までな」
「知っている」
返答があるとは予想していなかったので驚き肩越しに振り返れば、顔を上げ目元を赤く腫らしたミリムが言う。
「昨日ギィから聞いたのだ。私の両親が死んでからずっと部屋に閉じ

こもってたユリゼンが、私が行方不明と聞いて飛び出したと」
あいつ、余計なこと言わんでいいのに。
「それから、ユリゼンが暴走していた私を止めてくれたというのも」
「少し違うな。俺はギィがラミリスという精霊女王を連れて来るまでミリムを押さえていただけで、実際にミリムを止めたのはラミリスだ」
「それでも私がユリゼンに迷惑をかけたことには変わらぬし、感謝するべきだということを分かっているのだ」
うつ伏せから起きてベッドの上に女の子座りになると、ミリムはペコリと頭を下げた。
「すまなかった。そして、ありがとうなのだ」
俺は自身の目が大きく見開くのを自覚する。
幼い見た目に反して、恐ろしいくらいに理知的で聡明な子だ。
「謝るな……お前が謝る必要は、ないんだ」
声の震えを抑えることができただろうか。
謝るのは俺だ、俺達の方だ。ヴェルダナーヴァが力を失うと分かっていたのに、守れたはずなのに二人を死なせてしまった。何故両親を守ってくれなかったのかと責められてもおかしくないはずなのに。
真剣な眼差しでこちらを見つめるミリムに、ヴェルダナーヴァとルシアの面影を見た。
涙が溢れるのを止められない。
「ユリゼン!? 急にどうしたのだ!? お腹が痛いのか? それともお腹が空いたのか?」
俺が突然泣き出したのでミリムが慌てふためく。バタバタと両腕を上下に振りオロオロする。
そんな彼女に対し、俺は泣きながら「すまない、すまない」と謝ることしかできなかった。

その後、ある程度落ち着いてから語る。
自分のこと、自分は一体誰で、どういう存在なのか。
ミリムの両親であるヴェルダナーヴァとルシアとは友人関係で

あったこと。
なお、二人が死んでしまった件について改めて謝罪したのだが、ミリムはあまり気にした感じはなくこう言った。
「両親のことは別に気にするな。物心ついた頃には精霊竜（エレメンタルドラゴン）がそばにいてくれたから寂しくなかったのだ。それよりも、私が生まれる前のことをもっと聞かせて欲しいぞ」
そう言われてしまえば俺はそれ以上の謝罪はやめることにし、冒険者としての生活から始まり、ギィやヴェルダナーヴァとの出会い、彼らとの交流、ルドラという勇者の誕生、ヴェルダナーヴァとルシアの恋の話などを話す。
ベッドの上で向かい合って座り、時間を忘れて語り合う。
ミリムが笑ってくれるのが嬉しくて、俺も語りに熱が入る。
そしていつの間にか、俺は心から笑えていたことに気づく。
それは二人が死んで以来、初めてのものだった。

「私も冒険者になるのだ!!」
客室から玉座の間に移動したかと思えばこう宣言するミリムを見て、ギィはニヤリと笑う。
「いいんじゃねーか。元々ミリムはユリゼンに託すつもりだったし。反対する奴なんていねーよ。ミリムの好きにしろ」
ギィの言葉にレインやミザリーは当然として、ヴェルザードまでが同意するようにコクコク頷いた。
その反応を見て小さくガッツポーズをして「やった！」と喜ぶミリムの横で、俺は首を傾げる。
「元々俺に託すつもりだったのか？」
「ユリゼンが起きてくる少し前までルドラと話してな。俺もあいつもハーフのお前に同じハーフのミリムを任せた方が色々と上手くいくんじゃねーか、って考えてたんだ」
ルドラが？　あいつ、来てたなら顔見せればいいのに。
「ルドラからの伝言だぜ。『負担をかけてしまってすまない、姪を頼

む』ってな」
「……　そうか」
　あいつも以前の俺と同じようにきっとミリムに会うのが気まずいのかもしれない。
「ユリゼン、早く行って冒険者登録とやらをするのだ!!」
　どうやらミリムはせっかちのようだ。辛抱堪らん早く早くとこちらを急かす。子どもらしいと言えばらしいが、恐らくは今後のことについて前向きに生きようとしているに違いない。
　もしくは、精霊竜（エレメンタルドラゴン）のことを忘れようとしているのか。
　どちらにせよ、俺にできることをできる範囲でやろう。
　と、その時である。闖入者が現れたのは。
「話は聞かせてもらったわ！　面白そうなことしようとしてるじゃない！　アタシも混ぜなさいよ!!」
　その人物は、俺とミリムの妖気（オーラ）に当てられて精霊女王から妖精へと零落し、掌サイズのちんちくりんになってしまったラミリスだった。

「……　あの様子なら大丈夫そうだな。ミリムも、ユリゼンも」
　肩の荷が下りたと言わんばかりに安堵の溜め息を吐くギィ。
「悲しい事件が起きてしまいましたが、最後にお二人の笑顔が見れて本当に良かったです」
　ギィの背後に控えるミザリーが優しく微笑む。
　そのそばで唇を尖らせ少し寂しげに文句を垂れるのはレインだ。
「まだユリゼン様から対価をいただいていないのに行っちゃいました」
「そうね。レインはまだまだユリゼン様のお世話がしたかったのよね」
「んなっ!?　ちが、違いますぅぅ！　まだお礼とか報酬とかユリゼン

様から色々ともらうべきものがあるんですぅぅ!!」
「それで？　眠れる王子様にお目覚めのキスはしたの？」
「ファアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」
ミザリーからの指摘を受けて激しく動揺するレインは、ヴェルザードから更なる追撃が入り絶叫する。
(したのか？)
(したのかしら？)
(したのよね？)
ギイ、ヴェルザード、ミザリーが生温かい視線を送るものの、彼女は一切白状しようとしない。
真実を知るのは、当のレインだけである。

ミリムを引き取って、数年の月日が流れ——

「今日は焼き肉、の前に！　ゴミ掃除なのだ!!」
今回の討伐対象となる盗賊団を前にしてミリムは獰猛な笑みを浮かべると、背負っていた大剣『レッドクイーン』を手にして切っ先を地面に突き立て、そのまま握った柄をバイクのスロットルのように何度も捻る。
捻る度に車のエンジンを吹かしたような大きな音が立つと同時に剣の排気口から激しい炎が吹く。
そんな様子のミリムを見て、盗賊団は見ていて可哀想になるくらいに動揺する。

「ピ、ピンク髪のガキ、異音を放って火を吹く剣……　こいつ、『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ（デビルメイクライ）』の『ミリム』だ!!」
「冒険者パーティーの中でも最凶最悪の、その名の通り悪魔も泣き出す処刑人で有名な、あの!?」
「ほお？　無辜の民から略奪するしか能がない掃き溜めのクズ共が私と私のパーティーのことを知ってるとは随分有名になったのだ、な！」
　言い終わるや否や爆速で踏み込んだミリムが横に回転しつつ、火炎を撒き散らしながら剣を振り回す。
　先頭に立っていた三人の盗賊は一切反応できずその首を飛ばされる。
　噴水のような出血はない、血の雨は降らない。切断面が真っ黒に炭化しているからだ。
「クソ、怯むな相手は一人でしかもガキだ!!」
「そそそうだ！　パーティーリーダーの『首狩り剣士』はいねぇ!!」
「囲んでボコれ！」
　ヤケクソになったとしか思えない連中が各々の武器を手にして吶喊してくるが、ミリムは不敵に笑い応戦。
　火を吹く剣で相手の武器ごと、防具ごと力任せに叩き斬る。一振りで三人から四人を纏めて吹き飛ばす。子どものような見た目からは想像がつかぬ豪腕を披露する彼女に、盗賊達は悪夢を見ているような気分になった。
「ひぃぃぃ!?」
「ダメだ逃げろ!!」
「逃がさん」
　こちらに無防備な背中を晒し逃走を図る盗賊達に対し、腰のホルスターから抜いた大口径の銃――二つの銃砲身を持つリボルバー『ブルーローズ』で狙いを付け、容赦なく引き金を引く。
　銃口炎（マズルフラッシュ）と腹に響く重低音が発生し、一度の発砲で二発の弾丸が発射され盗賊達の体にそれぞれ拳大の風穴を二つずつ空ける。
「残っているのはお前だけ……　筋肉モリモリマッチョマンのハゲ

た髭、ギルバと事前に調べた特徴と一致する……　お前が盗賊団の頭目で間違いないな？」
　レッドクイーンを一振りして炎を消してから背に戻し、ブルーローズを排莢してからくるくる回してホルスターにインしつつギロリと睨む視線の先では、完全に戦意喪失して泣きべそをかく筋肉モリモリマッチョマンのハゲた髭が尻餅をついていた。
「……　ゆ、許し、許して、命だけは、お助けを、――」
「許しを乞うなら、あの世でお前達が殺した人達にするのだ!!」
　ミリムの背中に魔力で構成された一対の翼腕が顕れ、その翼腕が凄まじい速さで男まで伸びてその体をがっちり掴まえると、伸びた速度と同じ速さで縮んで引き寄せ、
「Ｊａｃｋｐｏｔ!!」
　男の背後から両腕を回して腰をクラッチし、そのまま後方へと反り投げ地面に叩きつける――ジャーマンスープレックスが綺麗に決まり、男は永遠に沈黙はした。
「……　悪は滅びた」
　フッ、と最後にカッコつけた感じで戦いの余韻に浸っていると上空から一羽の猛禽が下りてきて話しかけてくる。
「おいおいミリムの嬢ちゃんよぉ、悪を滅ぼすのはいいことだけどな、照合に必要な盗賊団のリーダーの頭をジャムにしちまったら後でウチの保護者がうっせぇぞ。どうすんだこれ？」
「げっ!?　しまったのだ!!」
　喋る鳥――『グリフォン』に指摘されて初めてミリムは慌て始めた。
「どどどどうすればいい!?　グリフォンが上から落として殺したことにしていいか？」
「お前さんが見事なプロレス技かまして首から上をミンチにしたんだろうが!!　見ろよこの首無し死体を、頭部が消し飛んでるから修復もできやしねぇ。死体処理班も真っ青な惨劇生み出しといて何いきなり責任押し付けてんだふざけんな!!」
「だってこれ私のやらかしだとギルバにバレたら今日のオヤツが無しになるのは確定なのだぁ～」

「そもそもなんで最後に残したリーダーにジャーマンスープレックス決めたんだよ、やるなら他のモブでいいだろ。よりにもよって一番首が必要な奴の首紛失して、首要らねぇ雑魚はみんな揃いも揃って首揃ってやがる事態に俺様ビックリだぜ」
　死屍累々の惨憺たる有り様の中、少女と鳥が喧しく喚き合う。
「もうこの際だから適当な髭生えてる奴の頭を丸ハゲにしてお茶濁せばいいんじゃね？」
「そんなことしていいのか？」
「ミリムの嬢ちゃんよぉ、こんな言葉を知ってるか？　バレなきゃ犯罪じゃねーんだよ」
「まるで契約を迫る悪魔の台詞みたいな危険な誘惑に満ちた言葉なのだ」
「だろう？　悪魔だからな！　じゃ、ちゃっちゃと替え玉作戦いくか♪　別行動中のあいつらが戻って来る前にやっちまえ。猫ちゃんはこういうの黙っててくれるがラミリスのちんちくりんはすぐ食い物に釣られてゲロるから信用なんねぇし。ギルバに見つかって大目玉食らいたくなけりゃ急げよ」
「分かったのだグリフォン、早速リーダーみたいな汚い髭面探すのだ」
「ところでどうやってハゲにする？　時間かかるが普通にナイフで剃る？　それとも俺が頭バーベキューにして毛ぇ全部チリチリにするか？」
「お前がやると首が黒焦げに炭化したゴミになるから却下なのだ。面倒だが私がナイフで剃る」
「そうなると問題は時間だな。お前さんだと力加減間違えて猟奇殺人事件の惨殺死体になる可能性が高いし。ジャガ芋の皮剥きが失敗した時みてぇに凸凹し過ぎて元が人間の頭部だとは思えない、とかならないように気をつけろよ」
「つべこべ言わずにまずは髭生やした首を探すのだ！　早くしないとギルバが戻って――」
「俺が何だって？」
「あ、……」

予想よりも早いギルバの登場に、ミリムとグリフォンはまるで時間が止まったように動かなくなる。

今回の盗賊団の討伐は二手に分かれて行う予定だった。
ミリムは盗賊団が襲撃予定の村近辺で索敵と迎撃、俺は盗賊団のアジトの捜索し見つけ次第突入。
盗賊団は総数の内七割が村への襲撃に参加、残りの三割がアジトで留守番という感じであり、リーダーは村襲撃に参加していた。
盗賊団は一人の漏れなく冒険者パーティー『Ｄｅｖｉｌ（悪魔）Ｍａｙ（泣き）Ｃｒｙ（出す）』によって処刑されたのだが、一点よろしくないこととして盗賊団のリーダーの男の首が無い。照合に必要な首が、である。これだと依頼完了の手続きがスムーズにいかないし（俺基準）、男には賞金も懸けられていたのでなおのこと首が無いのはいただけない。ちなみに首から下、つまり首無し死体ならそこら辺の地面に転がっている。
「やらかしてしまったことには何も言わん。誰だってミスをするし、俺だって完璧ではない。だが、やらかしてしまったことを誤魔化そうとするな、正直に言え、そして謝ってくれればいい」
「……分かったのだ、すまなかった」
「そんな怒んなよギルバちゃんよぉ、ミリムの嬢ちゃんだって精一杯やったんだから」
「そもそもお前がミリムを唆したんだろうがこの鳥頭！　余計なことをミリムに吹き込むな、フライドチキンにされたいのか!?　いいかミリム、こいつの言うことは話し半分に聞いておけ」
「世の中には抜け道があるってのを知っておくべきだと思ってよ、へへへ、ワリーワリー」
完全なる不正だろうが。信用問題に関わるようなリスクある行為はマジでやめて欲しい。
殊勝な態度で反省の色が見えるミリムとは対照的に、鳥頭の方は全く悪びれた風もなく笑うのみ……　うーん、カリッとした香ばしい

フライドチキンにしてやりたい。
『グリフォン』。俺の能力『地獄之王(ザ・キングオブヘル)』で大量のレッドオーブと引き換えに召喚した、鳥の姿をした上級悪魔の一体。今回の盗賊団討伐にはミリムのサポートとして索敵を担当していた。
元々はＤＭＣの『１』にて敵として初登場、『５』で味方として再登場を果たしたキャラクターだ。『２』？　あれは体の一部がアルゴサクスの一部として登場しただけだし。
『１』では巨大な猛禽類の体に大小様々な大きさの鳥の頭を持つ、雷を操る悪魔。魔帝ムンドゥスの腹心という立場でダンテと敵対していた為威厳溢れる口調と性格でいかにも長い年月を生きた悪魔って感じだったが、『５』で再登場した際はサイズダウンし実在する大きめの猛禽類くらいのサイズで、何より性格と口調が激変しておりやたらとテンション高めのおしゃべり野郎になっていた。しかもなんか妙にフレンドリーというか馴れ馴れしい。シリーズファンからは、『１』の時の性格はあくまで仕事上及び立場上的なもので、『５』の性格が実は素なのでは？　と言われてたり。
で、こいつを召喚した理由は、精霊竜(エレメンタルドラゴン)を失ったミリムの話相手兼お目付け役兼ムードメーカーのつもりだった……　お目付け役としての役目は全く果たせていない、むしろ反面教師になってるのが現状だけど。
ちなみに普段は『５』の姿、つまり普通の猛禽類サイズだが本気を出す時は『１』の巨大な姿にもなれる。
「ねーギルバー、これで今日のお仕事終了でしょ？　それならご飯食べに行こうよー、アタシお腹ペコペコなのよさ！」
「グルルル」
俺がお説教をしていると後ろから声をかけてきたのは、元精霊女王で今は掌の上に乗る大きさの妖精となったラミリスと、そんな彼女を頭の上に乗せた黒い豹。
ラミリスはあの一件の後、なんか面白そうという理由で俺とミリムにくっ付いてきた。実は妖精に零落する前の精霊女王時代から人間の文化や生活に興味があったらしい。しかしその立場上気軽に人間

社会に飛び込むことができなかった為、これ幸いと同行を申し出てきたのである。俺としては断る理由はないし、ミリムの話相手や同性の友達は必要だと思っていたのでむしろありがたかった。妖精の身になってしまったので戦闘能力には期待していない、冒険者パーティーのマスコット的な存在だ。

黒い豹は『シャドウ』。グリフォンと同じで能力（スキル）『地獄之王（ザ・キングオブヘル）』を用いてレッドオーブと引き換えに召喚した悪魔。基本は黒い豹の姿をしているが、その身は実体のある『影』の悪魔で体を自由自在に変化させることが可能。豹の姿でいる時があるからか臭覚が鋭敏なので今回の盗賊団討伐にはアジトの捜索を担当。

こいつもＤＭＣではグリフォン同様『１』では敵として、『５』では味方として登場するキャラクター。勿論、グリフォンと同じようにミリムの為を思って召喚、そばにいさせている。

だが、上級悪魔――ボス敵を務めたグリフォンと違いシャドウは中ボス的な扱いの雑魚敵だったので、最初から名持ちで唯一の個体であるグリフォンとは悪魔としての格が違う。明確な差が出てしまう。その為、召喚時は通常よりも多くのレッドオーブを注ぎ込み――それこそボス敵を召喚するレベル――その甲斐あって通常種を遥かに上回る特殊個体として顕現し、更に俺が『シャドウ』と名付けをしたことで漸くグリフォンと同格となる。種族名をそのまま固有の名前にする、『猫』に『猫』って名前を付けるネーミングセンスの欠片もない所業であったが、当の本人（悪魔）は喜んでるし『シャドウ』はやはり『シャドウ』と呼ぶべきだと考えるので、これでいいのだ！（グリフォンもシャドウのことを『猫ちゃん』って呼ぶし）

ちなみに放っておくとペチャクチャ喋りまくり喧しいことこの上ないグリフォンとは反対に、シャドウは全く喋らない。低く唸ったり、たまに吠える程度。意思がない訳ではなく、単にそんなもんなだけである。なのでグリフォンが通訳してくれる。

体を好きな形状に変化させる能力を活かし、人間の『手』を模した触手を生やして道具等を使いこなせるのが特技で自慢らしい。実際、炊事や洗濯、掃除等の家事は俺よりもできる。たまに力加減を間違え

て物を壊すミリム、お人形サイズで自分だけでは何をするにも困ってしまうラミリス、鳥のグリフォンという面子のお世話をするにはなくてはならないオカン的な存在だ。黒豹形態時は肌触りのいいモフモフなので癒し担当でもある。
「まあいい。事後処理とギルドでの手続きを終えたら飯にする」
パンッ、と手を叩いてお説教を終わりにする。
「盗賊団のリーダーの首が無いのだがどうするのだ？」
「リーダーの首無し死体とそれ以外の連中の首を全部ギルドの玄関前に飾った上で俺がギルドマスターに話をつける。これで文句は出ないだろう」
「アンタその発想で文句出ないとか頭おかしいんじゃないの？」
「イーッヒッヒッヒ！　何処の蛮族だよ!!」
「グルル」
ミリムの疑問に答えたら、ラミリスが苦言を呈しグリフォンがケタケタ笑いシャドウが呆れたように唸る。
「もう！　いつもグリフォンを反面教師にしろって言ってるギルバが一番反面教師なのだ!!」
何気に傷つく一言を……　!!
しかし、ミリムは今の生活が楽しいとばかりに輝くような笑みを見せてくれている。
あの日から、笑顔の絶えない日々が続いていた。
彼女の笑顔を守り続けるのが今の自身の使命なのだ。
もう誰も死なせない、失わない。今度こそ守ってみせると心に誓う。
亡き友の為に、彼女の為に、そして何より自分自身の為に。

原初の悪魔達　前編

クリフォトの樹と融合し玉座の間に座り触手に全身を絡まれた状態で、随分久しぶりにクリフォトの種を蒔いたな、と思い記憶を探ってみれば前回から百年以上経っていたことに驚く。

前回。つまりヴェルダナーヴァとルシアが死んだ原因となった国を滅ぼしてから、約百年。国一つ滅ぼせば人類は大規模な戦争を百年は控えるらしい。百年持ったと見るべきか、百年しか持たないのかと見るべきかは判断しかねるが。

勿論、クリフォトの樹を生やすに値しない小規模な戦争、小競り合いや紛争なんてのはしょっちゅうあるので、人類全体が一切戦争しないなんてのはないものの、抑止力という点ではやはりそれなりに効果があるらしい（今更感が酷過ぎる）。

で、その人類の中でも上手い感じに領土拡大を成功させているのがルドラの国――ナスカだ。

友人である彼は人類の中で唯一、俺がクリフォトの種を蒔く大まかな条件等を理解している。その為、その条件を満たさないギリギリのラインを見極めて戦争し、勝利を重ねて版図を広げてきたのだ。大したもんだと思う反面、大規模な戦争を勃発させると俺が介入するのを知っているからか、彼の国は小規模な戦争を年がら年中している修羅の国と化してしまい、そのことについて僅かに申し訳ない気持ちがあったりする。

なので、戦争しているのがナスカではなく、しかも大規模なものだったりするとこちらも気兼ねすることなく種を蒔き樹を育てることができるので、とても気が楽だ。

つっても、樹と融合し玉座の間でふんぞり返る段階になると、やることなくて暇なんだけどね。

なので種を蒔いてから果実を食うまでの一ヶ月間はドッペルゲンガーを使っていつも通りリモート冒険者活動だ（アリバイ工作含む）。冒険者パーティー『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』は今日も元気に首を狩る。

冒険者パーティー『Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ』といえば、ここ最近でちょっとした騒ぎがあったのである。
ラミリスが妖精になったことにより寿命ができていた事実が発覚。だからつい数年前にポックリ逝った。最初はお別れに涙したが、暫くして「ジャジャーン!!」と転生して戻ってきたことに俺の涙を返せと言いたくなった。本人曰く、どうやら記憶を継承しながら転生を繰り返す存在になったらしい。そういうことはもっと早く言いなさい、と友人を亡くした（字面的に間違ってはいない）と勘違いした俺とミリムとギィ達は彼女に説教し、ラミリスと特に仲良しのシャドウもこれにはご立腹。怒りながらも再会を喜びつつ彼女をベロベロ舐め回したのは言うまでもない。復活に憎まれ口を叩くグリフォンの口調がやけに嬉しげだったのが印象的だった。
閑話休題。
クリフォトは世界的に有名だ。俺がそれだけやりたい放題やったというのもあるが、兵の総数が十万を超える大規模な戦場じゃないと発生しないし（前回は例外）、発生しても一ヶ月放って置けば勝手に枯れる。人間的には数十年に一度の天災扱いで、同じ天災扱いのヴェルドラとはヘイトの集まり方に雲泥の差がある。
一度発生すると大量の死者が出るが、その戦場に参戦した者達とその関係者を除けば被害らしい被害は出ない。
世間の一般常識的には、クリフォトの樹が発生したら放置が一番、という認識が罷り通っていた。
まあそれでも、腕試しや名声を求めて襲来する向こう見ずな方々がたまーにいらっしゃるので盛大に歓迎してあげるが。

しかし今回は毛色が違った。
「侵入者？」
ドッペルゲンガー側の俺が本日の冒険者稼業を終え、ミリム達にご飯を食べさせてから寝かしつけが完了した後のタイミング。
クリフォトの樹に侵入者を感知。しかも人間じゃない。

ギィ達と同じ気配。この世界の悪魔だ。
「え？　なんで？」
初めて悪魔がクリフォトに侵入してきたことに驚き思わず疑問を口にしつつ、いつの頃からかできるようになっていた樹の任意の場所に眼を作り出す能力で視てみれば、更に驚くことになる。
「全員同じ顔の小人？　分身体、か？」
独り言の通り、数名の侵入者は全員が同じ顔で、小人のように小さい姿をしたのがいた。なんとなくだが複数の分身体を見る限り、そういうことに特化した能力持ちなんだろうか。
その顔は年端もいかない少年、小学生くらいだろうか？　に見える。灰色の髪が特徴的で、幼い顔立ちではあるものの整っておりショタコンが今この光景を見たら「一人くらい連れ帰ってもええやろ」と誘拐してしまうだろう。そんな感じの小人が数名、クリフォトの内部を興味深そうにキョロキョロしながら進軍してくる。
薄暗くて禍々しい雰囲気のクリフォト内部を歩く少年的小人数名。R指定のダークファンタジーにメルヘンのキャラクターが迷い混んだかのような光景がミスマッチ過ぎてなかなかにシュールだぁ。
おまけにその表情が疲れ切ってる。まるで上司の無茶振りに何年も付き合わされてすっかり仕事に対して諦観してしまった中高年のおっさんみたいに疲労が滲み出ているし、纏う空気も苦労人特有のそれ。
「何しに来たんだこいつ？」
つーか誰？
ギィの眷属の赤、レインの眷属の青、ミザリーの眷属の緑とは異なる系統の悪魔だというのは分かる。そもそも彼らの眷属であればクリフォトに不用意に近づいたり侵入してきたりなんてことはない。もしそうなら事前に連絡があるだろうし。
そもそもこの世界の悪魔達ってＤＭＣのクソ悪魔共と異なり、上位者に対して非常に礼儀正しく、性格も真面目なのが多い。白氷宮内で見掛けると凄く畏まって挨拶されるしな。彼ら曰く、俺は自分達の王と対等な友人関係でありお客様なので敬意を払って対応するのは当

然とのこと。
だとすると残る白、黄、紫、黒の系統だろうか。
「……今まで縁がなかったんだよなー」
赤、青、緑の系統とはずっと付き合いがあったが、それ以外の系統とは全くない。
どいつもこいつも癖が強いから、もし付き合いを始めるなら覚悟した方がいいとギィ達からは言われていた。
たまたまクリフォトの樹を見掛けたから興味本位で侵入してきたのか、何か目的があるのか。
考えても答えが出る訳でもないし、俺は侵入者が玉座の間に来たら直接聞けばいいと思い直し待つことにした。

侵入者の小人みたいな少年悪魔くんは道が別れる度に分身を増やして二手に別れて進み続ける。丁寧にマッピングでもしてんのかね？　って思うくらいにその歩みは慎重だし警戒を怠っていない。
が、結局玉座の間の前で別れた分身体全員と合流を果たし、侵入を阻む罠や敵がいなかったことに安堵するよりも、折角労力を割いたのに道中何もなければどの道も行き先は同じということにがっくりしたらしい。暫く四つん這いになって動かなくなってしまった。
四つん這いのままの小人の集団が消えると同時に、一人の少年――普通の子どものサイズ――だけが残される。恐らく本体なのだろう。
耳を澄ませば「もうやだ」「帰りたい」「疲れた」「何もないのにヤバい妖気（オーラ）だけビシバシ感じる」「この先に絶対ヤバいのいる」「行きたくない」「クリフォトなんて一ヶ月もすれば勝手に枯れるんだから放っておけばいいのに」「何故私だけいつも損な役回りを」とブツブツ愚痴っている。
……なんか普段から苦労してるのを察してしまう内容に変な笑みを浮かべてしまう。
愚痴の内容から本人は嫌々クリフォトに侵入ということがよーく分かった。そして彼に侵入するよう命じた者がいるということも。

これは是非とも彼から話を聞かせてもらわねばと思い直すも、玉座の間の前から彼は一向に動かない。
「……帰りたい……でも何もせず帰ったらお仕置きが……帰りたくない……でも進みたくない……やっぱり帰りたい」
来た道を戻ろうとして足を止め、踵を返して進もうとするがまた足が止まり、再び踵を返して来た道を戻ろうとする……というのをずっと繰り返している。
彼、鬱病なのでは？　大丈夫か？　かつてクリフォトの樹に侵入してきた者達の中で、これほど憐れみを誘う者はいない。
暫くそっとしておこう。そう結論付けると放置を決め込む。

三時間後。
コン、コン、という控え目なノックの後、玉座の間の外からゆっくりと開けられる扉。
肉食獣に怯える草食獣みたいな雰囲気でおっかなびっくりしながら顔を出す少年。
俺はすかさず声を掛ける。
「ようこそ、招かれざる客人よ。漸く覚悟が決まったか？」
「し、失礼します」
震えた声で挨拶してくる少年は、やはりその端正な顔立ちからとても悪魔とは思えない。だが直接肉眼で確認し、その気配を間近で感じて確信する。ギィ達と同じこの世界の悪魔でありながら、ギィ達の眷属ではない。少なくとも白氷宮では見た顔ではない。白か黄か紫か黒の系統の悪魔で間違いない。
「まずは自己紹介だ。俺はユリゼン、この樹、クリフォトの主、ユリゼンだ」
「……これはご丁寧に。私は原初の白（ブラン）に仕える名も無き一介の悪魔でございます。以後、お見知りおきを」
優雅な動作でお辞儀をする少年。
思った通り、ギィ達の眷属ではなかったか。
しかしあれだな。意外とあっさり自身の系統を教えてくれたな。

実は聞いても教えてくれないんじゃないかと勝手に思ってたのはここだけの秘密だ。

さて、自己紹介も終えたので本題に入ろう。

「それで、原初の白に仕える名も無き一介の悪魔がこのクリフォトに一体何の用だ？　調べてもらった通り、ここには俺しかいないし、何も無いが？」

嘘ではないが事実でもない。クリフォトは人間の血を吸って成長し、頂上――最下層に果実を実らせる。それ専用の空間と樹は早い段階で用意される。後は果実が成るのを待つばかりな状態だ。なので、まだ何も無いのは確かだが、いずれは禁断の果実ができあがる。

その果実を食らえば絶大な力が手に入ることを考えれば、それを欲する者は人魔を問わないだろう。単に、果実に関する情報を俺が誰にも漏らしていないだけ。きっと知られたらクリフォトには連日人間達や魔物の群れが押し寄せるに違いない。

勿論、果実のことは今後も俺だけの秘密、いや、俺と俺の眷属だけの秘密だ。グリフォンとシャドウは俺の能力によって召喚されたからか、当然のようにクリフォトの実について知っていた。この件が他言無用であることも。

彼の返答次第では戦闘も辞さない。しかしなるべく穏便に済ませたい。原初の白の一派と揉め事などゴメンだ。負ける気はしないが、ひたすら面倒臭そうだから。

ギィ達から聞いただけの話ではあるが、原初の白はプライドがやたらと高いワガママ女とのこと。癇に障ることがあると配下すら滅ぼすらしい。この情報だけで既に癖が強い。そんな人格破綻女と関わるなんて勘弁願いたい。

さあ？　原初の白の配下くんはどう出る？

俺は相手の出方を窺う。

「その、ユリゼン殿にとってはあまり関係ないと思われるでしょうが、この地は我が主の支配領域でして……」

配下くんはその顔に疲労と苦悩を浮かばせながら語る。

原初の白（ブラン）はこの大陸の東側、つまりルドラの国のナスカ近隣を根城にしていた。
今日も今日とて配下共をこき使い他の原初（紫と黄）との勢力争いに精を出していたら、クリフォトの樹が自身の土地に突如生えてきたではないか。
あら？　お庭に突然素敵な植物が。でも困ったわ。ワタクシ、庭師にこんなことを頼んだ覚えがないのに……　まあ一ヶ月も放置すれば勝手に枯れるしそのままでいいかしら。
と思って静観を決め込んでたら、暫くして不法侵入してきた原初の黒（ノワール）が煽り口調で挑発しまくります。
おや？　自身の支配領域にクリフォトが我が物顔で巣食っても顔色を変えないとはあなたらしくないですね？　ああ！　ネームドになっていなければ受肉もしていないあなたではクリフォトから放たれる妖気（オーラ）に気圧されて一ヶ月間部屋の隅で膝を抱えてガタガタ震えているのがお似合いでしょうクフフフフ。
ザッケンナコラー！　スッゾオラー！　馬鹿野郎お前ワタクシは勝つぞお前!!　ということでまずはあなた責任者に文句言ってきなさい!!
……　ええ（困惑）。

ということらしい。
まさか原初の白（ブラン）だけではなく原初の黒（ノワール）まで関わってたとは予想外だ。
でも思い返してみれば、ギィとの出会いもクリフォトの樹が切っ掛けだったんだよな。世界は違えど同じ悪魔だからか、魔界樹であるクリフォトって悪魔だとやっぱり気になる存在なのだろうか。
「そちらの事情は分かったが、生憎クリフォトは一度発生させたら枯れるまで消えない。それまで待て、としか言えんな」
「ですよねー」
完全に何もかも諦め切った顔の配下くん。クリフォトが枯れるまで待つしかないと主に報告したら、「分かってんだよそんなことは！

それを何とかしてこいっつってんだよこの無能！」と罵倒され折檻でもされるのかな？
「クリフォトは大量の死者が出る大規模な戦場にのみ発生させる。文句があるなら、俺ではなく人間共に言うべきだな」
「それならここに来る前に終えております。自軍も敵軍もクリフォトに潰され全滅したことを知って皆青い顔でした。いい気味です」
当時のことを思い出しちょっと嬉しくなったのか配下くんが邪悪に笑う。
が、すぐにｆｘで有り金全部溶かした人の顔みたいになり、「うーあーこのまま帰ったら確実にお仕置きだー」と呻く。
……　なんか不憫に思えてきたな。そんなに原初（ブラン）の白って配下に対して厳しいの？　同じ原初のギィ達が配下達に厳しくしている場面を見たことないから余計に可哀想だな。
「……」
丁度暇を持て余していたし、ギィ達以外の原初に興味がないと言えば嘘になる。彼らから聞いた他の原初の話も、現段階ではその通りの人物なのかそうでないのかも判別がつかない。だってかなりこき下ろした感じだったし。
少なくとも原初（ブラン）の白と原初（ノワール）の黒はクリフォトとその主の俺に興味や関心はあるみたいだ。ならば招待してその面を拝ませてもらうのも悪くない。
「ギィ、レイン、ミザリーとは昔から交流があり、何度か戦ったことがあるが」
「え、はあ……」
「他の原初とはまだないな」
「……！」
「言いたいことがあるなら、配下なんか寄越さず自分で直接言いに来い」
それから、と続ける。
「もし俺に勝てたなら、クリフォトの秘密を教えてやる」
「クリフォトの秘密、ですか？」

「ああ。俺以外に誰も知らない、クリフォトの秘密。俺がクリフォトを発生させる真の目的だ」
「真の目的……」
ここで邪悪な笑みを忘れない。
たとえギィ達と同格だろうと負けるつもりは更々ない。暇潰しになればそれでいい。精々楽しませてもらおう。
「一語一句漏らさず、そのように伝えさせていただきます」
「うむ」
深々と頭を下げる配下くん。
「キミも大変だな」
「お心遣いに感謝します」
顔を上げ最後に乾いた笑みを見せ、配下くんは転移で消えた。
残された俺は一人、初めて会うギィ達以外の原初がどんな連中なのか想像して待つことになる。

そして待つこと数日。やって来たのはクリフォトの樹への核撃魔法だった。
「なかなか激しいノックだな」
ドカーン！　バカーン！　と遠慮など一切せず爆撃しまくってくれてるアンポンタンが外にいる。
原初（ブラン）の白っていきなりこういうことする奴なの？
とりあえず面を拝む為にクリフォトの外側に眼を作って覗いてみれば、そこには金髪の女の子が笑いながら核撃魔法を放っている姿が。
誰だよ。
原初（ブラン）の白は白髪と聞いている。金髪とは違う。
金髪の女子高生みたいな可愛い見た目の癖してやってることはと

ち狂ったテロリストよりも質(タチ)が悪い。
とにかくクリフォトの樹に核撃魔法はやめて欲しい。
「誰だか知らんが調子に乗るな」
虚空から取り出し頭の上に載せるは『Ｄｒ．ファウスト』。テンガロンハットの形をした魔具で、ＤＭＣ５のダンテ専用の銃器にカテゴライズされる武器。
レッドオーブを消費して敵にダメージを与える、というシリーズでも特異なタイプの武器であり、消費するレッドオーブの量が増えれば増えるほど火力も増す。
帽子を装備すると自動で赤いマフラーが首に巻かれるのだが、このマフラーが所持レッドオーブの残量を示すメーターの役割を担ってたりする。
核撃魔法を今もなお撃ちまくっているこいつにＤｒ．ファウストの技『レッドホットナイト』をくれてやる。
『レッドホットナイト』は、簡単に一言で言えば隕石落とし。メテオである。大量のレッドオーブを消費する代わりに巨大な隕石を落とせる。その威力は最大で、最高難易度のボス敵ですらＨＰが一瞬で溶けるレベル。
帽子の鍔を左手で摘まみチャージ開始。
レッドオーブなんていつの頃からか使わずに余らせてばかりだから、こういう時に派手に使うに限る。
チャージしてる間に何発もの核撃魔法を樹に撃ち込まれるが、それに構わずチャージをし続けてから、
「レッドホットナイト!!」
発射!!
天から降り注ぐ赤く巨大な隕石の群れが、金髪の女の子に命中。大爆発を起こす。
「ぐぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
金髪の女の子が地面に叩きつけられてもなお隕石の群れは降り注

ぐ。その度に連鎖的な大爆発が発生、彼女の悲鳴は掻き消され、やがて聞こえてくるのは爆音のみ。
「……」
爆音が止んでから数分待ってみるが、特に何も聞こえてこないので樹への攻撃は止めてくれたらしい。
それとも今のレッドホットナイトでくたばったかな？
まあ、なんでもいいや。
全く、核撃魔法撃ってくるなら俺に直接撃ってこいってんだ。
次に変なことしたらドッペルゲンガーを向かわせてキャバリエーレで轢き殺してやる。

「原初（ジョー）の黄（ヌ）、大丈夫？」
「……　し、死ぬ」
「キミ、魔素で作った仮初めの体が崩れかけてるじゃないか」
「樹の中に入る前の時点でその体たらくとは全く情けない。あなたは一体何しに来たんですか？」
「うるさい!!　それにしても今の魔法は何だ!?　全然気づけなかったぞ!!」
「威力も凄まじかったわ。クリフォトの主ユリゼン、どの系統にも属さない謎の悪魔、一体何者なのかしら」
「それを確かめに来たのでしょう？　ホラ、さっさと中に入りますよ。あと原初（ジョー）の黄（ヌ）はもう帰りなさい。戦闘ができない悪魔などいても邪魔なだけです」
「戦闘はできないがまだ帰らないぞ！　せめてユリゼンって奴を一目見るまではな！」
「勝手にすれば？　ボクの足を引っ張りさえしなければね」
「ワタクシの邪魔もしないで欲しいわ」
「クリフォトの樹の秘密……　クフフフ、樹という点である程度予想はできていますが、一体どのようなものなのか楽しみです」

バカンッ！　と勢いよく玉座の間の扉が蹴破られる。
蹴りを入れたのはさっきの頭がおかしい金髪核撃魔法娘だった。まだ生きていたのか。
そいつを先頭にぞろぞろと入ってくるのは一人の男性と二人の女性。
全員で計四名。原初の白（ブラン）と原初の黒（ノワール）だけかと思っていたので予想よりも多い人数に少し驚く。
「招待してもらったからわざわざ参上してあげたわ。ワタクシは原初の白（ブラン）。あなたがユリゼンで間違いないかしら？」
白髪で紅い目をした深窓の令嬢みたいな美女が四人を代表するように一歩進み出て口を開く。
「歓迎しよう、お客人。俺はユリゼン、クリフォトの主ユリゼンだ。ご友人も連れてきてくれたようなので、紹介してくれると助かる」
俺の返答にいち早く反応したのは頭のおかしい金髪核撃魔法娘。
「私は原初の黄（ジョーヌ）だ！　さっきはよくもやってくれたな！　そのせいでこっちはもう仮初めの体を維持するだけで精一杯なんだぞ！」
知らんがな。というか仮初めの体って……　よく見たら全員受肉してないじゃん。え？　あれ？　なんで？
頭の上に疑問符を浮かべるこっちをよそに、女性の中で一番幼い外見の娘が言う。
「ボクは原初の紫（ヴィオレ）、よろしく」
原初の紫（ヴィオレ）――紫色の髪をサイドポニーに纏めた少女はにこやかに笑って軽く手を上げた。
最後に貴族風な格好をした黒髪の男性が優雅な仕草で一礼する。
「私は原初の黒（ノワール）。よければクロとお呼びください」
昔ギィが冥界で引き分けたのがこいつか。確かに纏う雰囲気が他の三人とは違う。要警戒だな。
ま、それはそれとしてなんでネームドでもなければ受肉していないのか質問してみるか。
「お前達に質問だが、名前と肉体がないのは何か理由があるのか？

ギィ達は初めて会った時点で既に名を持ち受肉していたから、他の原初も当然そうなのだと思っていたが」
　四人が揃って不機嫌そうに顔を顰めた。名無しの体無しを指摘されたからか、それともギィ達の話を出したからか、もしくは両方か。
「……　あなたとギィの関係を聞いても？」
「友人だ」
　訝しむような原初の黒（ノワール）の質問にノータイムで返答すれば、彼は何かショックを受けた様子で「馬鹿な！　奴に友人だと!?　正気ですか！」と非常に失礼なことを口走っていた。
「ボク達、ボクと原初の白（ブラン）と原初の黄（ジョーヌ）はね、ゲームをしてるんだよ」
　と語り出すのは原初の紫（ヴィオレ）。
「ゲーム？」
「そう。ボク達の中で誰がより良い肉体を得られるか、というゲームさ」
「つまり、その気になればいつでも受肉できるが、他の面子に自慢できるようなより良い肉体を得る為に選り好みをしている、ということか。ゲームというくらいなんだから、相手への妨害もしていたりするのか？」
「その通り。理解が早くて助かるよ」
　面白いことを考えるな。俺がこいつらの立場だったらそんなこと考えずにさっさと受肉を終えているだろう。だが彼女達はその過程を楽しんでいるのだ。時間に縛られない長命種らしいゲーム。彼らと同じ長命種の仲間なのにどうしてもせっかちな人間の考え方が出てきてしまう俺にはできない遊びだった。
「ん？　クロは違うのか？」
「私は強くなり過ぎると戦いがつまらなくなってしまうので、受肉にはあまり興味がありませんね」
　これもまた珍しい考え方だ。悪魔族（デーモン）って強さこそ至上！　みたいな連中だからどいつもこいつも躍起になって力を求めている。いや、悪魔族（デーモン）だけじゃなく魔物もそうなんだけど。俺だって力こそパワーだと思ってるし強くなるのが趣味というかライフワークのようなも

のだし、その為に定期的にクリフォトの樹を生やしてるようなもんだし。
　冥界時代では負けなし、唯一ギィが引き分けた存在、というだけでかなり強いはずだが、当の本人は強くなることに興味がないとは、なかなかに変な奴である。
「なるほどな」
　なんか新鮮な気持ちになる。まさか大抵の悪魔族(デーモン)が喉から手が出るほど欲しがっている肉体や名前を、より良いものを得たいということで選り好みをしたり、強くなり過ぎると戦いがつまらなくなるという理由で消極的だったりと、目から鱗な話が聞けてちょっと嬉しくなる。知らない人(悪魔)と話すだけで色々考えさせられるというのは、久々な気がする。これだけでも彼らにご足労いただいた価値があるというもの。
「今度はこちらから。あなたは何故クリフォトの樹を数十年に一度の間隔で発生させているのですか？　何か目的があるのでしょう？」
　興味深そうに質問してくる原初(ノワール)の黒にどう答えるべきか少し考え、果実に関すること以外ならある程度口にしても問題ないか、と結論付けて答えることに。
「人間は贄だ。クリフォトの樹を育てるには大量の人間の血が必要になる。だがやり過ぎると人間なんぞあっという間に絶滅してしまう。ならば人間が増え、自ら贄を用意するまで待てばいい。大規模な戦争が勃発した時を狙ってクリフォトを育てれば戦場以外に死者は出ない、大量の血が手に入るが人間の全体数はそこまで減らない、これが数十年に一度という頻度でクリフォトの樹が発生する理由だ」
　クリフォトが人間の血を啜る吸血樹、というのは周知の事実。我ながらなかなかいい説明ができたのではないか？
　と自画自賛していると、原初(ノワール)の黒は顎に手を当て思案顔で更に質問してくる。
「前回の、百年以上前の時は戦場ではなく国一つ滅ぼしていたようですが、それは特例ですか？」
　ヴェルダナーヴァとルシアが死んだ時のことを思い出し、自身の顔

から表情が抜け落ちていくのが分かった。
俺の変化に気づき「おや？」と疑問符を浮かべる原初の悪魔達に説明しておく。
「あの国は滅んで当然だ。我が友、星王竜ヴェルダナーヴァとその妻ルシアを殺害した愚かな人間共、百回滅ぼしても足りん」
「「「っ!?」」」
俺から放たれる怒りと憎悪混じりの妖気（オーラ）よりも言った内容に驚いているようだ。「まさかヴェルダナーヴァ様が……」とか「そんなことが」とか「だったら滅んで当然じゃないか」とか口々に呟いているのが聞こえた。
「元々、クリフォトによる大量虐殺はヴェルダナーヴァから認められていた。一度起こせば人間は暫くの間は大規模な戦争をしなくなる、と。抑止力として期待されていて、実際その通りだった。前回のはまあ、例外中の例外だ」
「そうでしたか」
ひとまず納得したような表情になる原初の黒（ノワール）だったが、まだまだ疑問が尽きないのか数秒考え込んでから「まだよろしいですか？」と小さく挙手した。
何こいつ、知識欲の塊なの？
「どうぞ」
「クリフォトには大量の人間の血が必要、戦場でのみ発生するのはヴェルダナーヴァ様の意向で抑止力としての役割を果たしている為、概要については理解しましたが、分からないことがあります」
「何だ？」
「先程、人間はクリフォトを育てる為の贄、という風に表現しましたが、クリフォトが育ち切ると何か良いことでもあるのでしょうか？」
……核心に触れてきやがったな、原初の黒（ノワール）め。
その隣の原初の白（ブラン）がハッとした顔になる。
「良いこと？」
「良いことって何なのさ」
よく分かってないのは原初の黄（ジョーヌ）と原初の紫（ヴィオレ）の二人。

そんな二人にこれ見よがしに溜め息を吐き、呆れたような嘲笑うような視線を飛ばす原初(ノワール)の黒は、俺が黙っているのをいいことにペラペラと持論を展開。
「察しが悪いですね全く。仕方がないので私の考えを教えてあげましょう。いいですか？　クリフォトは植物なのですよ。本日外部と内部から見て、私が調べた限りその組成や組織は確かに他の植物とは異なる点も多々ありましたが、共通する点も非常に多い。つまりクリフォトは人間の血を栄養にしている、という特異性を持つ植物なのです」
「そんなこと最初っから分かってるが？」
「だから『樹』って言われてるんだろ」
ぶー垂れる原初(ジョー)の黄(ヌ)と原初(ヴィオレ)の紫を原初(ブラン)の白が手で制した。
「種が蒔かれて発芽し、葉が茂って花を咲かせ、やがて種を残して枯れる、そういうサイクルがクリフォトの一ヶ月間にも存在している。そういうことでしょう？」
「ええ、原初(ブラン)の白の言う通り。私の直感がこう言っているのです。クリフォトは発生から一ヶ月経過して自動的に枯れるのではない、あくまでも植物としての一生、ライフサイクルを終えたが故に枯れるのだと。『戦場に発生して血を啜る』点と『強大な悪魔が根城にしている』点に誰もが目を向けていた為、植物由来のライフサイクルを見落としていたんですよ。恐らくは血を吸って得た養分を用いて種なり果実なりを生み出し、役目を終えて枯れる。そうに違いありません」
うわあ！　凄い着眼点してるなこいつ！　最早百点満点くれてやってもいい、ど真ん中のストレート、正解だよ正解！　仰る通りなんですわ!!
もうこの時点で全部ゲロッてもいいような気がしてきたけど、自信満々のドヤ顔で「どうなんですか？」と視線で訴えてくる原初(ノワール)の黒に頷く前に最後の無駄な足掻きをさせてもらう。
「……　そこから先は答えられない。クリフォトの秘密に関わるからな」
「では、こんな話をしましょう。クリフォトの発生と同時に感じられ

る妖気(オーラ)が、時間の経過に伴い徐々により強く、より大きくなっていく。そして樹の発生から一ヶ月が経ち、樹が枯れると同時に妖気(オーラ)が更に強大なものとなり、やがて消失する。この妖気(オーラ)の異常なまでの上昇、クリフォトの発生時には常に起きているようです……　樹が血を吸って得た養分は、ユリゼン、最終的に全てあなたに注がれているのではないですか？」

「……」

沈黙を貫く時点で肯定しているようなものだ。

俺の反応や様子に原初(ノワール)の黒の笑みが深くなる。確証はないが確信はある、そういう感じだ。いや、俺の態度で確信を得たというのが正しいか。

原初(ノワール)の黒と呼ばれる原初の悪魔による名探偵ぶりは続く。

「ユリゼン、あなたがどの系統にも属さない理由はそこにあると私は考えます。恐らくあなたは悪魔でありながら突然変異的な存在として生まれた。クリフォトを用いて人間の血を得ることで強くなる、独自の進化手段を持った唯一無二の悪魔として。そして独自の進化を遂げたことで、我々と同じ悪魔族(デーモン)であることは変わらないもののどの系統にも属さなくなった。考えてみれば当然ですよね？　独自の進化手段を持つ突然変異体が、わざわざ七色の内のどれかの系統に属する必要はありません。むしろ新たな系統として独自の道を進めばいい」

怖いくらいに何もかもが合ってるんだけど。

勘が鋭くて優れた観察眼と洞察力があって頭良いとか、一番敵に回したくないタイプじゃん。

ここまで見抜かれてると、いっそ清々しいものである。

原初(ノワール)の黒は変人で気まぐれ、原初の中でも特に変わり者、強いのは認めるけど何考えてるのか分からなくて油断できないアホ、というのがギィ達から以前聞かされた人物像だ。

確かにその通りではあるが、アホに関しては完全にレインの私怨としか思えない。

実際に会ってみて俺の原初(ノワール)の黒への印象は、確かに油断ができな

い、警戒する必要がある相手だとは思うものの面白そうな奴、というものだ。
「……降参だ。クロ、全部お前の言う通りだ」
これ以上は何を言っても無駄だし苦しい言い訳にしかならないので、俺は早々に白旗を上げる。
「まさか俺の出自まで言い当てられるとはな」
「では、やはり？」
「ああ。俺は純粋な悪魔族（デーモン）ではない。種族的には半分人間で半分悪魔、半魔やハーフと呼ばれる奴だ」
「その外見で半分人間なの!?」
驚きの声を上げる原初（ヴィオレ）の紫だったが無理もない。今の俺、クリフォトと融合時はＤＭＣ５のユリゼンと同じ姿なので、青い巨人族（ジャイアント）みたいだし。
変身系悪魔って言えばいいのか、俺は状況によって姿が変わる。普段は人間だがクリフォトと融合時はユリゼンだし、魔人化（デビルトリガー）を発動する際はその時媒介にする魔具によって変身した姿が違う。基本装備を闇魔刀としているので基本はバージルの青い魔人なのだが、リベリオンや魔剣ダンテなどのダンテ専用魔具の場合はダンテの赤い魔人（ＤＭＣ５仕様）、魔剣スパーダの時はスパーダ、真（シン）・魔人化（デビルトリガー）も魔剣ダンテを媒介とする場合はダンテの赤い真・魔人、闇魔刀を媒介とする場合はバージルの青い真・魔人という風に。
ぶっちゃけ、魔人化（デビルトリガー）の際の媒介に使う魔具を切り替える必要はあるが、その気になれば１～５に登場した全ての魔人の姿に変身することは可能だ（ネロのものは除く）。「武器によって変身する姿が変わるなんてなんだか楽しそうですね」とはレインの談……変身願望でもあるのだろうか？　いつもメイドの格好をしてるから、もしかしたらそういう気分になる時があるのかも。たまには可愛い服でもプレゼントして何処かに連れてけば喜ぶか？　散々世話になったし、お礼と気分転換も兼ねて今度誘ってみよう。
「……それで、クリフォトの秘密は見事にクロによって暴かれてしまったが、これからどうする？」

思考が横に逸れたのを慌てて軌道修正しつつ、問う。
本来は、原初の白の支配領域にクリフォトを発生させてしまい、うるせー文句があるなら面出せや、もし俺に勝ったらクリフォトの秘密を教えてやんよで始まったことだ。まさか原初の白と原初の黒の他に原初の黄と原初の紫が一緒とは思ってなかったし、原初の黒がクリフォトの秘密と俺の出自を全部言い当てるとは予想外だった。
正直、クリフォトの樹が鬱陶しいから消せと言われてもそんなことはできないし、たとえできたとしてもやりたくない。それこそ力ずくでやれるもんならやってみろ、という話になってくる。
四人――というか悪魔だから正確な数え方は四柱か――の様子を窺う。
「どうする？　原初の黒がクリフォトの秘密を暴いちゃったから、戦って勝つメリット失くなっちゃったけど」
「そもそも私はもう戦えないからそっちの好きにしたらいいぞ！」
原初の紫の悩ましげな声に原初の黄が何故か偉そうに応じる。
「私はユリゼンと戦ってみたいから戦います。勝ち負けではなく、純粋に彼の力の一端に触れてみたいのです。先程原初の黄を叩きのめした魔法のように、彼の力はまさに未知。クフフフ、興味が尽きません」
原初の黒はやる気だ。戦闘狂的な笑みに知識欲を含ませたような顔になった。
勝負に関しては、まあ十中八九俺が勝つだろう。ギィを基準に考えると、あいつはネームドで受肉済みで覚醒済みの究極能力持ちだが、俺の方が勝負は勝ち越してる。対する目の前の原初達は名無しで受肉しておらず未覚醒、恐らく究極能力は保持していないだろう。束でかかってきても負ける気はしない。
「ワタクシもやるわ。前々から人間達で騒がれていたユリゼンの実力に興味がないと言えば嘘になる。それにここはワタクシの支配領域ですもの」
「……　折角来たんだから、何もせずに帰るのは味気ないかな。ボクもやるよ」

原初の白（ブラン）が言外に「次からはワタクシの支配領域にクリフォトの樹なんて発生させない」と言っているような気がする。ここまで足を運ぶ原因となった原初の黒（ノワール）に言われたことを気にしているのか？　もし次以降また彼女の支配領域で種を蒔くことになるのなら、一応は事前に連絡を入れた方がいいのかもしれない。
原初の紫（ヴィオレ）は首を傾げて顎に人差し指を当て、少し考える仕草をしてから旅行先でお土産を買うかのような気軽さで言う。
「決まりだな」
　閻魔刀を召喚し、赤い水晶体――バリアーに変化させて戦闘準備を整える。
「名無しで受肉していないのであれば、ハンデが必要だろう？　三人まとめてかかって来い。俺を一度でも傷つけることができればそっちの勝ちでいい」
　この時俺は、当然の気遣いとしてハンデ戦を提案したつもりだった。
　くどいようだが目の前の原初は名無しで受肉してなくて未覚醒。現時点のギィとは比較にならないほど弱い。
　閻魔刀バリアーを破って俺に一撃入れられたら負けでいいかな？
　くらいのノリで考えていた。
　が、ここで失念していたのが、彼らは原初の悪魔だということ。悪魔族（デーモン）の王達。彼らは一人ひとりが王であり、頂点に立つ存在だ。そんな彼らの誇りを踏み躙るような言い回しをしてしまったことに、彼らが噴出させる妖気（オーラ）に怒気が含まれていたことで漸く気づく。
「力の差があるとはいえ、三人まとめてかかって来いとは、随分と舐められたものですね……　!!」
「しかも傷をつけたら勝ちでいい？　お前達では傷一つつけることすらできないと言われてるようね。ワタクシ、こんなに虚仮にされたのはいつ以来かしら」
「ちょっと調子に乗り過ぎなんじゃないの、キミ」
「ちっ、戦えればさっきのお返しをしてやれたのに！」
　殺気を漲らせる原初の黒（ノワール）と原初の白（ブラン）と原初の紫（ヴィオレ）、とついでに一人滅

茶苦茶悔しそうにしている原初(ジョーヌ)の黄。
あー、地雷を踏んでしまった。今のギィの強さを基準に考えていたから、無意識に格下扱いしていた。個々の戦闘力じゃなくて、あくまでも『ギィ達と同格』として扱うべきだったのは火を見るよりも明らかなのに、ハンデなんて提案せず普通に順番に戦うべきだったぞ。
……　まあいいか。今更謝っても許してくれそうにないし、三人相手でも負ける気がしないのは変わらない。
原初(ノワール)の黒が俺の力に興味津々みたいだから、お望み通り、圧倒的な力、というのを見せつけてやろう。